

ロンドン・ミラノ滞在記

玉井哲雄



ロンドン・ミラノ滞在記

玉井哲雄



目次

はじめに

ロンドン篇

Bradford

Brussels

ミラノ篇

Cremona

Venezia

L'Aquila

Roma

Genova, Pisa, Lucca

人名リスト

はじめに

1994年4月に東京大学に赴任して比較的時間もない1996年くらいから、当時の文部省の在外研究員派遣制度に毎年応募しては、不合格になることを繰り返してきた。当時の文部省の制度では、派遣期間は50歳以下は6か月以上10か月以内、55歳以下は6か月以内となっていた。だから、初めのうちこそ10か月以内の方に応募したが、すぐに6か月以内に短縮になった。それで資格がなくなる直前の2003年の3月になって、2003年度の派遣が認められたという通知が突然来た。なお、2001年1月の省庁再編により、この時点では文部省は文部科学省に衣替えしている。

申請では2003年の5月から5か月間という予定を出していた。しかし、2003年度というのは微妙なタイミングだった。東京大学では、学内の情報系の分野を統合した新しい組織を作るという計画が1990年代の後半から動き出し、筆者もその設立準備委員会のメンバーとして、計画作りに参加した。それが結実し、2000年4月に情報学環という名前の組織が発足したが、筆者もそこに「流動教員」として加わった。流動教員というのは、情報学環に完全に異動するのではなく、元の所属（筆者の場合は総合文化研究科）に半分は籍を残しながら、流動期間中は本務は情報学環となり、教授会もそちらに属し（しかし駒場の教養学部の教授会には出る）、経理や出張などの事務も学環の事務が担当する。だから、在外研究員の申請も3年間は情報学環から出していたのだが、流動期間は2003年3月で終わり4月からは総合文化研究科に戻るようになっていた。つまり、情報学環から出した在外研究の申請が認められたが、その影響は総合文化研究科の方に直接及ぶということになった。

そもそも6か月以内という規定の期間を、5か月間に遠慮して申請したのは学期に関わる業務のことを考慮したのだが、後から考えたら6か月ぎりぎりの予定を遠慮せずに組めばよかった。しかし、駒場に戻ったばかりですぐにまた5月から出かけるというのもいろいろ支障があり、また大学以外のことでも、この年に日本ソフトウェア科学会の創立20周年の記念大会が9月に予定されていたが、筆者はそのプログラム委員長を引き受けてしまっていたので、出発を秋に延ばすことにした。

滞在先としては、ロンドンのインペリアル・カレッジのJeff Kramerのところで、ミラノ工科大学のCarlo Ghezziのところで決めてはいたが、毎年申請しては落とされていたので綿密に計画していたわけではないし、先方とも話を詰めていたわけではない。しかし、いざ認められてヨーロッパに行くとなれば、やはりロンドンとミラノのどちらにも行きたいという気持ちになった。両者の都市としての魅力だけではなく、ソフトウェア工学の分野でJeff KramerとCarlo Ghezziはそれぞれきわめて活発な研究活動を行ってきており、ICSEを始めとする国際会議や研究機関でも指導的な立場にあり続けている。また多くの優秀な研究者を育て、その人脈は幅広く、学界における影響力が大きい。しかも、どちらも人柄が暖かく親切であり、さらにこの二人が互いに仲がよい。

それですぐに両者に連絡を取り、5か月の期間を半々に分け、前半をロンドンのインペリアル・カレッジ、後半をミラノのミラノ工科大学に滞在することを依頼し、どちらも快く引き受けてくれた。出発は2003年の9月24日、帰国は2004年の2月24日でちょうど5か月間である。

この間、多くの場所を訪れてセミナーで講演するなどの研究交流を行い、多くの人に会った。それらをかなりまめに日記に書いていたが、それを改めて電子化し多少編集の手を加えたのが以下の記録である。もともと日記なのでかなり私的な記載が多く恥ずかしい気もするが、自分としてはこのようなものを残しておくことに意味があるように思っている。出てくる人の名前をリストとして後ろに付けたが、それが70名を超えていることだけ見ても、5か月間にしてはかなり高いアクティビティだったのではないだろうか。JeffやCarloやその他のここに登場する人たちとの交流は、その後も引き続き自分の研究生活の上で大いに有用だった。

直接的な成果としては、この期間に進めていたEpsilonと名づけた研究を論文としてまとめ、帰国後の2004年夏に、ソフトウェア工学の旗艦国際会議であるICSEに投稿したところ首尾よく採録され、翌年5月に米国セント・ルイスで開催された本会議で発表したことが挙げられる。そのデータは次である。

- Tamai, T., Ubayashi, N. and Ichiyama, R.
"An Adaptive Object Model with Dynamic Role Binding,"
Proceedings of the International Conference on Software Engineering (ICSE2005),

St. Louis, Missouri, USA, May, 2005, pp.166-175.

[ACM Digital Library](#).

これだけでなく、2006年には発表した論文の数がとくに多かったのは、在外研修制度のお陰と言えるだろう。

ロンドン篇

2013年

9/24(水)

逗子6:23発横須賀線の車中. さて, 今度の滞在をどのように有意義に過ごそうか?

1. 研究

科研のプロジェクトはマネジメントを中心にやっている感じだが, 時間もあるし, 実質の研究をしたいところ.

テーマ:

- Epsilonモデル
 - 前の論文を見直す.
 - 佐藤のパターンをチェック
 - McJavaとの関係
 - Integration Systemの例題
 - Dining philosophersの例題と並行処理との関連
- 中島震との研究
 - Stack inspectionの勉強
- Jeffグループとの共同研究
- Carloグループとの共同研究

2. 勉強

とりあえず持ってきた本は,

- Computation Theory
- Java Concurrent Programming

3. 執筆

- 情報基礎の教科書
- 藤原正彦のような本が書けると面白いが

4. 文化

- イタリア関係

- イタリア語
- オペラ
- 5. セミナー, 講演
 - role model
 - modeling diagrams
 - evolution

法人化などの変化に直面し、今、大学は大変である。この時期に5か月間、現場を離れのんびりできるのは、恵まれていると言えるかもしれない。教養学部長の浅島さんも、ぼくがいない間に大きな変化があるかもしれないと言っていた。しかし、浅島さんは学部長として総長にも言いたいことを言っているようで、効率一辺倒はおかしい（佐々木総長がカルロス・ゴーンを尊敬しているらしいのは、どういうものか）、諮問会議のメンバーも必ずしも適切でない、教育COE（東大は教養学部が出して通った）のような評価もどういものか（たとえば阪大、一橋が落ちたが、それで世間はランク付け評価をしてしまう）、などの意見を、ぼくと20-30分話した際に、滔々と述べられた。ぼくは浅島さんを見直した。駒場をよくしていこうという情熱も強く感じられた。

この在外は、去年だったらもっとよかった。それなら夏に行けた。去年の情報学環では、ぼくは夏学期に授業を持っていなかった。おふくろも去年なら元気がよかった。夏休みなら美季子ももっと来ただろう。今年はJSSSTの大会プログラム委員長を引き受けた後だったので、その直後に冬に向けて出発することとなった。まあしかし、大会の経験も面白かった。心配はオフクロだけである。

今回はJALの宅配便サービスでカバンを昨日預けたので、楽である。5か月分なので本をたくさん持ってきた。といってもなるべく軽い本にした。この宅配便のサービスも昨日気がついてぎりぎりだったが、東京三菱銀行の渋谷支店に海外で現地通貨で引き出しができるという海外カードを作りに行ったのが22日（月）で、カードを郵送してもらおうと着くのが9/26までは無理と分かり、代理の受け取りはダメというのを頼み込んで、孝子が代理で受け取れるようにした。9/25に代理で受け取ってもらって、9/27に孝子と美季子が来る時に持ってきてもらうという手はずで、これもぎりぎりだった。

JALのクラシックを聴いて感心したことがない。前に一度だけルフトハンザに乗って、その時に聞いたイスラエルの女性クラリネット奏者Sharon Kamの演奏とアルゼンチンのAlvarezに感心し、帰国後両方ともCDを買った。さ

すが、ドイツの航空会社である。ところが今聴いた庄司紗矢香が弾くパガニーニのヴァイオリン協奏曲1番第3楽章には、本当にびっくりした。ズービンメータ指揮、イスラエル・フィル。このヴァイオリンはよい。

Anger Managementという映画を見た。Jack Nicholson.くだらないストーリーだが、楽しませるところはある。それから評判のMatrix Reloadedも見た。荒唐無稽に徹していて、思わず笑ってしまうが、妙に詩的なセリフもある。善玉も悪玉も超能力があるのに、カンフーや剣での戦いやカーチェイスを見せ場にしているのがおかしい。しかし、群衆の乱舞の場面は迫力があり、そこでかかる激しい音楽が興奮させる力を持っている。

9/25(木)

というわけで、長い飛行時間(12時間)は、まあ無為に過ごした。

ロンドンはこのほか良い天気で、気温も快適だ。タクシーに乗ろうかと思ったが、儉約して地下鉄にした。何しろ予約しているMillennium Barley'sというホテルは、Gloucester Rd.駅の真ん前だ。

チェックインし、27日に来る孝子たちの部屋もエキストラベッドを入れてもらうことにした。+30£/dayという。

成田空港の両替がどこも長い行列ができていたので、Heathrowに着いてから両替した。1ポンドが200円で高い。通常の交換レートが180円ぐらいで、上乘せがある。200円だとホテルも高い(今回のシングルがインターネットで取った割引で£85)。しかも名古屋のMarriotよりずっと狭い部屋だ。ロンドン相場か。

4時過ぎにチェックインし、5時前にベッドにちょっと入ったら、そのまま寝てしまった。途中で廊下で男の声がして、Good Morningとあっており、それから風呂を使っている気配がした。そのあとさらに大分眠ってから目が覚めたので、もう朝かと思って時計を見ると、まだ夜中の1時半である。それでも9時間近く眠ったことになる。これでは時差ボケが解消されない。そこで起き出して、ちょっと苦勞の拳句、電話でインターネット接続に成功。

メールの接続を2回やり、spamの整理などをしていたら結構いい時間になった。風呂に入る。部屋の予約は朝食付きでなく、レストランの英国式朝食は、£16.5もする。外に出るとStarbucksがあるが、結構人が入っている。隣に

Burger Kingがあって、中は広いのにほとんど客がない。そこにあえて入ってみた。で朝食メニューとコーヒーを頼んだら、コーヒーマシンが壊れていてできないという。仕方なくコーラにする。卵とベーコン入りのサンドイッチは悪くないが、大きなボリュームで流しているくだらない曲が、曲の良し悪しはともかくとして、音がひどくひずんでいて気分が悪くなる。早々に退散する。

部屋に戻り、ネクタイを付け上着を着る。今日は、Imperial Collegeを訪れてJeffが紹介してくれたAnneという事務の女性に会うのと、アパート探しにあてる予定。アパートを見るのにも、ネクタイをしている方がよいのではないか、と思った。

今日も快晴で気持ちがいい。まず、South Kensingtonまで歩き、そこからSloan Av.を南東に歩いて、Nell Gwynn Houseというのを見つける。立派な構えである。ちょうど今週の土曜日に空く部屋で、今その階を改装中のために音が出るので、週355ポンドにまけるという部屋があるという。同様の部屋を見せてもらったが、十分広く、キッチン、洗濯機、バスなどの設備が整っていて気に入った。場所はChelseaで一等地だし、大学にも近い。

それから大学に行ったが、まだAnneはいなかった。Jeff Mageeもいなかった。そこで地下鉄でEarl's Courtに行き、まずMayflower Hotelを見る。アパート付きだが、ホテルは安いはず。中東系のマネージャーが出てくる。£99/dayの部屋しかないという。結局、アパートには2か月借りられる部屋はない。

次にExhibition Hotelに行く。ここは東南アジア系のマネージャーである。部屋を見せてくれたが、地下で狭く、ダブルベッドが入っているが、それ以外のスペースはきわめて少ない。バスタブもなく、キッチン設備も小さなユニット。あまりの違いに驚く。それで£32/dayというので、安いけれどもとても借りる気はしない。

この2つでは、ほとんどNGHに気持ちが傾いたが、さらに探そうと地下鉄の1週間カードを買い、地下鉄を乗り継いでMarble Archに行った。そのPark West Apartmentsを探し当てるのに、4人の人に聞いた。皆親切だったが、住所が分かりにくい。しかし、訪ね当てたアパートは大きい。ここは部屋としてはNGHの規模と設備だが、改装中でかなりひどい状態。£250/週で安い、見せてくれたもの以外には空いている部屋はないという。

疲れてThe Duke of Kendalという大げさな名前のパブで、ビールとタイ式ビーフカレーの昼食を摂る。カレーは案外いける。

地下鉄でGloucester Rd.まで戻り、大学に行く。今度はAnne O'Neillに会えた。やせ型で目が大きく黒髪の中年女性である。部屋の鍵を用意するまで、Ph.Dを取ってlecturerになりたてのSebastian Uchitelが相手をしてくれるということで紹介され、1時間ほど話をした。Jeffの弟子で完璧なイギリス英語を話す、アルゼンチンの人だという、しかし、4歳から11歳までイギリスに住み、さらに4年前にPh.Dのためにここに来たということで、英語が自然なのは当然である、それでも文化的には慣れないというのが、面白い。ただロンドンはいい街で、多様な人種がいてそれを受け入れているから、暮らしやすいと言っていた。

Basharが時折使うというオフィスに入れてくれて、そこでLANにアクセスしてメール・ベースの仕事をいくつか片づけた。こういう点では今や、世界のどこにいても雑事的な仕事はできる。

5時頃、ホテルに戻る。今日はよく歩いたので、足が重い。部屋でビールを飲み、TVをちょっと見、本を少し読み、食事に出かける。ガイドブックにあるChelsea Kitchenと言うのが今朝行ったNell Gwynnのちょっと先なので、South Kensingtonまで地下鉄で行き、歩いてみることにした。しかし、朝は地下鉄に乗らずに歩いて行ったので、駅からどの方向に行ったらよいか分からない。勝手知ったる道と思って地図を置いてきたので、通りの名前からも見当がつかない。試行錯誤を繰り返した上、この道と思い定めてずいぶん歩いたが、見覚えのある所に至らず、自分でも情けない気持ちになって引き返し、駅の近くのNew Pum Chinese Cuisineという店に入った。白人の中年夫婦ばかり3組の先客があった。海老とアスパラの炒めものは悪くはなかったが、塩が効きすぎだった。その分、旨味が不足に感じる。グラスで頼んだ赤ワインは、物足りないが癖がない。比較的安く済んだ。

9/26(金)

昨夜は10時に寝たが、4時半に目が覚めた。

須賀敦子「ミラノ霧の風景」読了。

ずいぶん前に「コルシア書店の仲間たち」を読んだが、今回、イタリアものとしてこれと「トリエステの坂道」を買った。いずれも白水社から新書版とし

て再刊されている。

須賀敦子の世界は独特である。イタリアに住み、イタリアに受け入れられ、多くの人と出会い、心の交流をし、たくさんの本を読み、翻訳などの文筆作業で日伊の文学に貢献し、それでいて得意になったり浮ついたり知識をひけらかしたりしない澄んだ文章を書く。森まゆみも面白かったが、ああいう軽薄さはここにはない。それでも森はこの本からナポリの話とボルゲーゼ公爵令嬢のカヴァッツア侯爵夫人の家に招かれたときの話(p.129)を、相当詳しく引用している。とくにこの本の「ナポリを見て死ね」の章は、即興詩人でアントニオがナポリに着いたときの描写を13行にわたって引用していて(p.53)、森の本のアイデアもこの辺りから来ているのではないかと思わせる。

しかし著者がイタリアに暮らしてから20年経て書いているせいか、登場人物は皆死んでしまったか、あまり幸せでない晩年を送っているか、行方がわからなくなっていて、人生の淋しさを強く感じさせる。イタリア人の夫の早すぎる死は何度も触れられるが、詳しくは記述されない。その須賀本人も、すでに故人である。

大学で割り当てられた部屋は学生と一緒にの大部屋で、ちょっとがっかりである。これで月1000ポンドも取るのだろうか。しかも、鍵のスペアがこの日はなくて、建物の出入り用のカードのみ渡された。さらに都合が悪いことに、昨日借りたBasharの部屋ではインターネットがすぐ繋がったが、ここは学科の内部ネットワークで、認証登録がいる。それをSebastianがやってくれたが、なぜか繋がらない。

Bashar Nuseibehが来た。金曜はこちらに来る日だという。Sebastianと3人で食事した。院生以上用の大きな食堂がある。大きなfish & chipsを食べてみたが、うまいとは言えない。しかし、BasharとSebastianと気のおけない話をして、楽しく食事した。

同室にSivsattianという背の低い中年のオジサンで、Ph.Dを終了しかかっているのがいる。ソフトウェア開発の経済評価がテーマだそうだ。

Morris Slomanにも会った。彼は9/25,26と、Ubiquitous ComputingのワークショップUK-UniNetというのを主催している。そこでRobin Milnerが話をするというので、Sebastianが誘ってくれて一緒に聴いた。Basharは4時に子供

(16か月)を託児所に迎えに行くので、出られないと言う。彼の奥さんも Imperial Collegeの物理教室で働いているそうだ。

Sebastianは今日の夜は、お婆さんのユダヤ料理のレシピで料理するというある種のお祝いがあると言う。レシピはあるが、彼は作るのは初めてだと言う。つまり彼もユダヤ人らしい。今日ぼくの世話を焼いてくれた事務の女性 Niluferは、トルコ人だという。本当に多様な人種が集まっている。

Milnerの講演の後もワークショップが続いていたが、それは聴かずにホテルに帰った。途中のスーパーでビールを買った。ホテルの冷蔵庫のFosterは、£3.95もする。なぜFoster(オーストラリア産)か分からないが、昨日飲んでみたけどあまり美味くない。スーパーでハイネケンの4本入りでしかも冷やしてあるのを買ったら、£4.99だった。それを1本飲んだら眠くなり、また寝てしまった。目が覚めたのが7時半で、今度は慌てて起きる。昨日行きそこなったChelsea Kitchenを目指した。今度はさすがに間違わず、Kind's Rd.に出た。そこからSloan Squareに行く途中にあるはずだが見逃したらしく、Squareまで出た。途中に洒落たイタリアンレストランがあったので、戻ってそこに入った。Manicomという。フィレスステーキとCote de Rhoneの赤ワインを頼んだが、どちらもよかった。しかし、突然大雨が降り出した。こちらに来て最初の雨である。この日も、昼は上天気だった。Basharが例年より暖かいだけでなく、雨がないうちで言った。

ひどい雨なので、デザートを食べる気がなかったのに、ティラミスとエスプレッソのダブルを頼んだ。何度か持ってきたティラミスがカプチーノに見えたので、注文したのはエスプレッソだと断ったら、それがティラミスだと言う。あまりよくはなかった。

この辺にChelsea Kitchenというレストランはないかと聞いたら、その陽気なウェイターは来て2日目ですら全然分からないと言う。どこから来たのかと聞いたら、パリからだと言う。で、中で聞いてくれたが、分からないとのことだった。

9/27(土)

今朝も4時過ぎに起きた。夕方寝ているので、睡眠時間は十分なはずである。

黒岩徹「イギリス式生活術」読了。

往きの成田空港で、「即興詩人」を探しに本屋に入ったが（これを昔買ったと思っていたが、見つからない。「十日物語」を買っていたので、買ったつもりになっていただけかもしれない）、岩波文庫などはやはり置いていない。代わりに岩波新書で出たばかりのこの本に気づいて買った。

しかし、ひどい本である。岩波新書の質も落ちたものだ。途中で読むのをやめてもよかったが、読み了わるためにだけ読んだ。タイトルが示すような生活論・文化論はない。この人は毎日新聞の記者で、オクスフォードに留学の経験があり、1989-95の間、ロンドン支局長だったという。その頃の新聞の切り抜きを集めたような本で、話に一貫性はなく、イギリス式生活術とは何なのか、さっぱり分からない。大体、イギリス以外のネタが多い。文章も平凡、俗で、新聞記者あがりの人の書く文章はこの手のものが多いかもしれない。須賀敦子とははるかに遠い世界である。

近くのDino'sというイタリア系のチェーン店で、ホテルよりは安い内容があまりパツとしない朝食を摂った。実は、昨日もSouth Kensingtonまで歩いてたまたま入った店が、同じチェーン店だった。

孝子たちを迎えに行くまでの時間を潰すため、自然史博物館に入った。建物も立派だが、展示内容も工夫されている。それからGloucester駅に接したモール内の、これはかなり洒落たイタリアン・レストランでパスタを食べた後、Heathrowに行った。15:15到着予定が、早めの14:50に着陸した。それからしかしなかなか出てこなくて、孝子と美季子が顔を見せたのは15:50ぐらいだった。地下鉄で出て、ホテルに入る。

あらかじめ部屋の変更は頼んであって、鍵ももらっていたが、部屋は見えていなかった。その312という部屋は結構広く、安心した。ツインベッドにエキストラを入れてもらったが、美季子は子供の時と逆に、おとなしくエキストラベッドに寝た。夕食は昼と同じモール内のGarfinkelとかいう店で軽くすませた。

9/28(日)

朝食後、まずHarrodsに出かけたが、日曜なので休みだった。それからPiccadely Circusへ出て、Regent街を歩き、前に来たときと同様、孝子がいづかの店に入った。Oxford St.まで出て、その角のTopとかいう若者向けの

デパートで、美季子にセーターなどを孝子が選んだが、時間がかかってこっちはくたびれた。

中華街のCheung Changだかなんだかの店で飲茶を食べたが、美味しかった。疲れたので、それからホテルに帰った。孝子は寝てしまったが、美季子は退屈してPCのゲームなどをやったり、友達とメールの交換をしたりしていた。夕食はChelsea Kitchenに行った。庶民的な店である。

9/29(月)

Nell Gwynn Houseに行って部屋を見、317という部屋に決めた。十分広く清潔である。しかし、クレジットカードの照会にえらく時間がかかった。週300(部屋代)+55(掃除代)と別に、預かり金350ポンドで、すべて前払いである。

そこから歩いて大学に行った。十分歩ける距離である。Anneの部屋にいたJeff Mageeにまず挨拶し、それからJeff Kramerの部屋に行って、孝子と美季子も入った。しばらく話をした。今度の土曜に家に招待したいと言うが、二人は木曜に帰ってしまうので、残念だった。Morris Sloman, Sebastianなどにも会った。部屋の鍵をもらい、インターネットには今日は繋がることを確かめた。

いったんホテルに戻り、今度こそはとHarrodsに向かう。孝子が気を使って、美重子叔母などこちらの関係にたくさんのチョコレートを買う。

今日は朝から素晴らしい天気である。それでLondon Eyeというテムズ南岸の巨大な観覧車に乗りに行った。



Nell Gwynn House



Imperial College

Westminsterから橋を渡ったところにある。これはなかなかの体験だった。天気がよいため見晴らしも最高である。高所恐怖症の孝子は、ずっと座っていたが。

そこからMillenium Bridgeを歩いた。かなりくたびれた。ホテルに戻り、夜はCovent Garden近くのNeal Street Restaurantという高級イタリア料理店に行った。量も多く味もよかった。値段もそれなりにする。

9/30(火)

一昨日コンビニで買ったフランスパンとハムとチーズとコーヒーで部屋で朝食を摂り、チェックアウトした。荷物4つをホテルに預けて、近くのNatural History Museumに行った。この間、一人でちょっと覗いたが、孝子と美季子も意外に面白かった。恐竜の展示と地球の展示を見たが、よく工夫されていて子供の興味を惹くようにしてある。1時間ぐらいのつもりが、2時間近くいた。

それから3年前に泊まっていたLangham Court Hotel近くのイタリアンにわざわざ出かけた。美季子がことのほか気に入っている。探し当てたのがSergio'sという店である。この界限、3年前と変わっていない。3人別々のパスタを頼んだが、その量の多いこと。ぼくは何とか食べたが、二人はかなり残した。しかし、味は抜群なのだ。

そこで別れて、彼女たちは買い物。ぼくはICに向かう。メールを整理したあと、3時半に待ち合わせたBarley's Hotelに来ているが、案の定待たされている。

ホテルに戻り、預けていた4つの手荷物にリュックを持ち、タクシーでNGHに行く。距離は短い。封筒に契約書、注意書きなどの書類やカードが用意されていて、カードを受付で見せると鍵をくれる。そしてスムーズに317室に入った。よい部屋である。調度は落ち着いているし、調理台、オーブン、冷蔵庫、トースター、食器などの台所設備、洗濯機、TV、衛星、VCRまで付いている。もっとも洗濯機は使ってみたが、乾燥がうまくできない。TVは点けられるが、衛星やVCRへの切り替え方法が分からない、ステレオも付いているが、CDを入れてもNo Discになるなど、問題も多い。バスルームの洗面台の蛇口の一つも壊れている。

夕方、通りの向かいのスーパーへ買い出しに出る。孝子が今日は何か作ると言い、その後のことも考えて、大量に買い込む。しかし、目と鼻の先だから楽である。孝子の作ったスープはおいしかった。ステーキは肉が固かったが、まあ食べられた。

10/1(水)

孝子が花島さんから聞いていた、日本人向けのバスツアーに出かけた。Oxford, Cotswolds, Stratford upon Avonを巡るツアーで、あらかじめ予約してあった。

朝8時に、三越前を出る。朝は曇っていた。予報は雨だったらしいが、段々雲が晴れ、午後はよい天気になった。Oxfordに1時間、CotswoldsのStou on the Woldという村に1時間半、Stratfordに1時間滞在という日本人向けのツアーらしい忙しいスケジュールである。ガイドもちろん日本人で、乗客もすべて日本人。しかし、人気があるらしく、日曜と水曜にこのツアーは出るが、この間の日曜の分をまず聞いたらすでに一杯だったので、今日にした。他にもたくさんのコースがある。

一人57ポンドも取るのに、昼食は付いていない。Stou村で勝手に取れと言う。ずいぶん不親切だ。しかしお蔭でわれわれはよいレストランを見つけた。

孝子たちがバスの中で聞いた話。お爺さん同士(といっても僕とあまり年が違わないかもしれない)が話していて、シェークスピアって誰だと一人が聞く。相手が何でも夏目漱石みたいなものだろうと答える。ぼくが聞いたのは、ガイドが力を入れてシェークスピアの警句を次々と紹介する前に、代表作品を挙げて、オセロとかロメオとジュリエットとか並べていって、「ハムレット」と言ったら後ろのおばさんのうちの一人が、「え、ハムレット!」と言って笑った。何で笑ったのか分からないが、ハムレットについて何らかの知識があって、シェークスピアは知らないの、その結びつきで笑ったのではないだろうか。

だいたいこういうメンバーがツアーの客なので、ガイドもオクスフォードに行ってはもっぱらハリーポッターの映画撮影にこの食堂(Christian College?)が使われたとか、浩宮がいたのはこのカレッジだとかいう話をする。それにしても不親切なのが、前にも書いたように昼食は適当にという扱いで、前

に座っていた老夫婦は、それを聞いていたのか弁当を持ってきていて、ガイドがどこそこにこういうレストランがあるとか、サンドイッチを買えるところがあるとかいうのに対し、レストランで弁当を食べていいかと聞いて、それはやめてくださいとたしなめられていた。

角山栄「シンデレラの時計」(平凡社ライブラリー) 読了

角山栄の本の「茶の世界史」にも「時計の社会史」にも感心したが、これも小冊ながら誠に面白い。内容的には「時計の社会史」との重複もあるが、読者対象を中高生に想定して語りかけている。しかし内容のレベルは高く、また「時計の社会史」とは異なる(といって前書の内容をほとんど覚えていないが)メッセージがある。

昔は神が時間を支配したが、時計ができて人の時間が作られ、経済原理が時間を支配するようになった。とくに産業革命後の、資本家による時間管理は苛烈であった。その後労働運動と政府の施策で労働者の休暇時間が段階的に延びてきた。その余暇をいかに過ごすかが問題である。学生でも同じだという。

もう一つは、日本の江戸時代の好奇心と技術が不定法の時計を作り、また勤勉さが時鐘で生活するパターンを作り、これらが日本の近代化のもととなったという主張である。

10/2(木)

アパートの問題は、大分片付いた。昼前に二人がちょっと買い物に出ている間に、保守員が来て洗濯機の乾燥だけの使い方を教えた。洗うのとほとんど同じだが、パワーをオフにしてから設定ダイヤルを回すということが、違っていたらしい。

孝子と美季子は15:45のBAで帰る予定なので、午後1時過ぎに一緒に出たが、その際に乾燥機を点けて外出した。帰ったらちゃんとできていて、感激した。その後、TVの担当者が来たが、この人も親切で、ちゃんと映るようにしてくれた。上の階ではなぜかCNNが映らないが、ここは完璧だと言う。

孝子たちが帰ったのは正直なところ淋しいが、この5か月を有効に過ごさねばならないだろう。

10/3(金)

9時過ぎにアパートを出て、徒歩20分強で大学に着いた。通常のペースになったと言えるが、通勤時間は日本にいるときよりはるかに短い。今日は曇りだが、気温は低くなく、上着もセーターも着ずに出た。

Jeff Mageeが顔を出し、昼はJ. Kramerが来て、一緒に昼食に行った。

10/4(土)

孝子たちが無事着いたという連絡はメールでもあったが、朝、美季子から電話がかかって来て、インターネットが繋がらないとの相談だった。

普段は新聞を買わないが、今朝はTimesの土曜版を買った。その量の多さは驚くほどである。書評面が充実している。社会面の記事で面白かったのは、Cliff Richardのコンサートの切符が近く売り出されるが、それを目当てに50代、60代のオバサンたちが、早い人は16日も前からテント生活をして並んでいるという。Cliff Richardは日本でも人気があったが、われわれの世代はもしかすると、文化を越えて同世代の持つ共感が、同じ文化の異なる世代間のギャップを凌駕するところがあるかも知れない。

昼は、ぶらぶらして、King's Rd.の辺りを歩いた。Cheyne Rowで結婚式の参列者の一団を見た。皆、華やかに着飾っており、その中に花婿花嫁もいる。近くに例の赤い2階建てバスがあって、Wedding何とかと書いてあり、貸し切りになっている。こういうサービスがあるのだ。その後、Old Churchでも花婿花嫁とそれを写真に撮っている一団を見た。同じカップルだったのかもしれない。

それからカーライルの家という道案内の標識を見たが、家自身は見つからなかった。しかし、カーライルの銅像と、非常にまずイトマス・モアの銅像（黒と金のペンキが塗ってあるので銅像かどうかは分からないが）を見た。帰りにKing's Rd.の一角の教会前でまた、結婚を祝う一団が石段に並んで写真を撮っている光景を見た。

夜はJeff Kramerの家に呼ばれていた。少し早めの18:00頃家を出、Jubilee LineのWest Hamsteadを目指す。道にあまり自信がなかったが、結局迷わずに彼の家に着いた。Jeffは外に出て、見張ってくれていた。

長屋式の一軒家だが、さまざまに工夫と拡張をしていて、立派な住まいになっている。こういう家の住み方が、イギリス流、あるいは広くヨーロッパ流なのだろう。高層アパートは嫌われるらしい。

知らなかったがJeffもユダヤ系なのだそうだ。彼は南アフリカ出身でインド洋側で育ったという。今でも妹がそこだかCape Townだかに住んでいるという。そして奥さんNitzaはイスラエル出身で、そのせいか色はやや浅黒く、英語に多少のなまりがある。感じのよい美人である。

娘の話が出た。うちの娘が15歳と聞いて、難しい年ではないかと言う。Jeffのお嬢さんは今、大学生(19歳だったか。医学専攻)だが、その年の頃は大変な反抗期で、大声で喚くなどということもあるとともに、友達と夜、クラブに出かけたりする。それを両親は大変心配したが、ダメだと言うと嘘をついて、あるいは無視して出歩いてしまうだろうから、行先をきちんと告げさせて認めることにした。それでも奥さんは帰ってくるまで心配で寝られなかったと言う。人の家に泊ってくるとか、相当奔放な時期があったらしい。

ほどなくAnthony夫妻が来た。Anthonyはまた太ったようだ。Anthonyは典型的なイギリス人かと思っていたが、彼もその奥さん(Jane)もユダヤ人なのかもしれない。Finkelsteinという名前からしても、また何かの会話でAnthonyがヘブライ語の成句を使った冗談を言ったことからしても、そうかと思われる。



The Kramers & the Finkelsteins

Jeffは料理を手伝っていた。普段から、ある程度料理をするみたいだ。キノコのクリーム和えの入ったパイと、タラか何かの白身魚にローズマリーを

使った香りの強いソースをかけたものが出た。なかなかいけた。その後サラダが出た。チョコレートケーキも美味しかった。

話し込んでいたら12時になった。AnthonyがGolders Green駅まで送ってくれて、Northern Line南行きの多分最終に乗れた。AnthonyはEmbarkmentで乗り換えろと言ったが、Eustonまで来て2つに分かれる。東に行くと遠くなるので、ここでVictoria線に乗り換えようと降りた。Victoria線のホームに何人か待っている人たちがいたが、なかなか電車が来ない。時刻表を見ると、すでに終電が出た後らしい。他の人々もそれぞれ散っていった。やむなく外に出たが、タクシー乗り場など見当たらない。バスがまだ走っているが、Chelseaの方に行くのがあるのかどうか分からない。

道をうろうろしてタクシーを探したが、流しは見当たらない。まずいことにガイドブックをJeffの家に忘れてきて、方向も分からない。Eustonは以前Lake Districtに行ったとき乗り降りした駅で、昔のホテルにも近いはずなので、中心街の方に歩いて行けそうだが、方向が分からなかった。

そうしていたら反対車線を走ってきたタクシーがあり、それにあまり明確ではなく手を上げたら、わざわざUターンして戻ってきてくれた。Sloan Av.もすぐ分かり、ベテランらしく抜け道らしいルートを通りながら、むだなくアパートに届けてくれた。この£15.40には感謝。チップは出さなかった。

10/5(日)

今朝になって、またトラブルが発生した。洗面所で顔を洗おうと眼鏡を外したら、床に落として右のレンズが割れてしまった。すぐにJeffに連絡して、いろいろ探してもらった。今日は日曜なのでどこも閉まっているが、Oxford St.のVision Expressが開いているというのを見つけてくれた。これからそこに行こうと思う。

さて、Oxford St.近くのVision Expressは、Jeffが番地を教えてくれていたので問題なく見つかったが、それからが大変だった。まずopticianによる検査が、どういう訳か交替で3人にかかった。中心になったのは二人目の男性で、日本で作った眼鏡は、左眼で近くを見、右眼で遠くを見るようになっているようだが(これは結果的にそうなったのだが)、両方を遠近両用(double focus lens)にした方がよいという。もちろん、今と同じにもできるがと言いながら、これだけで2時間近くかかった。これは2階でやって、1階が

眼鏡売り場である。1階に案内されて、担当者が出てくるまで少し待たされた。待つ間、コーヒーを出してくれた。ただ、尿意を催してきて、このサービスは良し悪しでもあった。

さて、メガネのセールス担当は黒人男性である。処方に従って遠近両用を勧める。それでいいと言うと面白いことに、ホヤレンズ(今使っているのと同じ)の仕様を示し、高品質で£250だという。まあいいかと思っていたら、できるのに2-3週間かかるという。今欲しいんだという、これを買えばその間代わりの眼鏡を無料で提供すると言う。そんな面倒なことはしたくない、今あるものはないのかと言うと、戻ってまた別のプランを示し、しかしそれも1週間半位かかるので、代わりを提供するというから頭に来て、日本ではそんなことはない、遠近両用でなくてよいから、今すぐに欲しいと言った。何度かのやり取りの後(というのは彼はいちいち戻って、多分上のopticianと相談してくるのだ)、結局右眼は単焦点、左眼は変動焦点で、すぐにできるものというところに落ち着いた。それからフレームを探したが、どの範囲から選ぶのか指示もあいまいで、最初言われた範囲(壁にサンプルが並んでいるもの)から探して決めかけていたら、メタルフレームではなくプラスチックの方がこのレンズにはよいと言う。それで安いやつを選んだ。

それから支払いにカードを出したら、今度はこのカードが機械で受け付けられないと言う。そんなはずはないと言ったら、またやり直しに行って、やはりダメだと戻ってきた。よく調べると代金の£259は何とかある。しょうがないので現金で払った。それで終わったのが4時。そしてメガネの受け取りは6時だと言う。

店を出てOxford St.を西へ歩き、デパートに入らずトイレをすます。それから何か食べようとパブに入り、bitterを頼んで食べ物はないかと聞いたら、もうkitchenは閉めてしまった、ということだった。次は夜に開けるのだろう。昼食抜きでビールだけ飲むはめになる。

お蔭で、今野浩「金融工学への挑戦」読了。

これは中公新書だが、似たような本が岩波新書などでも出ていて、それらも多分買っているが読んでいない。LTCMの破綻に関する米国で出た本を2冊買って、そのうちの1冊を半分ぐらい読んだが、少し基礎知識を確認しようと、これを読み始めた。今野さんの本は特許ものを2冊読んだが、この本も面白く書いてある。一応、数式も少しは使ってあって、そういい加減な本でないのは流石である。

10/6(月)

眼鏡は慣れないところもあるが、とりあえず役に立つ。

Jeffといろいろ話をし、彼のグループが今やっていることの概要が分かった。10/24にぼくがセミナーをやることになった。かなり先になった理由は、水曜から彼が2週間ブラジルに行くためである。

今日が学年の始まりの日である。入学式に相当することが行われているらしい。Jeffは学科長として、学科の新生に挨拶をしたらしい。

10/8(水)

Niel Maiden とAnthony Finkelsteinにメールを出し、それぞれの大学を訪れることになった。Bradford大学にいる田口さんともたまたまメールの交換があつて、そこを訪れることになった。こっちは日までは決まっていない。Axelにもメールを出したが、まだ返事がない。

DCが限度額を超えたらしく、そのせいで眼鏡代の支払いができなかったらしい。孝子に連絡先を調べてもらって、限度額の増加の依頼をした。結果は明日知らせるといふ。

今日は、Keith Clarkに会った。ICOTの頃はよく日本に来たという。

10/9(木)

Jeff Mageeに最近の仕事を見せてもらった。全体的な話はJeff Kramerから聞いていて、この間のイタリアのセミナーに彼が出した簡単なポジション・ペーパーも読んであつた。

LTSAをプラグインでいくつか発展させている。一つはMSCを描けるようにしていて、そのシナリオからモデルを生成する機能を付けているものである。それとDarwinによるアーキテクチャ記述が組になっていて、Darwin記述の中にFSPが埋め込める。それとMSCが有機的に繋がって、アーキテクチャの方からMSCの候補を生成し、それをユーザが受け入れるか拒否するかで、モデルを洗練するという機能がある。

もう一つは、LTL記述を組み入れて、それにfluentという記述を簡素化する仕組みを織り込んでいるもので、LTLからBüchi Automatonを作り、安全性や進行性を検証できる。この話は9月のFSEで発表しているらしい。

とにかくちゃんとしたものを作っているのに感心する。

Nilufer Betikから面白い話を聞いた。きっかけはサッカーの話だった。彼女はトルコ人で、今度の土曜はトルコ対イングランド戦があるねとぼくが言ってからの展開である。昨年のワールドカップでの日本ートルコ戦の話となり、あのあと当時の私のボスの日本人は1週間口をきいてくれなかったという。そのボスというのがどこの話かと思ったら、彼女はこのICに来てからまだ10ヶ月ぐらいで、その前はトルコで日本のYKKで働いていたという。通訳(多分英語とトルコ語間の)で、日本とトルコの文化の違いによるいろいろおかしいことに遭遇して、笑いをこらえるのに苦労したらしい。やはりトルコでは、まあいつかやればいいというような風土で、それを日本人の上司が、いつかでなく今やれ、と言うような具合だったらしい。

それで一番面白かったのが、Chief Directorというからそのトップだろうか、日本から赴任してきて、最初の日自分で車を運転していて、信号で停まった。そのとき窓ガラスをノックするものがある。それで窓ガラスを降ろすと、手まねで外に出ろと言う。よく分からずドアを開けて降りたら、そのすきに運転席に入り込まれてそのまま車を盗られたという。

10/10(金)

昨日、ICのホームページを調べていたら、Sophia Drossopoulouというreader (professorの次の位らしい) がいて、これがFOOL (Foundations of Object Oriented Languages)'04のプログラム委員長であることを発見した。五十嵐君がやはりこのPCメンバーで、彼の勧めがあつて紙名君がこのFOOLに投稿し、その原稿をぼくはロンドンに来てから添削している。今日、ちょっと話をしたが、われわれの投稿した論文のことを知っていて(朝のJeff Mageeたちとのコーヒー・ミーティングでその話をしたのを、誰かがすでに伝えてくれていた)、その話をぜひしてほしいと言っていた。

12時ごろ警報が鳴って、"For the sake of safety, please evacuate the building."と繰り返し言っている。皆とともにぞろぞろと外に出た。通りで見ると、たくさんの方が建物の中にいることが分かる。Huxley Buildingだけで

なく、隣の建物からも出てくる。そのままICの北側をぐるっと回ってアパートに戻り、昼食にカップうどんを食べて、また戻ってきたら、すでに何ごともない。同じ部屋の学生に聞いたら、訓練だったらしい。昨日の夜は火災報知機が鳴ったと言っていた。しかし、日本の大学や学校なら、何月何日の何時から避難訓練をするからとあらかじめしつこくお触れがあり、その予定表に従って行動するところだが、確かにそれでは緊急時のための訓練にはならないだろう。

午後、John Lloydというオーストラリアから来た人のセミナーがあった。Logic Programmingの帰納学習の話だが、あまりよく分からなかった。Keith Clarkがまとめ役をしていた。

10/11(土)

今週は毎日真面目に大学に行った。

素晴らしい天気の日である。気温も暑からず寒からず、Tシャツの上にラガーシャツだけでちょうどよい。久しぶりに街に出かけた。Wheelに乗った時と同じようにWestminsterまで行き、南岸を歩いた。Hayward Galleryに行ってみたが、なぜか閉まっていた。それで逆向きに歩き、Lambeth Bridgeまで来たらそこにMuseum of Garden Historyというのがあったので、入ってみた。もとはSt. Mary-at-Lambethという教会だったものを、改造している。受付の小父さんが、Mutiny on the Bountyで知られる艦長William Blighの墓がある、など親切に教えてくれる。歴史の展示はそれほどなく、見ものは庭園だが小さなものなので、一回りするといふほどでもない。しかし、むしろ日本の庭の感覚に近くて、馴染める。

それからさらに歩いて、Tate Galleryへ行った。ここは主に英国人の画家の作品を集めている。何と言ってもTurnerである。特別展示もTurner and Veniceというもので、£8.50も取るだけあって、充実している。VeniceがTurnerにとってこれほど大きな重要性を持つ場所とは知らなかった。おびただしいスケッチが残っている。Turnerだけでなく、19世紀の英国では大量にヴェニス絵が描かれ、Byronの詩などにも導かれて、ヴェニスを訪れる人が多かったという。日本人が即興詩人に導かれてイタリア旅行をするようなものか。

常設のTurnerをはじめとする作品の数も多く、それらもざっと見たらさすがに疲れた。それでも頑張ってGrosvenor Rd.からChelsea Bridge Rd.を歩いて歩いて帰ってきた。

先週から、今日はイングランド-トルコのサッカーの試合があるとテレビでは大騒ぎをしている。Sky Newsで土曜の3時からと繰り返し言うので、見なければいけない気になる。これはEuro2004の予選で、この試合に引き分け以上でイングランドは本戦に行ける。今年最大の試合と騒いでいる。トルコ人のNiluferももちろん見なくちゃと言っていた。

TVを点けても話ばかりしかしていない。3時からというのはTVの番組の始まる時間で、試合は何と6時から始まるのだ。さすがに話だけでは6時まで持たないので、U21のスコットランド-リトアニア戦の中継もやっている。

結果は0-0で大騒ぎの割には拍子抜け。しかも、トルコもこの結果で本戦に進めるらしい(後で分かったが、これは間違いらしく、プレイオフに回るらしい)。しかし、BeckamがPKを失敗したのがご愛敬である。

10/12(日)

ちょっと寝坊した。何度か目が覚めたが、起きたのは8時をかなり回ったところ。今日は昨日ほどの天気ではないが、弱めながら陽は射し、気温も昨日よりはやや低いが、行楽には申し分ない。

朝食後、今日はKew Gardenに行くことにした。South Kensington からDistrict Lineで西に行くのはWinbledon行きとRichmond行きがあって、後者に乗らなければならない。来たのがWinbledon行きだったので、それでEarl's Courtまで行った。ところがRichmond行きは運行してなくてどこかでバスに乗れというアナウンスをしている。駅員に確かめたら、Turnham Greenで降りてバスに乗れということだった。それに従って、無事Kew Gardenに着いた。

広いしよく手入れがされている。歩いていると、とても伸びやかな気持ちになる。もちろん植物学のメッカとしての役割も果たしているのであろう。Evolution Houseというのを見ても、Museum of Natural Historyと同じように、子供たちに科学に関心を持ってもらおうという工夫は行き届いている。

今、レストランにいる。ここで一番高い料理のサーモン・ステーキを安いワインと食べたが、外食は久しぶりである。サーモンもまあまあだし、ついてくるイギリス的なジャガイモとブロッコリーの茹でたものも、量が多いので全部は食べる気にはならないが、それなりにおいしく食べてしまう自分が、ちょっとおかしい。



Kew Garden

一通り見てまたバスに乗り、3時過ぎの電車に乗った。しかし、このKew Gardenというのは、植物園のイメージとは異なるものである。むしろ、大きな公園である。大きな温室にアフリカ、アメリカ、アジア・オセアニアの熱帯植物を集めた施設やDuchess of Yorkの名を冠するサボテン園などは植物園らしいが、野外は大樹と池と芝生が中心である。パリの植物園はずっと規模が小さいが、畑や草花園のようなものがあった。メルボルンの植物園はこのKewを意識したものに違いなく、巨大であったがほかにいろいろな植生を工夫していたと思う。それに比べ、この園内は普通の公園と同じように造っている。しかしゆったりとしていて、実に気持ちが良い。



Kew Garden Restaurant

東京でも一時、公園をいろいろ漁り歩いた。小石川植物園、新宿御苑、日比谷公園、井の頭公園、六義園、北の丸公園、神代植物公園、浜離宮、林試の森公園、目黒の自然公園など。どの公園も悪くないが、Kewみたいなところはない。Hyde Parkみたいなところもないだろう。

そのまま帰るのもまだ早いので、National Galleryに寄った。17世紀絵画だけを見ようと思ったが、Rubensに思いのほか時間がかかった。やはりルーベンスはすごい。Velazquezもいくつかあったが、ここにはそんなにいいものはなく、Rubensの方がはるかに上に見える。

後、昨日、Tateに解説のあったTurnerとフランスのClaudeを並べたものも見た。それでかなり疲れてから、Vermeer2点とPeter de Hooch, Gabriel Maetzo などを見た。Rembrandtはざっと見るだけになった。また来よう。

10/13(月)

今日は、午前中吉田展子さんに会って、しばらく話をした。去年の7月にここに来たという。すでにイギリスに来て、5つ目の大学だというので驚いた。ここは教育の質が高いので、授業の準備が大変だという。研究でも5つ星で、優秀な人が揃っているとのことである。

10/15(水)

毎日、不思議なくらい天気がよい。こちらの人に聞いても、珍しいという。雨が降らないので、ただでさえ乾燥がちのアパートで、湿度はかなり低い。そのせいか皮膚に油を塗ってもかゆみが生じるし、のども少し痛い。

田口さんから返事が来て、11月の初旬にBradfordを訪ねることになった。

昨日から今度のセミナーの準備をぼちぼち始めている。今日は午後はさぼって、まずSt. John'sの今晚のコンサートの切符を買った。席が一番高いのが£27だったが、その次の£21のにした。それからCovent Gardenに行き、10/20のOrlandoと10/29のMadama Butterflyの切符を買った。それぞれ£50, £40という比較的安い切符だが、一人で行くのにいいところだろう。そのまま歩いて中華街に出て、何とかいう店に入った。香港系らしく、痩せて眼光鋭い老人が奥の大きな丸テーブルに座っている。その周りにパイプを啜えた中国紳士やもっとくだけた恰好の香港人らしい男たちが3-4人集まってくる。焼き家鴨の焼きそばを頼んだが、乗ってきた鴨肉が豪勢だった。中国菜が間にあってそれも旨いが、焼きそばはあまり感心しない。

時間が半端になり、レコード店などで時間を潰して、7時ごろ会場に着いた。いったん帰るつもりで出たので、ジーパン姿のままである。しかし、そういう人は少なくない。2番目のクラスの席にしたが、結果は前から3列目で、顔がよく見える。室内オーケストラだから、音も近すぎるための弊害は少ないように思った。

出しものはLondon Mozart Playersだけあって、前半はモーツァルトで交響曲31番パリとピアノ協奏曲9番Juenehommeである。指揮者はAndrew Parrottという人で、典型的なイギリス人ではないかと思われる。多分、運動神経がそれほどよくない人で、指揮ぶりがぎくしゃくしている。時々小さく飛び跳ねる。しかし、オーケストラは安定していて、よいまとまりを見せる。

観客からのブラボーが出て今晚一番湧いたのは、ピアニストBernard d'Ascoliによるジュノムだが、途中不覚にもちょっとウトウトしたこともあり、それほどよい演奏だったかどうかよく分からない。とにかくこの選曲といい、後半のベルリオズのReverie et Caprice とビゼーの交響曲1番という選曲はそれ以上に、この教会という場での室内オーケストラの魅力を引き出すもので、とても満足した。いずれも耳に心地よい音楽で、手放しに楽しめる。

ピアニストよりもベルリオズのバイオリニストの方に、ぼくはむしろ感心した。David Juritzというこのオーケストラのコンサート・マスターだが伸びやかなよい音を出した。しかしオーケストラのメンバーは皆白人で（一人、南欧系か色の浅黒い女性がいたが）、それも多分相当数がアングロ・サクソンで、顧客も同様であったのは、日常の大学の環境とずいぶん異なる。

ビゼーの1番は、ビゼーが16歳のとき（17歳になる1週間前）に作曲を始め、1ヶ月ぐらいで書き上げたが、その後そのまま埋もれていて、死後60年経ってから発見され、1935年に初演されたという。この話はFMか何かで聞いたことがあるが、あまりちゃんとした記憶になっていなかった。しかし、これだけのオーケストレーションの技術を身に着けていたのはすごいことである。解説によれば、ビゼーはこの曲について一度も触れたことがない。彼は自らのインスピレーションを信用せず、苦勞して何度も手直したもののしか価値がないと思っていたという。しかし、自分の恐らく最初の交響曲作品の存在を、忘れてしまうということがあるだろうか？

10/17(木)

City UniversityにNeil Maidenを訪ねた。3時半の約束で、着いてから2時間以上、彼のグループのいろいろな研究状況を、学生のデモを交えて丁寧に説明してくれた。学生にうまく仕事を割り振ってツール開発を進めており、それを航空管制という実際のシステムに応用している。

それからパブに行き、ビールを飲んだ後、レストランに行った。彼がそのシェフをcreativityのワークショップに呼んだというお気に入りの店だが、満員で入れなかった。それでVillandryという別の洒落た店に行った。Monkfishというのを食べた。互いによくしゃべって(まあ彼の方が口数は多いが)、10時近くに別れた。ロンドンで訪ねたらよい人たちを紹介してくれるなどして、非常に有意義だった。帰りの最寄り駅はGreat Portland Streetで、そこからCircle Lineで帰った。彼は歩いてEustonに出ると言っていた。

10/18(金)

今日も天気はよいが、気温はだいぶ下がってきた。昨日あたりから仕事の方でアイデアが湧いてきて、今日ちょっとやってみたが、うまく行きそうな気がする。Role modelにinterfaceを導入するという着想だが。

10/19(土)

朝、role modelのアイデアを少し考えてから、天気がよいのでまた出かけることにした。寒いと思ってセーターを着た上に、半コートも着て出たが、結果的にはこれは不要だった。

いつも大学に行く道を途中から右寄りに変えたら、Victoria & Albert Museumの前に出た。それでそのまま中へ入った。English Gothicという特別展をやっていたが、常設のものだけのおびただしい量がある。中のスペースがとにかく広い。古今東西のいろいろなものが集められているが、たとえば布地だけでも大変な量で、それを公開している。ローマの巨大な塔などを並べた広い部屋がある。これらはcastというから型を取って複製したものだろう。結局ちょっと覗くつもりが、2時間以上を費やし、かなりくたびれた。

そのままハイドパークに歩いて行き、西側だからKensington Gardensと呼ばれる方を横断して、High Street Kensington駅の近くに出た。その近くのArcadiaという名前のこれまたイタリアン・レストランで遅めの昼食をとった。スープが抜群に旨かったが、リゾットはあまりよくなかった。

疲れたのでもう帰ろうかと思ったが、食事をしてまた少し元気が出てきたので、地下鉄を1駅乗ってNotting Hill Gateまで行き、骨董街として知られるPortobello Rd.を歩いてみた。まずNotting Hill Gate駅を降りたところか

ら、すごくたくさん人がいるのでびっくりした。それでも初めのうちはまあこんなものかと思っていたら、そこはまだPortobelloに入っただけで、その道に入ったら、まるで香港の女人街のような賑わいである。しかも、この道が延々と続き、アンティーク、食器、服とまさに香港や上海と同じである。ただ売り物や売り手に東洋系のものはあまり多くない。

CD4枚で£10というのを買った。この間のビゼーの交響曲をRoyal Philharmonic Orchestraが演奏しているのがあったので、ちょうどよいと買い、4枚だと安いというのでグレゴリオ聖歌とチャーリー・パーカーとマイルス・デイビスという変な取り合わせで買った。

それからガイドブックに載っていた料理の本の店というのをようやく探し当て(Talbot St.), Simple Foodというのを買ってみた。



Portobello Rd.

10/19(日)

午前中は珍しく、アパートでrole modelの着想をノートするという仕事を少しし、午後Royal Academy of Artsに出かけた。Pre-Raphaelite & Other Mastersというのをやっている。

渋谷でロセッティ展を見たことがある。今回の特別展はThe Andrew Lloyd Webber Collectionという個人の収集を展示したもので、ラファエロ前派の総合的な展示という訳ではない。MillaisのオフィーリアはTateで見た。ラファエロ前派に特に思い入れはないが、イギリス人にとっては格別なものかもしれない。Leightonの絵があり、この間のV & A Museumでも見たのが印象に残る。いかにもアカデミーの絵で、当時でも時代遅れだったろうが、今ではさらに評価は低いだろう。しかし、その技量には驚くべきものがある。もちろんラファエロ前派の連中の写実力も相当なものである。ただMillaisの晩年の、やはりリアリズムだが省略を交えたのがいくつかあって、そちらにむしろ親しみを感じた。

10/20(月)

初めてThe Royal Operaに行った。出しものはヘンデルのOrlandoで、以前にヘンデルのリナルドをNHKで見て(プリンツレゲンテン'01)面白かったので、期待していた。

ここに来るのは初めてなので、7時開演だが早めに行き、6時20分ぐらいに着いた。中に入ると大変洒落たレストランがある。1階にも中2階にも3階にもある感じ。上流階級と思しき人たちが、きちんとした身なりで食事をしている。こちらはアパートであわてて作った食事をかきこみ出てきた。服装はさすがにジーパンはやめて、ネクタイこそしなかったが、タートルネックに上着、さらに初めてオーバーコードを上に着て出かけた。

席はAmphitheatre C72というところである。Amphitheatreとは円形劇場という意味である。つまり階段式の上の方だが、案外よく見える。切符を売ってくれた人が、ユールブリンナーみたいに頭に毛のない、しかしいかにも信賴のできる紳士といった人で、その人がこの席はいいと勧めてくれたので買ったが、それだけのことはある。しかし、30分以上前だと、まだ扉が開いていない。

戻ってバルコニーに出た。ここからCovent Gardenのアップルマーケットを含む広場が見渡せる。空にまだ薄明かりがあり、薄い雲と瞬き始めたいくつかの星が見える。まるで書き割りのような、よい眺めである。空気もひんやりして気持ちがいい。

プログラムを買ったりして、7時10分前に席に着く。主役の交代のアナウンスがある。タイトルロールのOrlandoが、Alice CooteからBejun Mehtaに代わり、Bejun MehtaがやるはずだったMedoroの役を、William Towersというのがやる。なんだかがっかりだが、Alice Cooteというのは女性で、むしろ男性に変わったこの舞台の方が、本来の形とも言える。よかったかもしれない。

オーケストラの出だしにびっくりした。音がバラバラで、まるで素人楽団という印象だった。しかし、すぐに立ち直って、後は安定した。舞台は回り舞台などを活用し、凝ってはいるがごてごてはしていない。字幕が出る。

やはりヘンデルの音楽は美しい。とくに第1幕の終わりの三重唱には感激した。他はほとんどアリアかレチタチーヴォで、二重唱はめったにない。三

重唱はここだけであるが、大変美しい。

歌手の他に踊り手が3人出てくる。ErosとVenusとMarsということになっている。このVenusが胸乳も露わに出てきたので驚いた。AngelicaのBarbara Bonneyは美人で、胸も大きい。歌もかなりよいが、第2幕のアリアで、早いパッセージの聞かせどころのはずのものが、うまくなかった。疲れてしまって声が出なくなったのかと思ったが、続いてスローなアリアがあり、それはとても上手く歌った。そしてそれ以降は持ち直した。それと比べDorinda役のCamilla Tillingは終始安定していた。

3幕ものだが幕間ごとに休憩がある。しかし、いずれも20分ぐらいで、その間に食事をしている人は、あわただしい。家で食事をしたとき、眠くならないように酒は飲まないできたが、最初の休憩のときに、ワインを1杯だけ飲んだ。しかし、すぐに「後10分です、席に戻ってください。」というアナウンスがあり、あわてて飲み干した。

終わったのは11時近かったが、十分堪能した。

10/22(水)

Jeffがブラジルから帰ってきた。入れ違いにJeff Mageeがニュージーランドに出かけている。

24日のセミナーのスライドを一応作った。

Axelからメールの返事が来て、11月の下旬に彼の大学を訪ねることになった。

10/23(木)

Roger Lowenstein, "When genius failed" 読了。副題は"The rise and fall of long-term captail management"である、

この本は実は5月のPortland出張のときに持っていった1冊である。やはりそのときに持って行った白川静の本の方もまだ読了していない。帰国後、どちら本もうちやっけて別の本を読んでいた。それでもこちらの方は、時折思い出したように読んでいたが、勢いをつけるために、今野さんの本にも手を出した。

今回、今野さんの本をこれと一緒に持ってきて、ようやくどちらも読み終えた。丹念に事実を掘り起こしてLTCMの"興亡"を跡づけるだけでなく、とくにEpilogueに顕著なように、著者による明晰な批判的分析があり、それが強い説得力を持つ。

大分、気温が下がってきた。夕べは夜中に雨と強い風があった。朝からは晴れたが、風が冷たい。午後、一時雨がかったようだが、5時過ぎに帰るときは、上がっていた。

大学への往復に、いろいろな道を試している。どの道も美しい。かなり上質な住宅地であることは分かる。自然史博物館の向かいはフランス大使館で、フランスの小中学校が併設されているせいか、フランス人らしい人が多い。フランス風のcafeの並んだ小路もある。

今年は夏が暑く日照が多いせいか、紅葉が例年よりきれいらしい。ニュースでもNew Englandに行かずともOld Englandで美しい紅葉が見られると言っている。

10/24(金)

9/24に来たので、ちょうど1ヶ月経った。その日にセミナーをするのも巡りあわせだが、自分でもうまくいったと思う。タイトルは"An Adaptive Object Model based on Dynamic Binding to Roles in Environments"とした。ずいぶん質問が出て、Jeffも大変よかったと言ってくれたし、Sebastianはこれを自身の仕事に結びつけて考えたいと言った。同じ部屋にいるブラジルから来ているLuccioという好青年も、話す前から関心があると言っていたが、研究の方向を模索している段階なので参考になったようだ。Basharが来ていて、彼のところには近く出向いて、話をするようになった。

全部で30人ぐらい聴きにきていて、吉田さんやSophiaやMorrisやEmilもいた。

10/25(土)

Sloane SquareのPeter Jonesに行ってみた。確かに何でも置いてある店である。店員が行き届いている。孝子の言っていたミルクピッチャーとふきん、

tea towelのそれらしきものを買った。部屋にあるのとまったく同じものは、どちらもなかったが。

それからしばらくとChelsea Bridge St.を歩き、橋を渡りBattersea Parkに行った。これもガイドブックに載っていた。コートを着ないで出たら、今日はちょっと寒い。アパートを出るときは日が照っていたが、P.J.を出るときはかなり暗い雲が空を覆っていた。公園をしばらく歩いているうちに、また陽が射した。テムズ川の対岸には、木の間隠れに赤レンガのイギリスらしい建物が見える。こちら側には、新しくて安っぽいアパートや工場などがある。しかし、公園は緑豊かだ。その中で異様なのが、日蓮宗の堂である。Kew Gardenにも勅使門というのがあったが、こちらは金メッキの浮彫を配したりして、まあ醜悪という表現が当たっていよう。しかも、周囲と調和しない。あの対岸の赤レンガの建物が、日本の田園風景に調和しないのと同じように。

ガイドブックによれば、これは日本山妙法寺の本堂だとある。本堂というのも変だとは思うが。

やはり広いので、ぐるっと回る、といっても全体から見ればごく一部だろうが、それだけで結構時間がかかった。犬を連れて散歩に来ている人、ジョギングの人、乳母車を押してきている人、サッカー、テニスをやっている人達などがいるが、公園の大きさに比べれば訪れている人の数はたかが知れている。

また歩いて橋を渡って、Sloane Sq.近くのRose & Crownというパブに入って、ギネスとパスタを注文した。期待していなかったこのパスタというか、そのまわりのサラダ、ガーリックトーストなどが、案外旨い。

10/26(日)

珍しく寝坊して、起き出したのが8時半近かった。ところがTVを点けると、いつの間にか冬時間になっている。偶然だが虫の知らせか。

1ヶ月経ったのもっと英語に慣れるかと思ったが、案外そうでもない。1対1でしゃべるときは問題ないが、大勢で話をしているときは、かなり分からないことが多い。

昨夜、TVでGosford Parkという映画を見た。1930年代の英国のManor Houseを舞台にしたもので、上流階級の人々とその召使の生活がはつきり

分かっている。ちょうどイシグロのThe Remains of the Dayの世界である。そこで殺人事件が起こる。しかし、この会話がほとんど部分的にしか聞き取れない。

新聞は土曜にしか買っていないが、この土曜の新聞が実に充実している。通常の紙面だけでも本体の他に、Sports & Business, Body & Soul, Money, Reviews, Travelと付いてきて、それもアメリカの新聞のように広告ばかりというのではなく、むしろ驚くほど広告が少なく、読むところが多い。それも面白い記事が多い。別に、The EyeというTV, DVD, CD, PCの案内、Magazine, The Knowledgeという情報雑誌が付いてくる。それで90pはおそろしく安い。

なるべく辞書を引く。発見がある。たとえば「塗る」に相当する英語はないらしい。give a coat, paint, varnish, lacquer, plasterなどという語が並んでいて、ものによって違うということは、共通性を捉えた語がないということである。バターだとbutterとかspread butterということである。色だとcolorになる。泥だとdaub, 墨を顔に塗るのだとsmear, 膏薬だとputとかapply ointmentというぎこちない表現になる。

午前中はTVでスポーツを見た。最初はボクシングで、英国のヨーロッパ・チャンピオンのAlexanderなんとかというのと、多分スペイン系のGomezというののタイトルマッチだったが、壮絶な試合だった。5回で英国人はノックアウトされて、観客はため息をついた。

ついで、ラグビーのワールドカップを見たが、イングランドがサモアに苦戦した。見始めたときはサモアが10-0で勝っていた。そこでサモアが得たPGが左のポールに当たって、不運にも手前に落ちた。それでツキが逃げたか、次にイングランドのWilkinsonがPGを決め、さらにモールから泥臭く押し込んでようやく10-10となった。しかし、その後サモアも持ち直し、前半は16-13でサモアリードで終わった。後半、サモアには気の毒に見えた認定トライがあって、イングランドが20-16と逆転。しかしその後、サモアが2つのPGを決め、22-20と再逆転。それからイングランドのPGで23-22。接戦はここまでで、その後イングランドが2つのトライを決めて、最後は35-22だった。これでは予選を通過しても、イングランドは大変だろう。

さて、12時になってから、出かけた。ガイドブックの勧めに従って、Little Veniceというところに行ってみたが、天気の良いこともあって実に美しかった。運河に沿って樹木と家並がよく調和した風景を作る。



Little Venice

さらに、そこでThe Waterwayというレストランに入ってみたが、これが正解だった。2コースで£14.50というのは昼からちょっと贅沢かと思ったが、それだけのことはある。まずムール貝のオードブルを選んだが、入っている貝の数が多量なこと。そして、白ワイン系のスープがソースとなっているが、スープとしても貝のだしがよく出ていて旨い。メインは鴨の焼いたのにしたが、周りに豊富にキノコと豆の副菜が付いて、鴨の肉はふっくらと焼け、堪能した。量は多すぎる感じだが、きれいに平らげた。

往きはPaddingtonから歩いたが、帰りは適当な方向に歩いて行ったらEdware Rd.に出たので、そこからCircle Lineに乗って、High Street Kensingtonで降りた。そのOdeonでMistic Riverという映画の切符を買った。買ったのは3時ごろで、席はすべて指定らしく、上映開始は5時である。近くにHolland Parkというのがあって、入ってみたが小じんまりとしているものの落ち着いた。そこで少し本を読んだ。それから本屋で時間を潰し、Marks & Spencerでちょっと買い物をして、戻って映画を見た。これはClint EastwoodがLehaneの小説を映画化したもので、新聞評もよかった。映画は原作をほとんど忠実に映像化している。それでいて説明調にならずうまくサスペンスを盛り上げる。元の小説を読んだのは去年だが、ずいぶん忘れていた。しかも、読んでいたのに、またアメリカ英語なのに、やはり聞き取れないところが多い。しかし、久しぶりに映画をちゃんと見たという感じがする。やはりTVや飛行機の映画とは違うし、美季子にごくたまにつき合ってみる映画とも種類が違い、よい映画を見たという充実感があった。

10/27(月)

Suzanが部屋に来て、金曜日にぼくの話聞いた後、たまたま読んだ論文の話が近いのではないかと思ったと言って、その論文を持ってきてくれた。言語屋の言うExpression Problemというのを扱ったものだが、読んでみるとなかなか面白いし、確かにぼくの話と強い関連がある。単純な式の構文に対し、構文要素を増やすのと式に対する操作を増やすのが難しい、という話である。これはVisitor Patternの典型的な例題で、この論文でもそれに詳しく触れているが、static type checkingとの整合性が確かに問題で、それをいろいろな角度から論じた、まだ未完成の論文だった。しかし、こういう話をすぐに持ってきてくれるのが親切であり、またグループとしての強みでもあるだろう。

ここではわれわれのゼミのような定期的なグループミーティングをやっていないが、先生がよく学生の部屋を訪れて話をしていく。とくにぼくと同じ部屋にRobという真面目で寡黙な青年がいるが、一時Jeff MageeとSusanが入れ替わり立ち替わり訪れてきて、話をしていた。論文投稿前だったのでそういう状況になったのだろうが、とにかく先生連中の熱心さと気さくなところは、見習わねばと感じた。同じように学生も先生のところを訪ね、先生同士も行き来しているのであろう。

同じ部屋にLucioというブラジルから来たばかりのPh.Dの学生がいるが、これも好青年である。彼はブラジルでは私立大学(ブラジルでは私立大学の方によい大学が多いらしい。国立は授業料がタダで、貧しい家庭からも優秀な人材が教育を受けられるようにという配慮があるらしいが、先生の待遇がよくなって、ストライキばかりやっているというので驚く)のlecturerだということである。

10/29(水)

また、Royal Operaに出かけた。今度はMadama Butterflyである。この間の席は3階席で遠いが、正面右寄りだった。今度の席はオーケストラボックスのすぐ左手横で、ボックスの中がよく見え、舞台にももちろん近い。舞台の上手はちょっと見にくいだが、ほとんど支障ない。

しかし、蝶々夫人というオペラは、日本人にしてみるとかなり居心地の悪いものである。ヨーロッパのジャポニズムの眼で見た日本人観であることは分かっている、割り切ってみればよいのだが、やはり気になる。たとえば着物である。この舞台は正統的というか保守的というか、とくに新機軸を凝ら

したものではなく、それだけになるべく日本的な部分は日本的に見せようとしている。しかし、着物は一部は意図的にだろうが、日本の本来の着物とは違うし、何と言っても着方が違う。自分も着物を着ないし、着物についての知識もないから、どう違うと言えないのが情けない。

一方オペラとしては、当然典型的なイタリアオペラで、個々の歌手の声量で勝負している。やはりPinkerton役のMarco Bentiの声量はすごい。それと比べると、SharplessのDalibor Jenisは見劣りがするぐらいである。蝶々のAmanda Roocroftはイギリス人だが、清楚な感じで声もよく出、よかった。太って脂ぎった歌手だと、やはり日本人としてはあまり蝶々役をやってもらいたくないと思ってしまう。

しかし、オペラ全体としては、ヘンデルの方が面白い。アメリカ人の海軍士官と日本人の芸者が、イタリア語で歌い合うというおかしさを言ったら元も子もないが、音楽的な感動がやや少なかった。やはり「ある晴れた日に」の aria は感動させるが、これがこれほど有名なのは、他にあまり大して聴かせどころがないからではないかと思ってしまう。日本のメロディーを入れているところにも違和感を感じるのかもしれないが。

オーケストラは、これもこちらの思い込みかも知れないが、やはり出だしがとても変に聞こえた。指揮はPaul Wynne Griffithsである。今回もしかし、変に思ったのは最初だけである。

着物のことを書いたが、衣装係にも他の裏方にも、日本人は入っていない。わずかに

Japanese accessories, Bridal costume Suehiro, Nagasaki, Japan
Thanks to Kimono Salon des Hagi@London and Asahi Beers for fans

とある。

舞台装置も単純だが、工夫しているとする、多分歌舞伎を真似て、小道具を使用人が必要に応じて持ってきては片づけたり、舞台上で蝶々に着替えさせたりしている点である。さらには小道具を舞台の床に取り付けられた収納スペースから出し入れして、必要ない時は舞台上になるべく物を置かないようにしたのは、日本の舞台や住居を勉強したものかもしれない。

プログラムを£6で買ったが、とても充実している。とくに貞奴の話とか、Pinkertonのモデル探しの話が面白い。それでもおかしいところもある。Patrick O'Connerという人の"Breaking the Eastern Seal"という文章では、ペリーが来日するまでの200年間、日本は外国からの訪問客に閉ざされていたというのはまだいいとして、アメリカの外交官と水夫が、日本に足を踏み入れてその習慣や歴史や美術を目にした最初の外国人だと書いているのにはびっくりする(p.16)。p.23には写真があって1906年に撮影されたものとのことだが、Tea Ceremony in Beppu on Kyushu Island: Waldemen Abegg and a geisha (1906)とある。ところが写真のほうは明らかにお茶ではなく、芸者がお銚子を手に、酒の酌をしているところなのである。

10/30 (木)

University College of LondonにAnthony Finkelsteinを訪ねた。12時の約束で、たどり着くのに思ったより時間がかかって、2-3分遅れた。すぐにICよりちゃんとしたfaculty用のレストランで食事し、それから学生のところを回りながら、いろいろ話を聞いた。2時間だったが、とても親切に対応してくれ、いろいろな話ができる。

10/31 (金)

今日は珍しく、朝早くから夕方まで、ずっと大学の部屋にいた。Jeffはaccreditationのような仕事でYorkに出かけており、部屋にも珍しくLucioはいず、Howardも来なくて、Robしかいなかった。静かな一日で、高橋奨励賞の処理とか、追試問題作成とか、メールとか、雑事をこなした。11/17にBasharのところに行くことになった。Michael Jackson, Axelなどもメールの交換があった。安藤さんがJAISTから内諾の電話をもらったというメールもあった。

11/1 (土)

11月になった。郵便ストをやっている。それよりずっと前なので関連なく、10月初めに孝子が送ってくれた荷物が着かない。

午前中、ラグビーワールド杯のオーストラリア-アイルランド戦を見た。オーストラリアが楽勝するのかと思っていたら、1点差でようやく勝った。

こっちに来て初めて見たゲームがある。ラグビーのようでルールが違う。ラックがなく、ノット・リリース・ザ・ボールの反則もない。ラインアウトもない。徹底的にぶつかり合って、ターンオーバーがきわめて少ない。それで大きなトーナメントらしいものの決勝戦があって、Bradfordが勝って、大きな騒ぎだった。イギリスだけでやっているのかと思ったら、オーストラリアとウェールズとの国際試合があって、オーストラリアはやはり強いらしく、ウェールズは負けたが健闘したということだった。

天気がいいので、昼から出かけた。まず、この間閉まっていたHayward Galleryに行った。Saved!という変なタイトルの特別展をやっている。National Art Collections Fundという基金がこの100年に収集した芸術品を展示するというもので、収集した順序で、しかも購入金額を明示して展示するという変わったものである。いろいろなものがある。目玉の一つはヴェラスケスのToilet of Venus (The Rokeby Venus)である。裸の後姿は美しいが、鏡に映っている顔は田舎のおばさん風である。最近買っているものが当然高い。たとえばティツィアーノに1700万ポンド、ポッティチェリに4000万ポンドも出している(この数字は記憶が怪しいが)。

話が前後するが、その前にRoyal Festival Hallで明日のコンサートのモンテベルディの切符を買った。そのあと、AidaとLuciaの切符を買おうと思ってCovent Gardenに行ったが、どちらももう席がなかった。この間Orlandoと蝶々が簡単にそれなりのところが買えたので、甘く見ていた。

あきらめて、歩いてHobournのSir John Soan's Museumに行った。小さい美術館で、入場制限をしている。しかし中には驚くべきほどの数の、とくにローマ時代の美術品を、略奪してきたのかあるいはその模造品なのか、所狭しと飾ってある。John Soanは建築家なので、それらを並べている家そのもの、並べ方、周囲の調度品が、みな美術になっている。イギリスやヨーロッパにとって、文化というとローマだということが、よく分かる。

向かいのLincoln's Inn Fieldという公園の樹が、紅葉していて美しい。

11/2(日)

昼間はアパートでのらくらしていた。夜のコンサートのため早めに夕食を摂り、地下鉄でEmbarkmentまで行って、Hungerford Bridgeを渡った。この

辺の夜景も美しい。北岸側でライトアップしているのは, Victoria Embarkment GardensやCourtauld Institute Galleriesであろう。

コンサートはInside Monteverdiという2日間の企画で, 土曜にL'Orfeoをやって, それを見たかったが売り切れだった。今日はTenor Duetsというのと, Selva morale and moreというのがあり, ぼくが聴いたのは夜の部の後者である。

Selva moraleというのにはモンテヴェルディが死ぬ3年前, 1640年に出版された宗教曲集である。正確にはSelva morele (A moral and spritual anthology)というらしい。この夜の演奏はその中の7曲とその他の5曲で構成されている。声楽がソプラノ2人, アルト2人, テノール2人, バス2人。アルトといっても男のコントラアルトである。バイオリンが2台, チェロ, マンドリンの大きい, theorboというらしい, オルガン, という構成である。曲によってそのサブセットで演奏される。

指揮者はAndrew Carwoodといい, 合間に話をするが, モンテヴェルディの辛辣な表現に満ちた手紙を朗読して, 喝采を浴びていた。テノールの1人とソプラノの1人がとくによい声で, 全体に美しい演奏だった。

場所は, Queen Elizabeth Hallだが, Royal Opera Houseとはまったく対照的で, きわめて庶民的である。舞台も簡素というよりは粗末という感じだが, 客席は一杯だった。

11/4(火)

昨日今日と大学に行って, Bradford用のスライド作りなど, 真面目に仕事をした。Jeff Mageeがニュージーランドから帰ってきた。

11/5(水)

今日はGuy Fawkesの記念日で, 花火があるとSebastianたちから聞いていた。なんでも革命か何かで国会で爆発があったという歴史事件を記念するものらしい。確かに, 夜7時ごろになったら花火を打ち上げる音がし始めたので, 外に出てみた。テムズ川の川沿いの道まで出てみたが, 見物客など一人もいない。花火もたまにBettersea側で上がるが, 小さくて大したものではない。それにごく散発だ。しかし, Albert橋もChelsea橋も美しく照明され

ていて、風もなく気温も暖かく、月も美しく、心地よい夜景だった。Chelsea Royal Hospitalの裏手あたりで川辺に出て、そこからChelsea橋まで歩いた。遠くWestminsterあたりと、London橋あたりと思われる方で、少し賑やかそうな花火がたまに見える。しかしそれほど高くは上がらず、場所も時間も散発で、日本の隅田川の花火のような派手なものではない。

11/6(木)

今日は気温が17°Cもあったらしい。異様に暖かく、セーターを着ていると暑いくらいだ。空は晴れ、秋らしい高い雲がある。どうも異常気象が続いているらしい。

夜、Chelseaの映画館でIn the Cutという映画を見た。新聞評で、Meg Ryanの新境地というような紹介があり、King's Rd.の映画館でそれをやっているのに気がついたので、行ってみた。この間のHigh Street KensingtonのOdeanと違って座席指定ではないが、がらがらである。映画は猟奇犯罪を扱ったもので、メグ・ライアンの新境地というのは、かなり露骨なセックス描写があることと、人のよいコミックな役でない、というところである。カメラワークや画面の展開など質の高い映画であることは確かだが、暗く後味が悪い。

Bradford

11/7(金)

今日から田口さんに招かれたBradford大学を訪れる。8:35発の電車に乗るので、6:15に目覚ましをかけ、余裕を持って出かけたつもりが、思わぬところで抜けていた。Eustonから出ると思い込んで、Eustonに着いて表示を見たがそれらしい列車がない。改めて切符を見ると、King's Cross発である。また1駅地下鉄を乗って、それでも時間が十分余ったが、ドジではあった。角山の本にあったSt. Pancras駅の時計というのの写真を撮った。

Leedsまで2時間半。時間通り11:05に着いた。それから11:18発のBlackpool行に乗り換えて、2つ目がBradford Interchangeである。ホームまで田口さんが迎えに来てくれた。彼の同僚のDanというルーマニア人とHongという中国人とともに、中華の昼食を取った。それから2:00-3:00がセミナー。"Behavioural Analysis of Component Architectures"というタイトルで、

モデル検査の話をした。それから昔のmillを改造してHockneyの美術館にしているところに行き、パブで地元のビールを飲み、田口さんが予約しておいてくれたカレー料理の人気店で夕食を摂った。田口さんがよくホストしてくれて、感謝である。



St. Pancras Station

Leedsに向かう汽車の途中から空は曇り、霧が立ち込めてきた。ロンドンに来て以来の晴天続きと気温の暖かさは異常気象なのだろうが、やはり北に来ると気候も少し違うようだ。それでも田口さんの話では、この夏は異常に暑く、冷房がないからたまらなかったという。

Bradfordは昔、羊毛産業で栄えた町らしいが、今は衰退している。ロンドンの人は皆、あまりいいことを言わなかった。パキスタン系の住民が多く、それらは羊毛産業の労働者として連れてこられたが、産業が落ち込んで経済的に苦しい。そして人種暴動の事件もあったという。Robは町が人工的に碁盤の目のように切られていて、それが悪いように言っていた。

来てみると、確かに煤けた町という印象がある。市庁舎など古くて立派な建物もあるが、それらがみな煤けている。大学はかなりの規模だが、やはりImperial Collegeなどと比べると、国からくる金は桁違いに低いらしい。Dept. of Computingは学生が集まってくるらしいが、Engineeringは不人気で存亡の危機にあるという。

11/8(土)

朝10時に田口さんが車で迎えに来てくれた。あいにくの空模様である。雨はわずかだが、空はどんよりと曇っており、風が冷たい。しかし、これがイギリスらしいのではないかと思う。

Bolton Abbeyというところに行く。昔の僧院だが、ヘンリー8世によって破壊され、その廃墟がある。周囲にMoorが広がり、川が流れ、ハイキングやキャンプに絶好の場所らしいが、さすがに季節が悪くなっている、人は少ない。

Abbeyの一角の教会(聖堂)は屋根が修復されていて、聖堂としての機能を果たしている。屋根は木造で補修されているが、石造りの壁は壮麗といってもよい。この一帯は現在第11代目のDuke of Devonshireの所有だという。古本屋、喫茶店などもある。

次にSkiptonという町に行った。町に市場の店が連なり、にぎやかである。Fish & chipsの専門店というレストランで食事した。そのあと、Skipton Castleというところに行った。900年の歴史があるという。その間、もちろん付け加えられたり改造されたりして、城というより要塞として使われてきたようだ。

次にMalham Coveというところに案内してもらった。石灰岩が自然によって縦に削られて、不思議な光景を作っている。ここも散策路(footpath)が作られて、山歩きに向いたところだが、遠くから眺めるに留めた。

それから彼の家に案内された。Semi-detachedというタイプの家だという。買うまでに30軒ぐらい見たとのこと。14歳の女の子薫ちゃんと8歳の男の子創君がいる。2人とも学校になじんで楽しくやっているらしく、田口さんとしてはそれが安心らしい。奥さんは小柄で若く見えたが、47歳だという。ギョーザとかインゲンの和えたものとか、卵料理とか、ローストビーフとか和風の家庭料理でもてなしていただいた。

11/9(日)

今日もまた田口さんが10時に迎えに来てくれた。今日はブロンテ姉妹の記念館で、Brontë Paronage Museumといい、Haworthという町にある。Haworthはちょっとした観光地になっているが(といっても規模は小さい)、周りのmoorlandというのか、heathの野、荒野が見ものというところである。この辺ではしゃれた方のレストランThe StirrupというところでYorkshire puddingなどの昼食を摂り、せめてものことにそれはこちらでもった。そして、汽車に間に合うように駅に届けてもらった。



田口夫妻

この3日間、実に至れり尽くせりのサービスをしてもらった。イギリスの大学事情なども分かり、いろいろ面白かった。

11/11(火)

Inaugral Lectureというのがあった。教授への就任式で、講義とレセプションがある。教授になったのはGuang-Zhong Yangという人で、分野は医療用画像処理。画像がテーマだけにThe Needle in a Haystackと題した話は見所が多く、画像からあるパターンを聴衆に探し出させるなどインタラクティブ性もあり、話しぶりもスムーズでうまかった。この人は上海出身で、'88-'91にICのPh.D学生、その後はロンドンの病院(多分Royal Brompton & Harefield NHS Trust)で研究開発に従事し、1999年にlecturerとしてICに戻ってきて、2000年にreaderという具合で超スピードで出世した人らしい。

日本でこの手の講義といえは定年の最終講義だが、それと比べるともっとも脂の乗り切ったこのタイミングでお祝いと講義をするのは、よいことかもしれない。Basharも来ていたが、自分の時もすごく緊張したと言っていた。何しろ家族も来るし、多くの招待客がある。この夜も200-300人ぐらいいたらしい。

11/12(水)

Michael Jacksonと会った。4時に彼が訪ねてきてくれて、Jeff Kramer, Sebastianとともにいろいろな話をし、ぼくは来週Open Universityで話す予定のevolutionの紹介などもし、そのあと彼と二人で、Gloucester Rd.のインド料理屋Indian Delightだったか、そんなような名前のところに行った。彼との対話はいつも楽しい。Bradfordでカレーを食べたばかりだったが、ここのカレーもまあまあだった。

11/14(金)

安藤さんはJAISTに決めたというメールが来た。リョーインの方も思いのほかすんなり話が進んで、来年の1月1日付で異動するという。まずはめでたい。

PCのスクリーン・セイバーを何の気なしにいじって、My Picturesにある写真がランダムに出てくるのに変えた。それを忘れていたが、突然写真が出始

め、ロンドンに来た時の美季子の可愛い顔などが映し出されて、妙にセンチメンタルな気分になった。

11/15 (土)

午前中、またTVでラグビーのワールドカップを見た。準決勝でオーストラリアがニュージーランドに勝った。明日は同じ準決勝のイングランド対フランス戦があるが、フランスの方が強いだろう。フランス対オーストラリアの決勝となると、どちらが強いかわからない。

天気がよいので出かけることにした。行先はWindsorに決めた。ガイドブックによるとVictoria線のグリーン・ラインというところからバスが出るという。Sloane Squareから近いので、歩いて行った。勘よくたどり着いた。ちょうど12:00発のバスがあった。往復で£9と安い。5-6人しか乗っていない。それも途中でほとんど降り、Windsorで降りたのはぼくだけだった。

Windsor城は遠くから見てもそれと分かるような丘の上であり、中央の丸い城(round tower)はとくに遠方からの見栄えを意識して作られている。機械によるaudio tourを借りてみたが、これは失敗だった。雑音が多くて音がひどい。戻って交換してもらうのも面倒なので、最後まで使って出るときに文句を言おうと思っていたら、出るところには守衛がいるだけで、置き場所に置いて帰るというシステムだった。こういうものを聞きながら回ると、時間はかかるし主体性はなくなる。その分じっくり見学したともいえるが。

St. George's Chapelの中の造りは素晴らしい。State Apartmentsの方は、とにかく贅沢を尽くしているという印象で、それ以上のものはあまりない。

結局、見終わるのに4時までかかり(しかし、Hampton Courtより全体の規模は小さく感じた)、昼食を摂っていなかったのでパブに入ってaleとチキンを取り、バスの停留所に行ったら、折よく4時半ごろにバスが来た。帰りは香港人らしい若い男女がたく



Windsor Castle

さんいた。若い日本人も二人ぐらいいた。

Knights Bridgeで停まったのでそこで降り、Harrodsの裏を勘で歩いて、途中で一応地図を確認したら、Walton St.という正解の道だった。ここにもしやれた店が並んでいて、街路にクリスマス・ツリーのイルミネーションが飾られていた。

11/16(日)

何度か目が覚めたが、いろいろ夢を見て珍しく寝坊した。起きたのは8:30である。

意外なことに、フランスはいいところなく敗れた。イングランドはトライは1つもなかったが、John Wilkinsonがドロップゴール3つとペナルティキックをたくさん決めて24点取ったのに、フランスはミスばかりで1トライ・ゴールの7点のみだった。

ラグビー観戦の後、スパゲッティを茹でて食べた。それから2時過ぎに出かけた。

この間、M. Jacksonと家の話になって、Jeffの家に行ったときに、そこがWest Hamsteadだったので、ガイドブックには超高級住宅街と書いてあるとJeffに言ったら、West HamsteadはそのHamsteadの金持ちのservantが住んでいたところだと言ったという冗談を紹介した。そのときにMichaelがHamsteadに行ったことがあるかと聞くから、ないと答えたら、最近はちょっと俗化したがいいところだと言ったので、行ってみる気になった。

着いたらもう3時だった。しかし、天気は悪くないし寒くもない。超高級住宅街というのはKenwoodという方らしく、そちらまでは行けなかった。Hamstead駅近くにも大きな古い家が立ち並んでいるが、庭のようなものはほとんどなく、その分それほど豊かな感じを与えない。駅の近くはむしろ洒落た店が多いが、Chelseaで見慣れているせいか、それほど洗練された感じはしない。Keatsの家があるらしいが、見逃した。

Christ Churchに出て、そこからCannon Placeを歩いて、Hampstead Heathという公園に出た。公園のほんの一角を歩いたが、雑木林に囲まれ、自然が残っている感じで、なかなかよかった。夕焼けの空も美しい。また、Fitzjohn's Av.から脇に入ったSt. John Churchも見た。

次にOxford Circusに出て, Wigmore Hallに行ってみた. ここもMichaelに勧められた. ちょうどコンサートの途中の休憩時間だったようで, 人がたくさんいた. シーズン・プログラムをもらって帰った.

それから, Piccadilly Circus近くのBrewer St.の日本食料品店, といっても小さい店だが, そこで米などを買った.

11/17(月)

今日は, BasharのOpen Universityに行った. EustonからMilton Keynes行の電車に乗る. インターネットで調べた時の結果は, 35分ぐらいで着くはずだった. 早めに出たので予定したのより20分ぐらい早い電車に乗ったが, 着くのにほぼ1時間かかった. 後で, Basharに聞いたが, 各駅停車とノンストップがあり, ノンストップなら35分ぐらいらしい. 乗ったのは4つか5つの駅に停まった.

駅の周りとはとくに何も無い. タクシーはたくさん並んでいて, すぐに乗れた. アメリカの地方都市の飛行場に着いたような感じで, 街並みのようなものは見えず平野が広がり, その中を道が走っている. Basharの話ではMilton Keynesは30-35年前に開発されたところで, かなりの製造業の会社が本社を置いている. その周りには農村地帯があるという. 住宅地も開発されロンドンよりはるかに安い, かなり住む気のしない場所だという.

2時からのセミナーで, "Process of Object Evolution"というタイトルで話をした. 聴衆は10数名だったが, 途中でも活発に質問が出た. その前に, Charlesという55歳のBasharのPh.D学生と話をした.

Basharは話好きだが, 本当に気のいい人間である. あいにく天気はひどかったが, Open Universityというのがどういうものかという知識を得たのも, 有益だった. ところがアパートに帰って, PCを忘れてきたことに気づいた. Bradfordに行ったときはPCの電源を持っていくのを忘れたが, そういうドジが多い. アパートに備え付けのワイングラスを, すでに2つ割っている. 眼鏡を壊したり, どうも抜けている.

帰りEustonに着いたのは5時半ぐらいだった. 帰りは直行だった. それからVictoriaで乗り換えようとしたら, ちょうどラッシュアワーでホームがひどく混んでいる. 来た電車に乗り切れなかった, 歩いて帰った. 雨が少し降っていたが, 傘をさすほどでもない. 傘と言えば, 先週大学で傘を乾かそうと

ごみ箱の缶に入れていて、持って帰るのを忘れ、翌日行って見たら案の定、捨てられてしまっていた。前にも一度どこかのホテルで、同じ失敗をしたことがある。

11/18(火)

ロンドンの街路樹はプラタナスが多い。公園でもよく見る。そのプラタナスの葉も大半が散った。昨日は雨で、今日は曇りだ。それでも気温はさほど下がらず、コートはいらない。

大学へ行ったが、PCがないとメールのやり取りもできない。しかし、たまにはそれもよい。午前中は机に向かって、考えてはノートにペンで書きつけていた。PCに向かうより、思考とペンで書く動作が同調するようだ。アイデアが湧いて、少し先に進んだ。そこで勢いに乗ってどんどん進めればよいはずだが、昼、例によってうまくもないサンドイッチをSteve Ingram(この人は最初は先生だと思っていたが事務の人で、Turingすら知らない)と摂って、部屋に戻ったら、あまり気乗りがしなくなった。しばらくしてから切り上げ、Wingmore Hallに行った。今晚の切符がうまいことあった。さらに今週の金曜の分も買った。それからまだ時間があったので、ぶらぶら歩いてNational Galleryまで行き、今日はティツィアーノ、ラファエロあたりを中心に見た。あとはダヴィンチの岩窟のマリア、ヴェロネーゼなど。

夜のコンサートはBalcea Quartetというイギリス若手の弦楽四重奏団で、Beethovenの弦楽四重奏曲in A, op.18, no.5, シューマンのピアノ三重奏曲in Eb, op.47, モーツァルトの弦楽四重奏曲in F, K590というプログラムである。イギリスの有望な若手がこのようにドイツの正統的な音楽に正面から取り組むのは好ましい。演奏の水準もきわめて高い。と偉そうに言うものの、これらの曲をよく知っているわけではない。モーツァルトぐらいは何度も聴いているはずだが、いつも「ながら」のせいばかりと記憶していない。

このWigmoreというホールは小さいが、アールヌーボー調の建物でなかなかよい。アールヌーボーかどうか怪しいが、舞台の背景にラファエロ前派と思われる絵というか浮彫のようなものが、飾られている。

客層はロイヤル・オペラに近く、年齢層が高く、きちんとした身なりの人が多い。休憩時間に見ていると、互いに知り合いが多いようだ。常連だろう。赤ワインを飲みながら、廊下に貼ってあった古いポスターを見た。名前の知

っているところでは、コルトーとかケンプのものがある。古いものは1900年代、1910年代。それらはしかし、WigmoreではなくBechstein Hallと書いてある。どこかで聞いた名前だと思ったら、福田さんが買ったというピアノの名前だったことを思い出した。

1943年6月15日にギリクの声楽曲のコンサートをやっている。戦争中でロンドンが空襲でやられていたころではないかと思うが、1843年6月15日がギリクの誕生日で、100周年ということらしい。アンコールにWolfのItalian Serenadeという曲をやった。

今日はBushがロンドンに来たということで、抗議デモが計画され、警備も大がかりだとTVのニュースで盛んに言っていて、交通規制でもあるかと思っただが、こちらの方面には関係なかったのか、何事もなかった。

席は最前列で、室内楽を聴くにはよい場所である。奏者の間の目やしぐさによるやり取りもよく見える。シューマンの第4楽章では、チェロの最下弦を1全音分下げるといふ指示があるのだと解説にあったが、どうやるのかと見ていると、この曲は第3楽章と第4楽章の間に途切れがないが、第4楽章に入ってすぐにチェロ奏者が弦を緩め、耳を寄せて確かめていた。

11/19(水)

12時からLSSという集まりがあった。London Software Systemということらしく、前から聞いているようにJeff KramerとAnthony Finkelsteinが手を組んで、ICとUCLが協力して作る連合体の最初の会合である。連合体と言ってもvirtualな組織だということだが、それでもdirectorというポジションを設け、そのインタビューを2-3週間前にやるため、JeffがUCLに出かけて行った。そのとき、Axelも呼んだという話だった。その結果を聞いていなかったが、今日、David Rosenblumがなったということを知った。DavidはUC Irvineの人で、アメリカ人としてはおとなしいが、SIGSOFTの役員をしており、その関係で知っている。

両大学合わせて相当の数の人が集まり、教授陣が自己紹介と自分のPh.D学生の紹介をし、昼食(といっても例によって春巻きとかサンドイッチとかあまり食指をそそるものではないが)を摂り、そのあと両者が交代でデモを分散して行い、なかなか面白かった。こういうイベントも、あまり事前に

計画を立てず、きわめてインフォーマルに、しかしうまく融合させて進めるところが、Jeffのうまさなのか、その辺はよく分からない。

前にJeffに、Neilが言っていたことを教えたことがある。それはJeffとAnthonyが組むと強力で、支配的になってしまうことを心配するという話だ。Jeffはそれが気に入ったらしく、これまでも「それこそこのプロジェクトの狙いだ」と言っていたが、今日の挨拶にもそれを使った。ぼくとしては何だか告げ口をしたような気分もする。

11/20(木)

Jeffに会ったとき、Devidがdirectorになったことを知らなかったと言ったら、彼は今の米国の状況に少々愛想を尽かしていて、ヨーロッパにポジションを求めているという話だった。しかし彼は純粹の米国人ではないかと言ったが、どうも最近のアメリカの一般文化状況などに嫌気がさしているらしい。そういう人が結構いるというのである。

今日もイスタンブールで爆弾テロがあり、多数の死者が出た。イラク戦争以来やはりおかしくなっている。もちろんそれ以前からのスラエルとアラブの対立という図式の延長でもあるが

しかし、この世界ではBasharはムスリムで、この間行った時もラマダン中だったし、Jeff、Sebastianなどイスラエル系はもちろん多い。トルコ人のNiluferとは今日話をしなかったが、どう思っているだろうか。

11/21(金)

Manny Lehmanの家に行った。Juan RamilとNorthern LineのHendon Centralという駅で9:45に待ち合わせた。ちょっと早く着きすぎるのではないかと思って家を出たが、この線は郊外に行くに従って駅の間隔が広がり、案外時間がかかって、ちょうどいい時間に着いた。Juanはすでに駅で待っていた。

そこから15分ほど歩いて、Mannyの家に着いた。Juanは途中で歩きながら、携帯でMannyに電話をするという気の配り方を見せた。この辺りはまったくの住宅街である。Mannyはこの家に1984年から住んでいるという。前はもっと広い家にいたが、子供たちが独立して、ここに移ったとのことである。

Juanがわれわれの原稿に周到的なreviewをしてくれていて、それも大体が表現に関する事なので、それほど相談することはなかった。Mannyはあまりちゃんと読んではいないようで、とくに異論も出なかったが、Software Evolution Studyというのはdesignではなく科学的な観測からモデルを作るものだということに、やはり強いこだわりを見せた。

あとは、Mannyが23インチのMacのディスプレイを見せたがり、そこで結婚50周年、つまり金婚式に息子が作ったというビデオを見た。よくできている。Mannyは5人の子供、26人の孫、1人の曾孫がいるという。それで、今、3本論文を書いているという。

12時少し前に辞し、JuanとBrent Cross駅近くのイタリアン・レストランで食事した。この辺りはユダヤ人が多く住む地区らしい。街で多くのユダヤ人を見かけたし、ユダヤ料理店なども目立つ。

夜はまた、Wigmore Hallのコンサートに出かけた。Early Opera Companyというグループの演奏で、Johann Adolf Hasseという作曲家のMarc'Antonio e Cleopatraというオペラなのかオラトリオなのか、その演奏会形式の公演である。ドイツのBrunswick出身のHasseがイタリアに留学して、1752年ごろナポリで書いた作品だという。

オーケストラはバイオリン2、ビオラ、チェロ、コントラバス、テオルボとハーブシコードで、Christian Curnynという人がハーブシコードを弾きながら指揮する。ビオラ奏者がとても若い女性で色が白く美人である。それが一生懸命引いている姿がとても好ましい。その隣でコントラバスを引いている青年が、S&GのGarfunkelのような縮れ毛と細面でなかなかよい顔をしており、ビオラの女性とのロマンスなども勝手に想像した。しかし、休憩時間に立ち上がった時に分かったが、男性と思ったこのコントラバス奏者は女性だった。プログラムを見ても明らかである(Judith Evans, なおビオラはLouise Hogan)。

曲はクレオパトラのソプラノとアントニーのアルトが交互にレチタチーヴォとアリアを繰り返して進む。このアルトは女性で体格も立派だが、アルトという声域のせいか声が十分には伸びない。これが男声のカストラートだったらずいぶん違うのだろうが。ソプラノは非常に声がよく、最初のレチタチーヴォからこれはと思わせた。しかし、最初のアリアはあまりよくなかった。2つ目のアリアは美しかった。

レチタチーヴォは定形なのか、バッハの受難曲などによく似ている。ただ最後の方で、ハープシコードの伴奏でなく、オーケストラの伴奏によるレチタチーヴォがあり、工夫がみられる。

曲全体にはそれほど独創性がない感じだが、十分楽しめた。

11/22(土)

今週になって、ほとんど陽が射さない。イギリスの気候らしくなってきたか。Bradfordから帰って来た時、Jeffにどうだったかと聞かれて、いろいろなところに連れて行ってもらったが、天気は悪かったと言ったら、北の方はそうで、gloomyという言うのでおかしかった。南から見ればロンドンの天気もgloomyと認識されていよう。小さい英国島の中でも、もちろん南北の差は大きいに違いないが、少しの差でも南が北の天気を悪く言うのはおかしい。

それでも気温はそれほど下がらない。昨日も夕方暖かったので、コンサートにコートなしで出かけた。帰りはさすがにやや寒かったが、それでも大したことはない。

ワールドカップ・ラグビーの決勝。イングランドーオーストラリアは接戦だった。終始イングランドが押していたが、終了直前のペナルティ・キックでオーストラリアが追いつき、14-14。延長になって、すぐJohnny Wilkinsonがペナルティゴールを決めて14-17となったが、延長(10分ハーフ)の終了2分前にオーストラリアがまたPGを決めて同点。ところが終了20秒前にJohnnyがドロップゴールを決めてすぐ終了。イングランドの優勝となった。

イギリスに住んでいるのでイングランドを応援しそうなものだが、なぜかオーストラリアを応援して観ていた。しかし、内容的にイングランドが勝ったのは妥当な試合だった。ワールドカップで北半球の国が優勝したのは、初めてらしい。これまで、ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、オーストラリアと勝ってきたという。

11/23(日)

昨日は一日雨で、2度向かいのSainsbury'sに買い物に行った以外は外に出なかった。TVの天気予報を見ると、この1週間も毎日雨らしい。確かに今

日も雨. ロンドンに別れるには, いい時期かもしれない.

11/24(月)

Annj Danwar(University of Cambridge)という人の"Preservation Properties and Databases"というセミナーを聴いた. まったく数学の話である.

11/26(水)

昨日, 今日と紙名君が送ってきたECOOPに投稿するという論文の手直しをした. Mixinを入れたJava, McJavaの話である. よく書いてはあるが結構おかしいところもある.

Brussels

11/27(木)

今日からAxel van Lamsweerdeを訪ねてブリュッセルに行く. 6:00起床. 7:30に家を出, Waterloo駅から8:39発のEurostarに乗った. 荷物とパスポートの検査はあるが, 後は普通の列車に乗るのと変わらず, 簡便である. 値段はこの間Bradfordに行った時とほぼ同じで, 座席はこちらの方がずっとよい.

1時間強走ると, ドーバー海峡のトンネルになる. トンネル通過に20分かかった. ロンドンは曇り空だったが, トンネルを抜けたら青空だった. しかし, Lille Europe駅を通過してBrusselsに向け走り出したら, 霧が立ちこめてきた.

12:10(現地時間)着. ロンドンから2時間半. 便利だ. 出口でAxelが迎えてくれた. すぐに彼の車で大学, Univerite Catholique de Louvainに向かう. その途中で教えてくれたが, このLouvain大学は15世紀に作られたきわめて由緒のある大学で, Axel自身もここを卒業しているが, 1970年代に政治的に分割されたという. ベルギーはFlemish(フランダース語, 大体オランダ語)とフランス語の2つの文化圏に分かれているが, この大学はFlemish圏にあって, 大学ではFlemishのクラスとフランス語のクラスが共存していた. それを2つに分けて, フランス語系は新たに別の場所に大学を一から作り

直し、その周りにフランス語系の町も作るということになったという。この町はLouvan la Neuve Univと呼ばれている。

大学に着いて、Axelの部屋に荷物を置き、すぐに昼食に出かけた。大学自体が丘の斜面に沿ってあり、Axel等のComputing Science関係は、最も高いところにある。そこから坂をどんどん下りていくと、レストランやその他の店がある。それでも大学の敷地の中らしい。

ちょっと洒落たレストランで、ぼくは地中海で捕れるという何とかいうタイに似た外皮が赤で肉が白い魚の料理を食べたが、なかなかよかった。午後のセミナーを考えて、軽いビールを一杯だけ飲んだ。

学科に戻って、Kim Mensと彼の学生の話聞いた。Kimの話はaspectの切り出しを論理的なquery languageを用いて可能にするというもので、Smalltalkを対象に、たとえばVisitor patternのacceptを集めてくるというのを、名前のconventionで探すのと、構造で探すのとをqueryとして書いて、さらにその両者の結果が同じかどうかをチェックできるというような例を出していた。Kimの学生はオブジェクトのdynamic compositionを可能にするという話で、ちょっとわれわれの問題意識と近い。真面目そうな感じのよい青年だった。

4時から自分のセミナー。Bradfordで話したものを、それだけではこのグループにはもの足りないのではないかと思って、鵜林君のAOPに対するモデル検査の話を加えてきたが、結局入門的な部分を端折らなかったので、そちらの話までする時間はなかった。いずれにせよ中島震がやった仕事で、自分はあまり貢献していないこともあって、あまりうまく話せたとは言えないかもしれない。

終わってから、客員用の部屋を借り、Axelがシステム担当者に頼んでくれて、インターネットにアクセスできるようにしてくれたはずが、うまく接続できなかった。しかし、行きEurostarで最後まで手を入れた紙名君の原稿へのコメントをPCに入力した。それからAxelに車でBrusselsのホテルまで送ってもらって、チェックインした。IBISというホテルで、Grand Placeという町の中心の有名な広場のすぐそばである。Axelが予約してくれただけでなく、支払いもしてくれる。実に、何から何までも至れり尽くせりである。ホテルに入ったのが7時50分ぐらいで、8時40分に迎えに来るとのことだった。

Axelはぼくを休ませて、自分はいったん家に帰るつもりだったらしいが、道が混んでいるので、帰るのをあきらめて駐車場に入れ、近くをぶらぶらして待っていたということを後で聞いた。まず、Grand Place広場に行った。彼がベルギーの宝石だと言うだけあって、確かにこの広場は素晴らしい。観光客にも有名な近くの魚料理屋の立ち並ぶ一角に連れて行ってくれた。最初の有名な店は満員で、長い待ち行列があった。2つ目の店も一杯で、3つ目の店に入った。Leonという店で、19世紀半ばから開業しているという。Axelの勧めるベルギー料理の一つのWaterzooiという魚介類を煮た料理を頼み、前菜にはAxelはムール貝を勧めたが、ぼくはカキを選んだ。Waterzooiはブイヤベースのようなものを想像したがもっと品がよく、スープではなくて、クリーム系のソースがかかっていた。おいしかった。

11/28(金)

Axelが調べておいてくれた8:26の列車に乗って、Louvain la Neuve Univ.に向かった。ラッシュ時にAxelが車で迎えに来るのは恐ろしく時間がかかるということと、彼の下のお嬢さんCelineが建築科の学生なのだそうだが、卒業制作の模型を運ぶために車があるので、彼自身も電車で大学に行くという。

ホテルのすぐそばにBrussels Central駅がある。このときまで全然金を使わなかったのに、ユーロに換えていなかった。ホテルで換えるべきかとちょっと思ったが、駅に行けば何とかなるだろうと思って、深く考えずに出た。駅に着いたのがすでに8:10ぐらいだった。切符売場でポンドで買えるかと聞いたら、だめだという。それで両替所が近くにあるか聞いたら、駅構内にあるが、今の時間に開いているかどうか分からないという。ATMを聞いたら通りの向かいにあるという。両替所の方に行ってみたが、確かに閉まっている。ATMを試そうかと思ったが、そうだとクレジットカードで買えばいいと考え直し、また窓口に行って、ちょっと待った後、Louvain NUの切符を求めたら3.9ユーロだというので、カードを出したらだめだと言う。安すぎるので使えないらしい。

この辺で、ずいぶん焦ってきた。通りの向かいに確かにCity Bankがある。そこに走って行ってみると、24時間サービスとある。しかし入り口が閉まっている。カードで入るようになっているので、キャッシュカードを試してみたらドアが開いた。急いでマシンに走り、カードの投入口がわからずウロウロしてからカードを入れたら、ID Numberを入れるとききた。このID Numberという

のは暗証番号とはまた別かと疑いながら暗証番号を入れてみると、はねられた。ここで絶望的な気分になった。とにかくもう一度試そうと、キャンセルしてカードを取り出し、もう一度暗証番号を入れたら、今度は通った。50ユーロを下ろして駅に走ったら、長い行列ができています。なぜか一人しかいない列があって、他の窓口と違ってInternationalと書いてあるのでまずいのかと疑いながら、目的駅を言ったら、首尾よく切符を売ってくれた。そこでついでにプラットフォームを聞き、3番だと教わった。それで8:24頃にホームにたどり着いた。ところが列車はちょっと遅れていて、8:26に来たのは8:20発予定の別の汽車で、やや不安だったが、それを見過ごしたらようやく目的の汽車が来て、乗り込むことができた。途中から偶然にも同じ車両にAxelとEmmanuelという彼の学生と、もう一人が乗り込んできた。

Axelはこの日一日、ぼくのために彼のグループのメンバーが入れ替わり立ち替わり発表するというミーティングを設定してくれていた。これは実によい企画だった。逆の立場の際、これを見習うとよいと思った。メンバーには学生だけでなく、彼が作ったセンターとそれに関連するツール開発の会社の人間がいる。皆ちゃんとした英語をしゃべるだけではなく、互いの議論も英語でやる。全部で少なくとも12人はいた。Axelは午前中の途中、授業のために席を外したが、それ以外は全面的に付き合った。昼、一緒に食事したのが11人で、少なくとも一人はこの食事に参加しなかったのだから、ミーティングの参加者は最低12人ということになるが、もっといただろう。

帰りは18:45の汽車にAxelと乗ったら、先にEmmanuel Letierがいた。彼らは途中の駅で降り、20:15にAxelがまたホテルに迎えに来てくれるということだった。

Axelが来たのはやや遅れた。毎週金曜の夜は、彼の息子の5歳と3歳になる女の子の孫を預かることになっているという。そのこともあり、道も混んでちょっと遅れたらしい。とにかく、彼の家に連れて行ってくれた。びっくりするほど大きな家である。1840年に建てられた家だという。しかし、実に見事に改装されている。先週の土曜に、Dominiqueは初めて個展をやったという。35点だったかの作品を並べ、100人だか200人だかの客が来たそうだ。そういうことが楽々できる家である。彼女の絵は、アクリルで（油はアレルギーが出るという）、割と単純なアブストラクトである。「お茶の水1」「お茶の水2」というのと「新宿1」「新宿2」という作品がある。これらは、去年ぼくが呼んで彼らが東京に来た時に撮った写真を元になっている。20点ぐらいは売れた

らしい。Axelが照明係で、大量のライトを買い込んで、1点1点を照らすようにしている。じつにまめだ。

この残ったものをDominiqueがぼくに見せてくれている間に、Axelが食事の支度をした。といっても料理は多分、Dominiqueが基本的にやっておいたらしい。仕上げと並べるという仕事を、当然のように受け持っている。Leffeというビールをまず飲んだ。料理は、ギリシャ風と言っていたが、イカ、タコ、チーズ、エビなどの揚げ物と、アンチョビ、サーモン、レタス、豆など様々なものが集められたサラダ風のものである。白ワインもよかったし、食後のチーズと赤ワインもよかった。思わず長居をし、12時過ぎに、またまたAxelにホテルまで送ってもらった。

11/29(土)

今日はAxelが10時に迎えに来るはずだったが、ちょっと遅れて10時20分ぐらいに来た。歩きながらいろいろなところを紹介してくれた。ベルギーの9世紀の英雄の銅像を見てこれを撫で、また小便小僧の本家を見た。さらに骨董市に行き、店を一応順に眺めてから、Notre-Dame del la Chapelle という教会に入った。結婚式の最中だった。Axelがおや中国人の結婚式だと言った。ベルギー人らしい年取った神父が出てきて、話を始めたら、それが日本語なので仰天した。栄光で聞き慣れた外人神父の口調である。アクセントはあるが、流暢だ。日本の教会にいたことがあるに違いない。これは面白かったが、教会の中を見られないので、後で来ようといったんそこを出た。



Axel and Dominique



Dominique's Works

今日は天気がよい。寒い風がなく、気持ちがいい。次に美術館のRoyal Museum of Fine Arts of Belgiumに行った。van der Weyden, Memblin, ブリュージュル, ルーベンス, Delvaux, ルネ・マグリット, などを見た。

それから教会に戻った。ゴシック建築である。美しいステンドグラスが、あらゆる壁面を飾っている。今日は陽が出ているので、とくに美しい。それからFolstaffというcafeで、北海の小エビをゆでて、トマトに挟んだ料理を食べ、Olvaryという僧院ビールを飲んだ。これだけはぼくに払わせてもらったが、ほんの気持ちのものでしかない。

その後、今度はCathedral of Saint-Michel and Guduleというカテドラルを見た。これは起源がさっきの教会よりさらに古く800年頃というが、今の建物はやはりゴシックである。

さらに車でLouvainに連れて行ってもらった。そこに古い女子修道僧たちの村をそっくり保存してあるところがある。保存してあるだけでなく、実際に学生や大学が使っている(ここに分割された元の大学があるのである)。しかし、静かだ。Axelたちが結婚式を挙げたという場所も見た。

この3日間、Axelにはすっかりお世話になった。帰りのEurostarでこの間の日記を書き始め、荷物を調べたらホテルにLondonという小説と、イタリア語の入門書を忘れてきたらしいことに気がつき、度々のことながら自分にあきれるとともにがっかりした。

11/30(日)

昨日帰って来た時は、雨がやみかけてはいたが道は相当に濡れていた。今日は朝から晴れたので、出かけることにし、前から気になっていた漱石記念館に行こうと決めた。「地球の歩き方」の紹介は、他の博物館と違って郊外だから地図がなく、地下鉄の駅名Clapham Commonと住所が載っているだけである。郊外といっても地下鉄ゾーン2の範囲内で、たいして遠くはない。住所は80B The Chaseとある。駅を出て、周りをしばらく歩いてThe Chaseという通りを探したが、見つからない。昼をだいぶ回ったので、近くのイタリアン・レストランに入ってスパゲッティを食べた。ちょっと茹すぎだったし、味も薄かったが、そもそも期待するようなレストランではなく、店の感じは悪くなかった。そこで住所を聞いて大体の場所は分かった。

店を出て、教えられた辺りに行った。そこでまた人に聞いて、The Chaseという通りも分かった。で80Bという番地であるが、確かに80というのはあった。地上3階、地下1階になっているので、たとえば地下部分を80Bというのかもしれないが、表示はない。そもそもSoseki Museum in Londonといった表示が出ていない。つぶれたか引越したかしたのだろうと思って、諦めた。後でWebで調べてみると、ちゃんとWebページはある。しかし、その中に「2003年の開館期間は終了しました」とある。ずいぶんいい加減だ。でもよく見ると、来年は2月に開館すべく準備中らしい。そして、通りの向かいの81が漱石の5番目の下宿で、彼が最も長く住んだところであることを知った。1901/7/20-1902/12/5の間だという。

持っている「地球の歩き方」が古いのでそのせいかと思ったが、そうとばかりは言えないようだ。次に、前にロンドンで買ったBallyの靴が気に入ったので、「地球の歩き方」にあるKnights BridgeのBallyの店に行ってみることにした。ところが指定の場所というのはHarrodsの道路を隔てた向かいだが、そこにはBallyはない。周りを探してみても、それらしいのはない。前に靴を買ったのはHarrodsだったと思ったので、Harrodsに入ってみた。しかし、ここではBallyを扱っていない。King's Roadにあると教えてくれたが、そこにはあまり男物がないことを知っている。さらに聞くと、New Bond St.にあると言う。

地下鉄でGreen Parkまで行った。駅のポスターでRoyal Academy of Artsで11/29からIlluminating the Renaissanceという特別展が始まっていることを知った。The Triumph of Flemish Manuscript Painting in Europeとある。ベルギー帰りだから、まずこれを見なければと思って、美術館に行った。この前のラファエロ前派もまだやっていて、併設であるが、入場券は別である。入ってみるまでよく理解していなかったが、Manuscript Illuminationというのは印刷術以前の本の挿絵のことであった。普通の油彩画を期待していたので、ちょっとがっかりした。しかし、入り口近くに本で見たRogier van der Weydenの有名な挿絵(Presentation Scene, fol.1 of Jacque de Guise, 1448)があり、腰を落ち着けてみる気になった。

12/1(月)

とうとう12月になった。後、10日足らずと思うと、もう少し長くいることにしてもよかったかなと思う。しかし、今日も朝から雨で、潮時かなという感じもする。

Jeff Kramerがシンガポールから帰ってきた。Nanyang Technology Universityの新設学科の評価委員で出かけていたという。こちらはBrusselsの土産話をした。

吉村鉄太郎さんが、10時半に訪ねてきた。Symbianという携帯電話用のOSの日本におけるパートナーを吉村さんの会社で手掛けており、そのconferenceでロンドンに来たとのこと。Jeffに紹介し、しばらく話をした。

それから昼食に、Sloane Ave.にあるMichelin Tyre社のビル内のレストラン Bibendumに行った。毎日のようにその前を通るが、食事をしたのは初めてである。Jeffがここはよいと言っていた。確かにとても上質だった。ぼくは前菜にハトの料理を取った。鳩肉とネギのような野菜とソーセージの切片のようなものが、いずれも軟らかく調理され、それに豆と赤ワイン系のとてもよくできたソースがかかっている。このソースが最高である。主菜はcodで、それを巻いていたためであるが、これも非常によい。軽いクリーム系のソースがかかっていたが、よく覚えていない。副菜のじゃがいもとインゲン(?)を茹でたものの茹で加減も最高だった。とくにインゲンの方が。デザートは crumberry puddingでこれにも満足した。Pouilly-Fumeのハーフボトルを頼んだが、これもよかった。ぼくがご馳走した。

和辻哲郎「イタリア古寺巡礼」(岩波文庫)読了

1000ページのLondon the novelを読み出してから、他の読書がストップしてしまった。僅かに並行して、ごくたまに読んでいたのがこの本で、"London"をブラッセルのホテルに忘れてきた副作用でこちらを読み終えた。



Michelin Tyre

和辻がイタリアに行ったのは、1927年の暮れで、それから1928年の4月まで滞在中に家に出した手紙を元に編集して本として出版したのが、なぜか戦後の1950年である。高階秀爾の解説によれば「当時京都大学助教授であった和辻哲郎が文部省の海外留学生としてヨーロッパに渡ったのは、1927(昭和2)年2月から翌年の7月までの約1年半のことである。留学地はドイツであったが、その間に、本

書に見られるように、フランス、イタリアの各地を巡って、教会堂、美術館などを訪れている」ということである。つまり、現在の自分と同じ制度でヨーロッパに來ているといえるわけである。しかし、ずいぶん優雅なものである。高級ホテルに泊まり、よいレストランで食事するだけでなく、当時は高かったのではないかと思われる自動車や馬車などもよくチャーターしている。そして毎日教会や美術館を見歩く、いってみれば観光旅行をしている。昔は文部省の旅費も潤沢に出たのか。もっとも漱石のロンドン生活は、結構貧乏生活だったようだ。

4半世紀の差があるが、漱石の頃のほうが海外に派遣されるのはエリート中のエリートだったはずだ。しかし、この4半世紀の間に、日本が豊かになったのだろうか。それとも和辻の家が資産家だったのか。とはいうものの、世間から見れば僕の今回の出張も優雅なものと思われるかもしれない。何しろ官費である。イタリア案内という面より、そのような現在の自分との比較という意味で、結構面白いところがあった。

ちょっと意外なのは、見て歩くばかりで、人と会うということがほとんどない。まして講演をしたとか会議に参加して議論したとかということがない。これは滞在地がドイツで、イタリアは単にその間の旅行だったからかもしれない。しかし、一人で歩いているわけではなく、日本人の仲間がいつも誰かいたようだ。ガイドのような者も雇っていたかもしれない。日本人は何人も出てくるが、その頃まだヨーロッパにいる日本人は少ないので、近くにいれば連絡を取って寄り集まるのが自然だったのかもしれない。

専門家ゆえ多くの美術品、とくに絵画は事前に写真で仔細に研究した上で実物を見たようだが、当時の写真は白黒だったので、実物を見たときに色がどうだったか、という記述が盛んに出てくる。これも時代を感じさせる。もちろん現在のカラー写真も実物とは違うので、今だったら色や質感に関して、またそれなりの議論を和辻はしたことであろうが。

12/5(金)

ロンドン滞在も残り僅かになった。なんだか名残惜しい気がする。天気はずっと悪いので、その点は心置きない感じもあるが、連絡を取ってみたらミラノもひどい天気が続いている、つまり雨ばかりとのことである。

今週はEpsilonの仕事を少し進めた。これに目鼻を付けることを途中からロンドン滞在中の目標にしたが、文書としてまとまるところまではいかなかった。しかし、それなりの見通しは出てきた。

一人暮らしでいろいろ感じたことの中に、消費ということがある。普段、食品や家庭で使う消耗品を買うことがほとんどない。たまに買うのは本とかレコードとか、消耗しないものである。一方こちらでは、ほとんど毎日のようにスーパーに寄り、食べ物を買う。それはどんどん消費されて、包装や残りくずをごみ箱に捨てる。この消費の実感というのは、妙に気持ちのいいものである。スーパーで何を買おうかとウロウロするのも、案外楽しい。孝子が改めて「ワインのつまみの作り方」の本を送ってくれたので、このところ少し工夫している。昨日は、豚肉、ピクルス、マッシュルームをクリームで煮る料理を作った。

食品だけでなく、ティッシュペーパー、シャンプーなども当然使い切って買うことになる。面白いのは、ヘアトニックがあまりないことである。持ってきたものがなくなって、最初にBootsで目についたものをすぐ買った。これはBootsのラベルが付いたものだが、嫌な臭いがした。しかし瓶の口が広くて出がよいので、気に入らないながらどんどん使って、次を買うことにした。で、次にKing's Rd.の2つのBootsやPeter Jonesで探したが、男性用の化粧品のシリーズはいろいろあって、その中にアフターシェーブやボディローションはそろっているが、ヘアトニックはない。こっちの男性は髪の毛には何もつけないのか？

もっともヘアトニックなど習慣で付けているが、どういう意味があるのかと聞かれれば、よく分からないとしか言えない。ようやくPeter Jonesの店員に聞いて、その売場にある唯一の製品を買った。Bootsのものより匂いはましである。

夜は、Jeffがまた家に呼んでくれた。結構気を使ってくれる。大学からは割と早く帰り、この間ブリュッセルで買ったNeuhausuのチョコレートをお土産に持っていくなどの準備をしたくせに、Jeffの家の住所を書いた紙を持って出なかった。一度行っているから問題ないと思っていた。地下鉄West Hamsteadからの道は問題なく覚えていた。最後に入る道も一度間違えかけたが、すぐに正しい路地に入った。しかし、そこに立ち並ぶ似たような家のどれだったかが分からない。この前はJeffが外に出て迎えてくれたので、それがかえって番地という記憶を失くしている。大体見当をつけて、明かりの点いている15番の家の呼び鈴を押した。誰かと聞くから、違う家だと分

かった。それでKramer教授の家ですかと聞いたら、それは9番だと扉を開けずに男の声が答えた。9番の家は灯りがついていない。それで灯りの点いている7番の呼び鈴を押したら、すぐにJeffが戸を開けてくれた。

この日、JeffはDavid Rosenblum夫妻を呼んでいた。12/8,9にICSEのPCミーティングがロンドンであるが、DavidはJacky EstublierとともにそのPCのco-chairである。Davidは例のLSSのdirectorが決まっていて、1月からこちらに住む予定である。しかし、SIGSOFTのExecutive Committeeでぼくとはしょっちゅう会っているはずなのに、ぼくの名前をKokichiと間違えた。二木さんが今度のPCに入っているからである。

どうもこの夫妻も、ユダヤ人らしい。名前からしてそうかもしれないと思ったが、確かにユダヤに関連して名前がどうこうということも言っていた。奥さんの実家の名前がまたReichというのだという。それではむしろ、ユダヤよりナチが連想されてしまう。ただ微妙な話でよく聞き取れないこともあり、こちらから詮索もしにくい話題なので、正確なところは分からない。しかし、学問の世界はやはり、ユダヤ系が多いということだろう。

この日はJeffのお父さんも呼んでいた。82歳とのことだが、自分で車を運転して来ていて、あまり食べずにまた一人で帰って行った。

David達は、この間の吉村さんと同じEdgewater Rd.のヒルトンに泊っているというのも面白かった。このHiltonは最新で大きく、Hiltonの中では安いらしい。付近はアラブ人が多いところで、吉村さんはロンドンで一番安全なホテルだとイギリス人に言われたと言っていた。

Davidの話でおかしかったのは、Dick Taylorのことである。Axelが彼のことを超保守的な共和党派だと言っていたが、Davidによると、なんと進化論を信じていないのだという。そんな科学者がいるのか。もう一つ、それとどう結びつくのか分からぬが、彼はヌーディストなのだそうだ。

12/6(土)

今日はずいぶん寝坊した。相変わらず空はどんより曇っている。

昼、食料の買い物がてら、Karlyleの家というのを再度探しに行った。前にここに書いたものを見ると、孝子たちが帰ったすぐ後のやはり土曜日に、しかもJeffの家に呼ばれた日にこの辺りに行っている。ちょうど2か月前だ。カー

ライルという標識はあっても、肝心の家がなかなか見つからない。しかし、夏目漱石もここを訪れて、そのことを文章にしているらしいので、よく探してみた。すると、Cheyne Rowの東側の家壁に、カーライルのあまり目立たない胸像の浮彫と、1834~1881という文字が見つかった(このとき正確に記憶したわけではないが、あとで調べたところおそらくこの期間だろう)。その後、川沿いの銅像を見ると、生まれたのが1795、死んだのが1881とあったと思う。「地球の歩き方」ではこの家を博物館として公開しているように書いてあるが、その気配はない。そういう意味では先週の漱石記念館と同じである。

帰りにWaitroseでハマグリとムール貝などを買って帰った。2か月前に比べると、スーパー通いも慣れたものだ。

12/7(日)

ロンドン最後の日曜は、最近にしては珍しく快晴だった。

昼から出かけ、まずPeter Jonesに行った。外の空気はさすがに冷たいが、気持ちがいい。Peter Jonesで安い靴を買った。前に買ったBallyに代わるものを探して、New Bond St.に行ったときは、置いてある靴が£300ぐらいなので、それに気に入ったものもなかったのやめにしたが、ここでは形も履き心地も気に入ったものが、なんと£85であった。イギリスのLoakeというメーカーだが、製造はイタリアでmade in Italyとなっている。

次に地下鉄でBond St.に行き、Selfridgesに入ってみた。ここはHarrodsと同じように有名で、それより庶民的な店である。とくに何か探すわけではなく、どんな店か全体を見てみた。それからガイドブックにOxford St.のTESCOのことが載っていたので、入ってみた。普通の食料品のスーパーである。しかし、置いてあるものはWaitroseの方がよい。それからもう一つ、Oxford Circusに近いデパートを覗いた。John Lewisだろうか。どこも、クリスマス・ショッピングの人たちで賑わっている。しかし、ロンドンの街のクリスマスの飾りつけは、あまりごてごてしていなくて品がよい。

それから、3度目になるがNational Gallery of Artsに行った。トラファルガー広場にも、大きなツリーがある。今日は、Gainsborough, Constable, Turnerのイギリスの画家と、18-19世紀の絵を見た。

帰り, またWaitroseに行った. イカを買うつもりが, 日曜で店じまいが早く買い損ねた. 途中, King's Rd.を西に向かって歩いてみた. 夕映えが美しかった. 夕映えというよりは, すでに暗いが西の空だけ僅かに白さが残っている.

12/8(月)

朝は普通にICに行った. 昨日の続きで, 快晴で気持ちのよい日である. しかし, 昼になったらすっかり雲に覆われた. NicとJeff Mageeに聞いて, ICSEのPC meetingの場所を確かめた. IEE Savoy PlaceでSavoy Hotelの隣である. Carlo, Pankaj, Nazim, Nielと話をしたかったので, 夕方訪ねることにした.

昼, いったんアパートに戻り, スパゲッティを茹でて食べ, 電話代を払い, 郵便局へ行ってチョコレートを送った. クリスマスシーズンで, Sloan Sq. 近くの郵便局は道にまで行列ができていた. それを辛抱強く待って, 出した. £7.85の切手代.

ICに戻って, ちょっと仕事をした後, 片づけをした. そして4時過ぎに, Savoy Placeに向かった. 地下鉄のEmbarkmentまで, 一本である. 着いたら, Alex Wolf, Dick Taylorなど7-8人が外にいた. 会議が終わったのかと思ったら, conflictで外にいるグループだった. Alexとしばらく話をした. 次にconflict groupが入れ替わって, Lori Clarkが出てきた. Loriが論文のことを話し出したので, あわてて自分は今年のPCではないから, 話しちゃだめだと言った. Loriがconflictのある論文の議論が終わって, 今日のところはお開きになったらしく, まずNielが出てきて, 向こうからぼくを見つけた.

次に, PankajとAPSECの件, Carloとミラノ行きの件, Nazimと本の件を話して, 一応わざわざ来た目的を果たした. 二木, 井上, 中小路とも会い, Axelとも話した. 最後に, JeffとAnthonyが出てきて, JeffはJeff Mageeからぼくが来ることを聞いていたらしく, 驚かなかった. 今日はPCディナーがある. Anthonyがそれに来いと言うから, そのために来たのではないと遠慮したが, せひにと言われちゃっかり便乗した. まず, Jeff, Anthony, Bashar, Nazimともう一人の女性とでコーヒーを飲み, それから地下鉄でLiverpool St.に行った. そこに全員集合し, walking tourがあった. 二人の女性ガイドが付き, 2組に分かれて, East EndのJack the Ripperのゆかりの場所, ユグノー, ユダヤ人, パキスタン人, といった移民達の町の跡, しかし今はartyな

場所の結構長いツアーである。Bloomsbury groupのことも言っていたが、Bloomsburyはこの辺なのだろうか。ちょっと違うようだが。

それからNazimと会場のバングラデシュ料理の店に行った。その通り沿いにずらっとバングラデシュ料理店が並んでいる。食べきれない量の料理が出た。Jeff, Harald Gal, 二木と主に話した。

12/9(火)

普通に大学に行ったが、この間の日曜に続いて好天気だったので、道の途中で数枚写真を撮った。朝、いつものようにJeff Magee, Anne O'Neill, Morris Sloman等とコーヒーを飲み、今日で最後だと言った。みんな時間が経つのは早いとか、楽しんだかとか言い、Morrisのようにあまり話ができなかった、と言うのもいるが、Jeff Kramerのような暖かさはあまり感じられない(Jeffは今日もICSEのPCでいない)。でも彼らは決して冷たいわけではなく、Jeff Mageeなど見かけはそっけないが、コーヒーやランチにはまめに誘ってくれたし、昨日もICSEのPC会場について聞いたら、親身になって調べてくれた。

昼、アパートに戻って、残った食料品で昼食を摂ろうかと思ったが、最後のコーヒーラウンジでのパツとしないサンドウィッチを皆と食べるのもいいかと思って、そうした。しかし、JeffもAnneもMorrisもいなくて、拍子抜けした。

部屋に戻ってRobとLucioの写真を撮り、Morris, Emile Lupu, 同グループのインド系の人などに別れを告げて、アパートに帰った。それから荷造りを開始。

夕方には荷造りの目鼻を付け、6時半に二木さんと約束した通り、Travel Inn, Court Hallに行った。一度のこの辺を歩いたことがあり、ホテルの入り口は知っていた。しかし、同じ建物の反対側には、Marriotの高級ホテルがあることを、初めて知った。二木さんと中小路さんを、9/30にも行ったSergio'sに案内した。前菜、メイン、パス



Rob & Lucio

夕,ピザをそれぞれ1つずつ取り3人で分けたが,十分すぎる量でだいぶ残した.

ミラノ篇

12/10 (水)

ミラノ行きの日である。改めて荷造り。昨日あらかた済ませているつもりが、いざとなると色々出てくる、食料品はだいぶ余った。といっても主に調味料の類である。それらは捨てるか残すかしてきた。結局孝子が持ってきてくれた2つ目のバッグが、結構一杯になった。これ以上はほとんど荷物を増やせそうにない。

少し早めだったが10時半にアパートを出た。チェックアウトはカギを返すだけで簡単だ。預かり金を取っているので、余分なコストはそれで清算すると、一昨日電話代を払ったとき、オフィスの人から聞いた。

やはり儉約してSouth Kensingtonまではタクシーで行き、Piccadilly Lineで空港に来た。チェックインをすませ、かなり時間があるので、今、pubにいる。ここは前にも来たと思う。Terminal 1であるが、多分ロンドン経由でウィーンに行ったときだったろうか。

今、14:40。まだヒースロー空港にいる。とんでもないことが起きた。

ここのシステムはロンドンの汽車の駅と同じで、待合室で待っているとやがてどのゲートかというアナウンスと表示がある。ところがぼくの便の表示が、ずっとplease waitでなかなか出ない。それで、中島震の論文原稿のチェックを始めた。しばらくそれをやって、ちょっとディスプレイを見たら、ゲートが15と出ている。それであわててゲート15を目指した。Gates 14-30という入口があるが、そこ

に行くとも14と16はあるが、15はない。慌てた。それで戻って確認すると、15は見間違いで、16であった。16に行くとも、長い行列ができている。ここでも搭乗券、パスポートのチェックと荷物検査をしつくやる。それを通過し、ゲート内の椅子でかなり待ち、14:10ぐらいから搭乗開始になった。行列の最後の方に並んで、ようやく自分の番になり、係のおじさんが半券を切り、パスポートを見て名前を確認して、Hello, Mr. Tamaiなどと言ひ、行こうとしたら、そこでこれは違う便だという。なんとこの便はミラノ行きではあるが、British Airwaysではないというのだ。なんで今頃になってそういうのか！どうすればいいんだ、と聞くと、戻ってBAのカウンターへ行けと言う。確認を怠ったこちらが悪いが、あんなにしつくチェックしたのに、乗る間際に間違っていると言うなんて。

また、リュックを検査台に通させられた上で、もとに戻ると、そこにBritish AirwaysのCustomer Serviceの長い行列ができている。そういえばチェックインのとき、かなりの便にcancelという表示が出ていた。ウロウロしてもっと早く聞けるところはないかと探したが、それには出発の検査のさらに外に出なくてはならないようなので、仕方なくその長い行列に並んだ。

ようやく自分の番になって聞くと、何とこの便はまだ出ていないという。しかしcancelにはなっていないから、待合室で待つてアナウンスを聞くようにということである。助かったことは助かった。

結局、BA566はキャンセルになった。一時、ゲート20からという案内があつて、そこに多くの人が集まったが、BAの関係者はおらず、ゲートのセキュリティの係がBAと連絡を取り合つて、何とキャンセルである。また待合室に戻るのに、セキュリティ・チェックを通らなければならない。その後、便の振り替えがあつて、ぼくはBA574の搭乗券をもらった。それからまた延々と待った。今、ようやく機

に乗ったところ。午後9時を回っている。もともとの出発予定が13:40だから7時間半遅れ。

原因は朝から出ていた霧らしい。確かにアパートを出るとき、嫌な予感がした。結局、ロンドンに2か月半いて、初めて霧らしい霧を見たのがロンドンを去る日になった。

22:00。まだ、飛行機はヒースロー空港で停まったまま。間違って積み込まれた荷物を探して降ろすためという説明で、小1時間待たされている。

12/11 (木)

結局、飛行機がミラノに着いたのは、午前1時である。当然、汽車はもう走っていない。1:30にバスが出るように表示されていたので、それを待ったが、来る気配がない。多くの人、タクシー、自家用車、さらには白タクで帰って行った。問題はまたブリュッセルのときと同じく、現金がないことである。タクシーを待ったらやがて来た。クレジットカードで払えるかと聞いたら、だめだという。ではATMのところに連れて行ってくれと言うと、最初の年寄りの運転手はだめだと言っていたが、次に来た若い運転手に声をかけ、その運転手が引き受けたので、そのタクシーに乗った。この運転手は結構英語をしゃべるし、てきぱきと目的地近くのマシンを探し、その一つ目の機械はうまくいかなかったが、すぐ次を探してくれて、そこで無事€250を下ろせた。タクシー代は95で、おつりをあげてちょうど100だった。

問題は門が閉まっていたことである。だからタクシーを待たせて、呼び鈴を何回か押したら、幸いなことに学生が出てきてくれた。そして門を開けてくれた。さらに受付の若いオジさんが起きてきてく

れたのか、とにかく鍵を渡してくれて、ようやく2時半ごろ部屋に入れた。

清潔な部屋で、寝るには十分である。トイレもまあスペースがあるが、バスタブはない。洋服ダンスは1つあるが、ハンガーがない。キッチンはもちろんない。冷蔵庫や湯沸かしポットすらない。考えてみればNGHは贅沢だった。荷物を片付けるためにがたがたやっていたら、隣の学生だかに怒鳴られた。壁も薄いらしい。

朝は9時過ぎに起きた。受付に行ったら、昨日の人とは違う紳士で、英語をしゃべる人がいた。昨日預けさせられたパスポートを返してもらい、フォームに住所などを記入した。

それからPolitecnico di Milanoを目指して出かけた。Carloは地下鉄のGreen LineでPiolaで降りるように、詳しくは大学のWebページを見るように、と説明してくれていた。その後者を怠って、住所の通りの名前Piazza Leonardo da Vinciだけ控えてきた。Carloの最近のメールに、自分の詳しい番地、たとえば建物の名前や部屋番号があるかと思ってみたが、なかった。

ここの最寄り駅FamagostaからPiolaまで13駅ある。しかし、Green Line 1本で簡単である。駅を降りてしばらくうろうろした。自分の持っている地図では、大学やP. da Vinciまでは載っていない。駅にある地図で何度か確かめて、方角の見当をつけ、近くで人に聞いてようやくわかった。

入ると立派な建物があるキャンパスである。ここでもCarloのいる建物が分からないので、人に聞き、親切に教えてもらって、通りを隔てた向こう側のビルであることが分かった。その中で、Ghezzi教授の部屋は1階だと聞き、階段を上がったところで、後から、「僕を探しているのか」とCarloに声をかけられた。

何とかいうアメリカ人の若い女性(Amy)と同室を割り当てられた。昼は大学の食堂でCarloやその同僚5人と食事した。

インターネットが繋がるまで、長い飛行機待ちの時間に読んで手を入れた中島震の論文へのコメントを、タイプ入力した。帰ろうと思ったら、インターネット接続の手続きができたと学生のDavideが知らせてくれたので、試してみたらすぐ繋がった。それで震宛にメールを出した。

帰ってCollegioのオフィスの女性やdirectorという男性と話をした。その時はあまり質問すべきことを思いつかなかったが、後から色々出てきた。明日確かめよう。朝食、夕食の10枚つづり券をくれた。夕食を食べてみたが、案外おいしい。ワインもビールもない健康な生活である。いまだに部屋代や食事代がいくらなのか、分からない。朝の紳士も、オフィスの女性も、自分は担当でないので分からないと言う。とにかく安いはずだ。

12/12 (金)

今日は上天気である。しかも暖かい。やはり珍しいことらしい。

地下鉄の1週間券を買うのにも、ちょっとした苦労があった。1週間のパスというのを欲しかったが、往復6回分の方をくれた。戻って確かめたら、英語をしゃべる店員がいて、1週間券というのは月曜から土曜までだという。どうも月曜に買わないと意味がないらしい。

大学ではCarloが誘ってくれて、Luciano Baresiと一緒に昼食の食券(20枚で€30と格安)を買い、コーヒーを飲んだ。午前中はたまったメールの整理をしていたら、またCarloが昼食に誘ってくれた。風邪を引いている米国人の女性のルームメイトは、今日は現れない。

学生のMirkoがネットワークプリンターの接続をやってくれて、ICと違ってここでは一発でうまくいった。

12/13 (土)

今日も天気がよい。遅く9時ごろ起きた。

甘いパン2つの朝食後（パンはずいぶん大きい），地下鉄を乗り継いでDuomoに行った。Duomoの外観にも内部にも圧倒された。人間はこんなものを作るのだ。ものすごい設計，技術，資金力，権力，そして当人たちの意識としての信仰。宗教の力は巨大だが，もちろん権力と金がなければできない。

それにしても，一つ一つの彫刻がよいできである。ゴシックの尖塔の上に，いずれも人体の彫像が乗っている。静力的に見ても大変な気がするが，それぞれが丹念に作られている。内部の広さと荘厳さについても，押し黙るほかはない。ちょうど陽が射して，ステンドグラスを通した光が太い石柱に反映する。とにかく中は広い。そして手の込んだ彫刻，燭台，合唱隊用の壇，床のタイル，など贅を尽くしている。ただ，廊に沿って大きな絵が多数吊り下げられているが，これが建築内部の調和を壊していると思う。ガイドブックによれば，この大聖堂は1300年代に着工されて，ナポレオンが完成させるまで500年かかったという。

それからCarloにも聞いていた広場の地下のScala座の切符売り場に寄ってみた。かなり長い行列ができていた。ロッキーらしい。やっと順番が来て，今の出し物をいつまでやっているかと聞くと，12/21（金）までだという。その日の券はあるかと聞くと，すべて最終日まで売り切れで，今日の当日券だけしかないという。次の出し物はTourandotで今日買えるのは初日の1/13の分だけ（1か月前発売日開始とのこと）で，それはまだ十分席があるという。とにかくプロ

グラムをよく調べることにして、窓口を去り、近くにおいてあるシーズンプログラム冊子を手に入れた。そこで急に、今日買えるならそれを買うのがいいと思いついた。それでまた行列に並び返した。幸い列はずっと短くなっていて、すぐに順番が来た。€120と€150の席があるという。€120のを買った。前から3列目の席である。



Milano Duomo

ここに寄る前だったような気がするが、旅行者用の案内所でオフクロと由美子が12/16から来るというHotel Ambasciatoriの場所を聞いた。また、滞在型のホテル/ア

パートのリストももらった。それでオペラの切符を買った後、Hotel Ambasciatoriを覗いてみた。宿泊予約を確かめたが、玉井では見つからず長谷川で見つかった。受付の男はかなり慇懃無礼なタイプである。

次に、Scala広場に出て、G. Verdi通り（さすがスカラ座の横を通る名前らしい）を歩くと、それがやがてBrera通りになる。そこでPinacoteca di Breraの場所を確かめ（もっともこの時点では、PinacotecaがArt Galleryの意だときちんとは把握していなかった）、近くのレストランに入った。Art Cafeという。ほかにも数軒あったが、ここは日本人が入りやすい店構えなのか、案内書に載っているのか、入ったら若い日本人女性2人連れがおり、しばらくしたら若い

日本人男性3人連れが入ってきた。2人連れが出て行ったら、今度は女性4人組が来た。

しかし、Duomo広場でも、日本人の団体観光客を多く見た。ブリュッセルでは中国人の観光客を多く見たが、どちらもたまたまかもしれない。

パスタを食べ赤ワインを飲んだ。2日間アルコールを飲まなかったの
で、久しぶりだ。パスタの量が少なかったし、夜のオペラが7時開演
で食べる暇がなさそうなので、またメニューをもらってパイ料理を
食べたが、パスタにしろこれにしろ、なかなか味がよかった。ワイ
ンをもう一杯飲んだ。それで€18。ロンドンよりずいぶん安い。

それからブレラ美術館に戻った。15-16世紀の宗教画を見た。Bellini
の聖母子像が2つあるが、最初のものがよい。マンテーニャの有名な
「死せるキリスト」は、近くで見ると遠近法がすごくおかしな絵
だ。顔が大きく脚が短く、足が小さい。ガイドブックの写真で見ると
おかしくない。本物も本来の置き方が高いところに掲げてあった
とすると、ちょうどよいのかもしれない。

ワインのせいかな、途中で部屋に置かれている椅子に腰かけたら、う
とうと寝てしまった。それでもだいぶ丁寧に見たつもりだったが、
案外量が少なく感じた。どうも半分ぐらい見残して帰ってきたよう
だ。

しかし、オペラのためには時間の余裕がそれほどない。ジーパンと
ジャンパー姿で出てきたので、いったんアパートに帰る。シャワー
を浴び着替えて、飛び出す。その際、オペラの券、Duomoから出る
シャトルバスのための切符、地下鉄の切符、ガイドブックを忘れない
ように注意した。

Duomoに着いて、もう一度Scala切符売り場に行って、シャトルの出る場所を確認した。最終があと5分、6:00に出るという。その場所がDuomoの前だというのだが、前と言っても広い。どこだかあまり親切に教えてくれない。とにかく大聖堂の裏側ではなく正面で、広場の中で、タクシー乗り場の傍ということを確認した。それで上に出て探したが、なかなか見つからない。5分しかないと言うのであせったが、ぎりぎりで見つけた。Duomoの正面というから近くを探していたが、何と同じ正面でも広場の反対側なのである。

Scala座は今改修中で、代わりに新しくできたTeatro degli Arcimboldiで公演が行われている。この方が広いので、むしろ切符が取りやすいとCarloが言っていた。それがバスで30分かかるほど遠くだった。しかも周りは殺風景なところで新開地らしい。建物はモダンである。

RossiniのオペラはNHKのビデオでいくつか見た。どれも割とよいと思った。しかし、このMoïse et Pharaonという出エジプトの話は見えない。正直言ってあまり面白くなかった。合唱で圧倒するというタイプのオペラである。もちろんロッシェニ風のテクニクを要するアリアもいろいろあり、Anai (Barbara Frittoli)やSinaide (Sonia Ganassi)などが聞かせる。スカラ座で最初に見るオペラがフランスものなのも妙だが、字幕が椅子にそれぞれ取り付けられたディスプレイに出て、その中で英語が選べるので、ストーリーは分かる。もっとも左右の隣は壊れていて表示が出ず、メンテナンスは悪そうだ。

話としては、ヘブライとエジプトと、それぞれ自分の神に固執するからいさかみや恋人の別離といった不幸が起こるという感想を抱かせる。終幕もなんだか急に終わる感じで、意図がよく分からない。

話が前後したが、開演前にプログラムを買おうとしたら、財布を忘れてきたことに気がついた。小銭入れだけ持ってきた。だからもし

あのバスを逃していたら、タクシーにも乗れず、大変だった。

帰りもバスに乗ったら、ぼくの他に2人しかいず、地下鉄のPrecottoの駅で降ろされたが（もともとそこへのシャトルなのを、こっちが勝手にDuomoまで行くと思い込んで乗ったらしい）、そこから地下鉄で問題なく帰れた。

12/14（日）

そうか、今日は14日か。忠臣蔵とは遠い世界にいる。

今日も素晴らしい天気で、散策には絶好である。いつものように地下鉄のGreen Lineの北行きに乗って、途中のSan Ambrogioで降りてその教会を見ることだけを決めて、後は足の赴くままに歩いた。S. Amrogio教会に着いたのが11時で、ちょうど日曜のミサが始まるころだった。いかにも古そうな教会で、内部は簡素である。モザイク画がある。参列者はかなり多い。ミサが始まると全員が立ち上がる。右翼の2階に合唱の人たちがいて聖歌を歌い、左翼の2階でオルガンが演奏される。素人らしいが音響もよく、美しい。もっともスピーカーを使っているようだ。

そこを出て、Via Lazzoneを東に向かって歩いた。途中で、V. Correntiにぶつかり、それを横切ってSan Vitoという通りを歩きだしたら、右手に古そうな教会が見えた。S. Lorenzo Maggioreだった（ということは、後でガイドブックで確かめた）。最初に出たのが裏側の方で、そこが公園になっている。そういえば、ミラノ



Basilica San Lorenzo

にはロンドンのような大規模の公園はなさそうだ。ここもほんのちょっとしたスペースだが、子供連れの家族の姿などが見られる。ぐるっと一周して正面に出た。そこには立派なローマ時代の列柱と壁がある。

教会の建物は長い歴史を経て、いろいろな様式が混合していて、ちょっと見ると不調和な印象がある。中に入ると、やはりミサの最中である。しかし、内部は荘厳な印象がある。ちょっと長居しづらい雰囲気なので、早々に退散した。



Colonne di San Lorenzo

そこから改めてV. Correntiへ出て、そのままTorino通りへ進んでいった。途中で中には入らなかったが、S. Giorgio al Palazzo教会やS. Sebastian教会の前を通った。Torino通りというのも、なかなかぎやかである。そのうちDuomoに着いた。どこを歩いても、最後はDuomoに流れつくような気がする。そこを目指して歩いているようなものではあるが。

そこで、何だかお城のような立派な塔が目についたので、その方向に歩いた。その通りがVia Danteだった。その建物は後から分かったが、Castello Sforzescoだった。そこで天井にフレスコ画がある一連の室に飾られている石像などの断片をゆっくり見た。一つの部屋では、ロンドンで聞いたMonteverdiのような宗教曲の演奏が予定されているらしく、練習をしていた。

一回りしてダンテ通りを戻って、通り沿いの来る途中で目をつけていたレストランに入った。名前はda Pierinoという。ここは昨日と変わって日本人はおろか旅行客風の間人を見ず、皆地元の人のように

見えた。たとえば子供を交えた大家族（20人近く）のテーブルがある。

ここでcarpaccioを頼んだ（ただし、恥ずかしながらcarpaccioの正確な料理内容を認識していなかった。ただ英語のメニューで注文していたので、想像はついた）。非常にうまかった。とくにかけるレモンが利くののだが、あれはレモンだろうか。ライムだろうか。



Castello Sforzesco

そこでガイドブックをつらつら眺めると、先ほど訪れたSforza城の美術館には、ミケランジェロのピエタを始めとする美術や古楽器の展示があったらしい。そこでまた城に戻る。楽器は見た。しかし、Pinacotecaの入り口が見つからない。他の観客の動きから見ても、どうもこれが開いていないようだ。英語を少ししゃべるらしい係員にMichelangeloと聞いたら、Sala quindiciと教えてくれた。これは何とか聞き取れた。しかし、そこにどう行けばよいかかわからなかった。

また、ぶらぶら歩いて、しかし今度はPinacoteca Ambrosianaという一応の目標は定めた。適当に歩いていたら、多分Via Meravigliに出た。そこをどんどん行ったものだから、G. Carducciに突き当たった。そこで改めて地図をよく見ると、逆に戻らなければならないことが分かった。戻る途中で、大きな石が置いてある建物があった。考古学の博物館らしい。後でガイドブックを見ると、これはCivico Museo Archeologicoである。石（線画が描かれていて、一番古いものは紀元前2500年ぐらいと推定されているらしい。しかし、外にむき

出しに置いてある。そのせいか、現代の落書きもある。)は見たが、中には入らなかった。

その隣に教会があって、外からちょっと見ると、内部に極彩色の壁画あるようだ。それで中に入ってみた。後でガイドブックで確かめたところによれば、これはSan Maurizioという1500年代の教会。中一面にフレスコ画が描かれている。絵に巧拙があり、多くは単独で見るとまるで風呂屋の絵だが、全体としては、その彩色が見事な装飾になっていて、バロックというか、独特の感銘を与える。日光の東照宮と相通じるところがある。この絵の出来としては、当然かもしれないが祭壇画の質が高い。デッサンがよいだけでなく、上等の絵の具を使っているのか、あるいはここはフレスコでなく油彩なのか、保存もよい。奥に対称的にもう一つの聖堂がつながっていて、そこでも同じようにフレスコ画が一面に描かれている。

それからVia Santa Mariaを経て、Pinacoteca Ambrosianaの裏手に出た。表に回って中に入った。ここはゆっくり時間をかけて見た。ティツィアーノが何点かある。とくに有名なマグダレアの MARIA がある。ダヴィンチの「楽師の肖像」のほか、例のノートの複写を見せている。ラファエロのアテネの学堂のデッサンがあって、デッサンといっても大きさは本物ぐらいある。若桑の本の最初に取り上げられていたカラヴァッジョの「果物籠」もある（これはいったん気がつかずに見過ごして、だいぶ経ってから戻って見た）。空いているし、係員は親切だし、とても良い美術館だと思った。

相当疲れた。近くのcafeでビールを飲んで休憩した。そこを出てもまだ6時で、夕食には早い。それでまたDuomoへ向けてぶらぶら歩いた。広場に小さなアイススケートリンクが特設されていた、一般の人々が滑っている。

田中千代子という人の、「イタリア、都市の歩き方」というのを
持ってきていて、今朝ちょっとミラノのところを読んだ。そこにパ
ラッツィオ・レアーレの美術展がよいと書いてある。その場所を確か
めた。夜の8時までやっているが、さすがに今日はこれ以上美術を見
る気はない。

広場に戻り、Vittorio Emanuele IIを東に歩いた。そのうち、Corso
Veneziaになった。そこで、Spiga通りが目についたので、そこに入っ
た。ここは超高級ブランド品の店舗ばかりが、延々と並んでいる。
方向としてDuomoに戻っていると思っていた。ようやくSpiga通りを抜
けたと思ったら、そこにアーチがある。後で調べたところ、ここは
Piazza Cavourという。思ったより遠くに来た。Manzoni通りをスカラ
方向に歩く。途中で適当なレストランがあれば入ろうと思った。し
かし、レストランはまったく見なかった。またDuomoまで来て、
Torino通りでレストランを探すことに決めた。割とすぐに目に入っ
たDai Dam Secondoという店に入った。牛肉のトマトソースかけを食
べたが、まあよかった。赤ワインをカラフェで頼んだので量が多
く、主菜を食べてしまったのでチーズを取り、満腹した。

12/15 (月)

朝、張り切ってFamagostaの駅に行ってみたら、ガランとしていて改
札所が閉鎖されている。地下鉄が動いていないらしい。代わりにバ
スがあるかとバス乗り場に行ってみたが、通常のバスらしいものは
なく、貸し切りバスのように見えるバスが停まっていて、客はほと
んど乗っていない。運転手に英語で話しかけたが通じない。驚いた
ことにParlez vous Francais?と聞いてきた。Un peuと答えて少しフラ
ンス語で会話したが、結局よく分からず。しかし、タクシーに乗っ
て出かけるほどの用事もないので、宿舎に戻った。そこで聞くと交
通ストライキだと言う。地下鉄だけでなく、バスなど公共機関がみ

な停まっているらしい。今日こそCollegioのオフィスの人と話をした
いと思ったが、彼女等もストで来ないらしい。3時から運転を再開す
るが、6時からまたストに入るという話だ。

ここの受付係は年配の人と中年のいずれも男性が黒の服にきちんと
ネクタイを締めて勤めている。着いた夜半にいたお兄さんはまた別
の人で、だから夜勤は別雇用らしい。2人のうち年配の方は英語を
ちゃんとしゃべってくれて、いつも呼びかけにProfessoreといってく
れて感じがよい。中年の方が今日の午前の当直で、この人は英語を
しゃべらないのかと思っていたが、そうでもなかった。本当に3時に
再開するかと聞いたら、いや3時といっても3時半ぐらいかもしれない
と言ってくれた。

それで3時20分ぐらいに駅に行ってみた。シャッターは開いていて、
改札を入れる。ホームにはかなり人がいるが、電車はしばらく来な
い。しかし、やがて来て、無事出発した。ところが土日に何度も
Duomoに出かけたので、その習慣でCadornaで降りてしまった。しか
し、大学にはGreen Line 1本で行けるので、乗り換えの必要がないの
である。仕方なく次を待ったが、それほどは待たずに次が来た。

大学の同室の彼女は金曜は風邪で休んでいたが、この日は来てい
た。歩いて来れるので、ストは影響ないと言う。Carloはいなかつ
た。彼も歩きか自転車だと言っていたから、ストのせいではないだ
ろう。

6時からまたストだというので、メールの整理をしてそそくさと帰る
ことにした。Piolaの駅近くのスーパー(supermerkato)でワインを買お
うとしたが、部屋にグラスもないし、スト再開までの時間もないの
で、途中でやめた。Famagostaに着いてから受付係に聞いていたスー
パー（といっても団地の中の寂しいところにある）に行ってみた

が、閉まっていた。で、角のGreen Hotelのバーでビールを1杯飲んで帰った。

12/16 (火)

Collegioのオフィスに、さまざまな懸案解決のため寄ろうと思った。受付係はオフィスは9時に開くと以前言っていた。しかし、9時半に行っても開いていない。で誰かに聞いたら10時だという。10時10分過ぎに行っても閉まっているので、頭に来たが諦めて、大学に行った。

宿舎がクリスマス休暇で12/19から閉鎖だという連絡をMarylin Tamblingからメールで受けているので、その問題を解決しないといけない。ところがこちらに来て1週間経つのに、まだTamblingと会うことができない。メールを出したら返事が来たが、どこで会えるかという再メールに対しては、返事すら来ない。とにかく土曜にDuomoのインフォメーションでもらったホテル・アパートのリストと、孝子からメールで来た伊勢丹の照内さんや花島さんの情報をもとに、候補をピックアップすることにした。しかし、番地だけでは場所が分からない。それでCarloの秘書に相談したら、通りの索引の付いた詳しい地図帳をくれた。今日もCarloは来ていないが、火曜は別のキャンパスで講義の日だったはずである。

それで大学の比較的近くで、値段も普通の4か所をピックアップした。それからあわてて4時に大学を飛び出した。オフクロたちの便が、17:40に到着予定である。それを迎えに行く。CadornaからMarpenza行き16:50発の汽車に乗った。これは快適である。40分ほどで空港に着いた。AlitaliaのAZ787という便だが、到着の掲示を見るとJALとの共同運航らしい。予定より若干早めに着陸表示が出た。

オフクロは車椅子に乗ってきたが、思ったより元気だった。タクシーに乗って、Hotel Ambasciatoriに向かう。市内に入って渋滞して、1時間ぐらいかかった。二人はそれほど食欲はないが、機内で十分に寝たし（ビジネスできているので完全に横になれるという）、付き合うというので、和食の「禅」という店に行った。由美子がここはどうかというので、そういうことでもない限り、一人では絶対に行かない店だと思い、行ってみることにした。近いがオフクロのためにタクシーで行った。

回転寿司だが、高級な店構えである。日本でも回転寿司に入ったことがない。寿司はワサビを入れていない、イタリア人、西洋人向けのものである。旨いとは言えない。久しぶりに熱燗を2合飲んだ。月桂冠だ。しかし、かなり酔った。帰り、タクシーを捕まえるのに苦労したが、何とか捕まえて（店で電話を頼んだが、電話がつかまらない）、ホテルまで送った。

12/17 (水)

日記用のノートが切れた。ロンドンでいいノートがあったが、まだ早いと買わなかった。こっちに来て詳しく日記を付けたら、思ったより早くノートが尽きた。学科の文房具のストックを見せてもらうことにしながら、時間が合わなかったりで2-3日経った。どうせ今書いているこのようなノートはないだろう。よいボールペンは今日、Carloの秘書に言って手に入れた。ICで最初にもらった4本は、2本は完全に使い切り、2本は途中で失くした。

今日は早めに大学に行った。メール関係をすませてから、この新しいノートと乾電池を買いにClipという近くの本屋に行った。そのあと、そのままアパート探しに出かけた。9月終わりのロンドンでのアパート探しを思い出す。

まずMonza通りのResidence Linea Unoを目指す．ここが大学から一番近いと思ったが，Monza通りに入るまで地下鉄の1駅分ある上に，そこから北に番地が上っていくが，目的地は139番地である．思いのほか歩いた．結局，さらに地下鉄3駅分（Loreto→Turro）歩いたら，かなり派手でみかけのきれいな新しいアパートが見つかった．中で見せてもらった部屋も広くて，なかなかよい．NGHより広い．2220 Euro/月で，いつでも入れるという．値段もNGHと同じくらいだろう．予算から見てどうかと言うから，ちょっと高いと言ったら，2100にまけるという．

次にStanzione Centraleの近くの Via M. Macchiにある2軒を訪れた．今度は地下鉄でCentraleまで行った．まず見つかったのがResidence de la Gareである．これは入口がロックされていて，それだけでも高級感がある．しかも，周囲が駅に近くて便利な上に，かなり落ち着いた住宅街である．Linea Unoは地下鉄駅の真ん前で便利だが，やはりちょっと場末といったロケーションである．

しかも，中に入って驚いた．部屋の造りといい調度といい，さっき見たのより上品で高級な感じがする．それで2000 Euroである．大いに気に入った．もちろん，キッチン，バスタブなど皆ある．洗濯機だけはないのは，1つ目と同様．

次のResidence della Cittaは少しモダンである．ここがよいのは，一人用の小さな部屋がある点で，それだと1550 Euroである．残念ながら今空はなく，1月になると空く予定があるという．ツインタイプで来週入れるのは2050である．部屋は見られなかったが，写真で見る限りde la Gareと同じようなものか．

一度，大学に戻った．相変わらずCarloはいないので，一人で昼食に出，ついでに4軒目としてVia G. ModenaのResidence Internationalを訪ねた．ここも近いと思ったが，結構歩いた．しかし，この辺りはか

なり古く立派な住居建物が並んでいる。その一角に目指すアパートがあった。対応したオバサンは少しなまりがあるが愛想よく英語をしゃべる。ここでは1300と1600の一人用の部屋を見たが、広さはちょうどよいとしても造り調度が格段に劣る。しかもバスタブがない。ツインの広さだとバスタブが付いているが、内部はあまりぱつとせず、しかも2200もする。

だいぶ経ってから、彼女がどこから来たのかと聞くので、日本だと言ったらとても驚いていた。日本人には見えないという。どういう意味だろうか。しかし、日本人にはバスタブが必要だねという。日本人の借家人も結構いるらしい。

また大学に戻ったら、Mauro Pezzeにばったり会った。彼の大学は同じミラノでもこの間行ったTeatro degli Arcimboldiのすぐ側にあるとは、前にも聞いていた。一度ぜひ来て、セミナーをやってくれと言われた。Carloが大学に来ていたので、後でMauroに会った話をしたら、CarloもMauroからぼくに会ったことをすでに聞いていた。それから、そそくさと宿に戻る。今日こそオフィスを捕まえなければならない。とくに閉鎖されるということの意味を確かめる必要がある。オフィスのおねえさんはその勤務時間から想像されるように、あまり礼儀正しいタイプでない。今日もこちらをかなり待たせて平気である。この間会った年配の女性は、もっと品がよかった。しかし、必要なことは一応、てきぱきと答えてくれる。それで12/19からと思っていた閉鎖期間が、12/23-1/2であることが分かる。地下の洗濯機のコインを買い、使い方を教えてもらった。これも係のオバサンを捕まえるのに、えらく待たされた。そして通訳に学生で歴史をやっているという男の子がいたが、彼も優秀そうでいろいろ話すが、少し生意気なところがある。

夜はホテルに行き、オフクロと由美子とリナシェンテ・デパート7階のBistro Duomoで食事した。ここではメニューを間違えたボーイと言い合う羽目になった。

12/18 (木)

今日は普通に大学に行き、久しぶりにメールの整理とそれに付随した仕事以外の仕事として、Epsilonの展開を進めた。Carloもいて、昼は一緒に食べた。

同室の女性はAmy Murphyといい、Rochester大学のassistant professorでmobile agentsが専門らしい。ちょっとキャンディス・バーゲンに似ている。共同研究者らしいPolitecnicoの男と仲が良いみたいで、その男がしょっちゅう部屋に来る。

ちょっと仕事が進んで気を良くしたが、3時過ぎには出て、Residence de la Gareに向かった。孝子にメールで相談して、了承してもらっている。

昨日と同じ女性がいて、来週の火曜からその部屋を借りたいというのと、Tamaiという姓だけ聞いて、それをカードの裏に書いて、それで結構ですという。拍子抜けがするほど簡単だ。後は火曜に来ればよいという。その時に、1か月分払えばよいらしい。こちらの身分を証明するものを求めないどころか、名すら聞かない。見た目信用できるということだろうか。逆



Residence de la Gare

にこちらの方が、これで貸借関係が成立したのかどうか不安になる。

12/19 (金)

青山さんが来た。TrentoでWeb Service関係の会があって参加したという。CarloにRE'04併設のService Oriented Computing関係のワークショップの相談に来た。

午後、途中からCarlo, Lucianoを交えて話し、夜はCarloがいくつか当たってくれたレストランの最初の3つか4つはクリスマス前の金曜の夜ということで一杯だったが、ようやくAlfredo Gran San Bernardoというところが取れて、そこに二人で行き、典型的なミラノリゾートとミラノカツを食べた。予約の時、時間を聞かれてぼくが8時と答えたら青山さんがそんなに遅くかと驚いた。しかし、8時に行ってみると他にはまだ誰も客がいない。この夜、最初の客だったようだ。9時過ぎにこちらが帰るころになって、ようやく数組の客が来た。

またおかしかったのは、リゾートが出てきて青山さんがスプーンはないのかと言う。あれだけ海外経験のある青山さんでも、ライス類をフォークで食べることに思いが至らないらしい。

12/20 (土)

朝起きたら天気がよいので、オフクロたちをコモ湖などの湖水地方に連れて行くのもよいかと思い、近くにレンタカーのHerzがあるのを目にしていたので、そこに行ってみた。車はあり2日間で€80というのでまあ安い。でそれを頼むことにしてクレジットカードと運転免許証を出したら、国際免許じゃないとだめだという。

宿舎に戻り、いつもと同じパンを食べ、オフクロたちのホテルに行こうと地下鉄の駅に行ったら、入口が封鎖されている。またストらしい。宿舎に戻ると例の年配の受付係が、これは予告なしのストでいつ終わるか分からないと言う。学生の女の子が話しかけてきて、週に2回もストがあるなんてひどいと言う。その娘の日本人の友達の女の子が、今ここを出たのでとても悲しいという話をした。その子はどこに行ったのかと聞くと、スペインに両親に会いに行き、その後いったん日本に戻った後、今度はアメリカに留学する予定だと言う。しかもここにいる間、毎週のように週末はロンドンに行っていたというので、そこに両親が住んでいるのかと聞くと、そうではないが、アパートかなんかがあって、そこに家族が集まるのだという。ずいぶん金持ちがいるものだ。

受付の人にタクシーを呼んでもらうことを頼んだが、ストのせいで混んでおり繋がらない。それで地下鉄駅のタクシー乗り場まで、歩いて行った。ほどなく空車が来た。しかし、乗ろうとするとNoと言って、運転手がそそくさと降りて行ってしまった。さらに待っていると、さっきのタクシーがバックして戻ってきて、今度は乗せてくれた。さっきはトイレに行ったらしい。

それでホテルに行くと、オフクロが一人でいて、由美子は買い物に出ていると言う。昨日、ダヴィンチの「最後の晚餐」を観に行つて、帰りにタクシーを捕まえられずに大変だったらしいが、それ以外にどこも見えていないらしいので、ミラノに来て、しかも目の前にDuomoがあるのにそれを見ずに帰ったら笑われると、連れ出した。何とか歩いて中に入った。ミサの最中である。堂内には参列者が一杯いる。説教、祈り、聖歌。やはりオフクロもさすがに感心したようだ。帰りがけに聖歌で、なぜかぼくは英語でCome all ye faithfulという歌詞で覚えているものが合唱された。オフクロもよく知っている曲で、感激していた。

ホテルに戻ると、由美子はすでに部屋に戻っていて、オフクロが一人で出かけたのかと心配したと言う。ナヴォリオ運河の近くにレストランがいくつかあって、Osteria del BinariというのをCarloは奨めていた。それは昼はやっていないが、姉妹店のTrattoria Auroraというのがあって、そこは昼もやっている。Carloがそこも悪くないと言っていたし、ガイドブックには「ブドウ棚の広がる中庭にテーブルが並べられ」と書いてあるので、昼行くのにはよいのではないかと思いい、ホテルのフロントで予約をしてもらった。そしてタクシーを頼んだが、やはりなかなかつかまらない。しかし、だいぶ経ってタクシーが来て、出かけた。

「ブドウ棚の広がる中庭」というイメージとはほど遠かったが、料理はよく、店員の愛想もよく、オフクロも由美子も満足したようだ。そこに3時過ぎまでいて、タクシーを呼んでもらって二人をホテルに戻し、ぼくはぶらぶら近くを歩いた。運河といっても汚い。水のある所はどぶで、ゴミだらけ。また水がなく干上がって無様な土をさらしているところも多い。

しかし、それに沿って雑貨を売るマーケットが出ていて面白い。Ticinese門まで歩き、そこからRomoloに向けて歩き出したつもりが、Corso S. Gottardoを南に歩いていた。宿舎の方向なのでそのまま歩き続けた。霧が出てきて段々濃くなり、気温もずいぶん下がってきた。道はそのままVia G. Medaになり、適当なところで右に行けばFamagostaに出るはずである。ちょっと行き過ぎたが、何とかいつもの道に出た。宿舎に帰りついたら、体は冷え切っていた。

12/21 (日)

なんと今日もストが続いている。小雨がショボショボ降っている。宿舎でタクシーを呼んでもらったが、まったくつかまらない。ホテ

ルに電話し、由美子に状況を話して、とにかく早めにチェックアウトしてタクシーを呼んでもらうように、またぼくを待たずにタクシーが来たら空港に行くように言った。Famagostaの駅のタクシースタンドまで行って見たが、昨日と違ってタクシーを待っている人が結構いる。しかもちゃんと列を作っていないくて、タクシーが来たら我先に乗ろうとする。ルールが分からないので待ちようもなく、空車もほとんど来ないので諦めてまた宿舎に戻る。受付係がもう一度タクシー会社を順に当たってみてくれたが全然だめなので断り、ちょっとしてからまたホテルに電話したら、タクシーが無事確保できたということで、チェックアウトして出るところだった。まあよかった。

天気も悪いし電車も動いていないので、今日は一日宿舎で過ごすことにした。コイン式の洗濯機で久しぶりに洗濯をした。

12/22 (月)

さすがに今日はストが終わって、順調に大学に行けた。彼らの学科の新しい研究室スペースのお披露目という簡単なパーティーがあり、Carloに誘われて出席した。歩いて10分ぐらいかかる離れたところにある。しかし、学科が大きいので参加者数が多い。Carloに紹介されて、50年前にイタリアに初めてコンピュータを導入したという風格のあるいかにも古風な、しかし茶目っ気のありそうな教授に会った。名前を聞き取れなかったが、後藤英一先生を知っているという。IFIPの活動で日本とも行き来があったらしい。

次にCarloがやはり紹介してくれたのはMario (真理雄) というPh.Dの学生で、お母さんが日本人、お父さんがイタリア人で、流暢に日本語をしゃべる好青年だった。日本に住んだことはないが、よく行

くらしい。Ph.DはAIのAgent Communication Language関連だそうで、あと2か月で学位が取れる予定だという。

宿舎に戻って、オフィスの中年女性に会い、宿泊料を払った。最後の最後でようやくいくらかを教えてくれた。不思議なシステムである。種々の要素を勘案し、裁量で決まるらしい。それが1日65ユーロというのは、やや意外だった。もっとずっと安いのではないかと想像していた。もちろん食事代込みで、世間相場と比べれば妥当なところだろうが、しかし今度のアパートの月2000は、日に換算すればちょうど65ぐらいになる。食事はないが、設備・調度などは比べものにならない。で逆にアパートの2000もそれほど高くないかと、一面妙に安心した。

最後になる夕食を食べたが、なかなかよい。しかし、滞在中、夕食を食べたのは半分くらいだろう。

12/23 (火)

一晩中、風が強く、建物のあちこちで音がしていたが、日が昇るとからりと晴れて、風も収まっている。いつもと同じに中にチョコレートやクリームの入っている甘い大きなクロワッサン（ブリオッシュ (brioche) というのかもしれないが、ちょっと違う気もする）を2つ食べた。12:30にタクシーを呼んでもらうことにし、荷造りをした。2週間前にやったばかりなので、手際よくいった。

道が渋滞して30分以上かかり、€25弱だった。いつもの女性がいる、パスポートのコピーを取り、そこに住所を書いてくれと言って、それだけで鍵を渡してくれた。ロンドンとはえらい違いだ。まったく契約の文書というものがない。金もまだ払っていない。

部屋は前で見ているが，NGHのStudioよりは広く，立派である．Via Mauro Macchiに面している．3階（日本の4階）の32という部屋である．食卓と椅子のついた小さなキッチンと居間と寝室と浴室がある．居間はかなり広くて，うちと同じデザインの，大きさはうちのよりかなり小さいペルシャ絨毯がある．



Janitress at Residence de la Gare

ちょっとだけものを出してから，大学に行った．最寄り駅はCentrale F.S.とっていたら，目の前に隣のCaiazzoの駅があった．ここから次がLoreto，次がPiolaと2駅である．

火曜なのでCarloは別のキャンパスに行っている．もう授業はないはずだが．秘書のAlessandraとヴェネツィアのホテルのことで相談した．というか昨日の相談の続きをした．POPL経由のホテルの予約が取れているのかどうかの確認をどうするかである．

メールを整理して，今度は歩いてアパートに戻ってみた．距離としては，NGHからICまでと同じくらいかもしれない（Nell Gwynnというのはチャールズ2世の時代の女優で，Charlesの愛人だったことを今読んでいる"London, the Novel"で知った）．途中（多分）Viale A. Doriaでスーパーを見つけ（これがアパートの彼女が教えてくれたものだろう），買い物をした．NGHに調味料その他みな置いてきたので，改めて買い揃えることになった．しかし，店に慣れないせいかな，たとえば卵が見つからなかったし，いろいろ買い忘れた．

今度のアパートには電気ポットがない．鍋で湯を沸かすのも面倒だ．それでまた彼女に（いつもいるのはこの若いちょっとシックな

女性でフランス人らしい) , 電気屋とより大きなスーパーの場所を教えてもらい, どちらもBuenos Airesという大通りにあると言われた。この辺りはLimaという駅もあったりして, 南米系の人割といえるのかもしれない。

Galimbertiという電気屋でポットを買った。日本なら保温機能付きの洒落たものが同じくらいの値段で買えるだろうが, 単に湯を沸かすだけときわめて単純な仕組のPhillipsの製品で€49もした。しかも大きいしこの機能では, 日本に持って帰る意味がない(一回り小さいのがあったが, それを買おうとするとなんやらイタリア語でペラペラ言われ, 英語のしゃべれる人を頼んだら, 要するにそれは展示している製品しかなく, しかもそれはすでに1年以上展示しているものだ, というのでやめた)。

Buenos Airesを行ったり来たりしたが, スーパーは見つからなかった。諦めてVia G. B. Pergolesiとの交差点でCaiazzoの方に戻ろうと信号待ちをしているときに, そのPergolesi通りの逆側にPAMというスーパーがあるのを見つけた。これは確かに大きい。ここでまたいろいろ買った。レジでクレジット・カードを出したら, だめだという。手書きでレジの上を書いてあるのが, 現金のみという意味だったらしい。そのオバサン店員の態度が不愉快である。現金を出したら, 釣りをよこさない。What about the changeと英語で言ったら, ようやく0.90をくれた。釣りはil restoらしい。

夜はこの時買った野菜のサラダとご飯を炊いてカレーにした。ワインも1軒目のスーパーで赤と白両方を買ったが, スーパーに置いてあるのは一番高いものでも8ユーロぐらいなので, それにした。日と月は休肝だったので, 久しぶりの感じ。

TVも久しぶり。CNNとEuroSportsというのだけ英語放送で, 後はすべてイタリア語でアメリカ映画も吹き替えられている。日本のよう

に2か国語放送で切り替えられるというのではないらしい．と思ったが，映画で英語の放送もあった．同じ放送がチャンネルを変えると英語になっている．あと1つだけ，ドイツ語放送がある．もちろん衛星放送を契約すれば，もっと多様なチャンネルがあるのだろうが．しかし，久しぶりにCNNを見た．ロンドンに2か月半いただけだが，なんかその時の生活を復元しようとしているようで，自分でもおかしい．

12/25 (木)

クリスマスの今日も快晴だ．しかしこれまでのところどこにも出ず，アパートの部屋からインターネットに接続できることを確かめ，あまり多くないメールを整理した．2-3日前に，

南川高志「海のかなたのローマ帝国」(岩波書店) 読了

たまたま出かける前に，駒場の生協で見つけ，「古代ローマとブリテン島」という副題から出かける先の英国とイタリアの両者がキーワードとして出てくるという単純な理由で購入し，この旅行に持ってきた．並行して読んでいるLondon, the novelとも関連し面白い読書だった．ただこの本自体はよく書けた本とはいえない．話に繰り返しが多し，一般読者向けの視点で書いているのか，専門家の立場で書いているのかはっきりしない．

英国で19世紀に，ローマへの関心が英国自身の帝国主義と関連づけられて高まった．したがってローマ属州としてのブリテン島の歴史についての見方も，これに従って，高度なローマ文明が遅れていたケルト民族に受け入れられ文明化が進んだ，という解釈が中心となった．それに対してこの10～20年間に否定的な学説が主流となったという．歴史観がその同時代の経済文化状況や思潮で左右されるのは当然だが，この書が紹介するように，現在は逆向きに振れて，

ローマの影響を最小化したものとし、またケルトというものも存在しないとするなどの「今日的」な解釈も同様に時代の風潮に乗ったものだろう。本書でその立場から展開される議論も、同じ資料に対して憶測を交えて違う結論を出すものであり、とくに説得的という感じがしない。所詮、文献的にも考古学的にも資料が限定されており、しかもたまたま残り、たまたま発見された資料に基づいて議論するのだから、相当の自由度がある。

フェルメールの研究家の本を読んだときも同じような感想を抱いたが、すでに多くの研究者が色々な本、論文を書いているこういう分野で、新しい仕事をするのは大変なことだと感じる。あまりうらやましいと思う研究ではないが、しかし面白さは想像される。

昼、ぶらぶらとCentrale駅まで行ってFirenze行きの切符を買った。EuroStarで2時間半もかかるとは思わなかった。しかも、12/27の列車は皆満席で、やむなく11:00発、喫煙車の1等というのを買った。で安全のために帰りも買ったが、こちらはかなり空きがあるらしく、禁煙車でしかしついでに帰りも1等にした。

12/26 (金)

今日も快晴。クリスマスは雪という予報だとCarloが言っていたが、外れたようだ。

Collegioではベッドに毛布がなく、朝方寒くて目が覚めることがあったが、ここの温度は快適で、毛布もありよく寝られる。ゆっくりと起きて食事をとり、イタリア語の勉強などをちょっとしていたら昼になった。街の様子を見がてら大学まで歩いてみることにした。この前と違ったルートで、より直線的な方向を地図で確かめて歩いた。

街はまるでゴーストタウンで店はほとんど閉まっており、人も歩いていない。車も極端に少ない。今日あたりはもうスーパーも開いているのではないか思っていたが、これでは食料も不足気味である。

大学もさすがに誰もいない。それに部屋の暖房も効かないので、2時前に引き上げた。同じ道に戻る途中で、ちょっと違う道には行ったら、そこに開いている店があった。外に酒の白雪が展示してあり、中の店員や2-3の客は中国人風である。置いてあるものも、中国的な食品が目につく。しかしそれほど大したものも置いてあるわけではない。米はいろいろな種類がある。ラーメンの「出前一丁」の中国向け製品とカップラーメンとビールとイワシの缶詰を買った。アパートに戻って出前一丁を食べてみた。

Firenze

12/27 (土)

結果的に11:00発の汽車になったので、朝余裕があったのは悪いことでなかった。台所などきれいに片づけた。

あいにくの曇り空である。10:30にアパートを出る。駅に人が多い。皆、今日から活動開始ということであろうか。週末だしまだ休みだから、どこかへ出かけようということであろうか。

発着掲示板を見るとフィレンツェ行きがなく、11:00発のローマ行きがある。案内で聞いて、これが自分の乗る汽車であることが分かる。ローマまでの間に、ボローニャ、フィレンツェ (Santa Maria Novella) の2駅に停車する。

出発前後、前の若い女性が携帯電話で長電話をしていて、うるさく思った。日本のように電車の中では携帯を遠慮するというマナーは

ないらしい。そのうち車内アナウンスで、携帯の呼び出し音を小さくするとか、話し声を控えめにという要請があった（英語のアナウンスもあったので分かった）。隣のオジサンにも2度ほど電話がかかってきた。

昔、広瀬健さんと一緒にフィレンツェからローマに汽車で行ったことを思い出す。あのとき、フィレンツェには一晩泊っただけで、翌日午前中に出たので、ウフィッツィ美術館にすら行かなかった。ローマ行きの列車では、食堂車でしばらく待ったが全然テーブルが空かず、実は入れ替えという発想がないことを発見したこと、ぼくの席の前に素晴らしい美人がいて、ローマの大学の生物学専攻の学生だったこと、ローマに着いたら周りの皆が騒いでいて、何かと思ったら時間通りに着いたので驚いていたのであったこと、などが思い出される。

南に行くにつれ、空が晴れてきた。

高階秀爾「フィレンツェ」(中公新書) 読了

意図的とはいえ、フィレンツェ行きの汽車の中で読み終わるのには絶好の本である。1966年に初版が出た古い本であるが、15世紀のことを書いているので、別に問題はない。メディチ家を中心とする政治、経済的背景と、ブルネレスキ、ドナテルロ、マサッチオを中心とする天才たちによる15世紀前半の新しい芸術表現、世紀後半にそれが装飾化し、また他の都市に芸術家が散り、経済的にも衰退していく様が描かれる。たった1世紀の栄光だったが、今フィレンツェはその15世紀の姿がそのまま保存されているという。またこのフィレンツェが、レオナルド、ラファエロ、ミケランジェロの古典主義的盛期ルネッサンスを準備したわけである。

インターネットで予約したKraftというホテルは、駅からそう遠くないはずだった。なぜか地図が印刷できないので、ずさんな手描きで写してきたが、その見当で歩き始めた。大体この辺かと思った辺りで地図に写してきたどの通りも見当たらない。そのうちに川が近くに見え、川に並行するBongo Ognissantiという通りが見つかり、そこから川の下流の方向にしばらく歩いて見つけた。中級のホテルだが、悪くはない。

孝子が「北イタリア おいしいものを食べる、買う」という本を送ってくれた。これがなかなか面白い。北イタリアの州ごとにその特有の食べ物や料理を写真と文章で紹介している。しかしこういう本が日本で出版されるというのは、イタリア熱が日本で高いということで、ちょっと不思議な気がする。

この本のトスカーナ州のところで、spagetti alla carettieraというのが紹介されていて、そのおいしい店というのがFirenzeのTrattoria Armandoとなっている。その番地を調べてみたら、ホテルのすぐ側だ。でまず、腹ごしらえとそこに赴いた。ちょっと洒落ていて、高級ではないが感じがよい。主人と思しき人も愛想がよい。しかし、観光客にはよく知られた店らしく、近くの2つのテーブルとも英語をしゃべっている。1つは明らかにアメリカ人一家で、両親と美季子ぐらいの女の子が二人。もう一組は中年の夫婦で、こちらはイギリス人かもしれない。離れたところには日本人の新婚か、若いカップルがいる。

件の本にこの時期fungi porciniというキノコが旬だとあったので、その前菜と例のspagetti alla carettieraを頼んだ。porciniの料理は、薄切りのじゃがいもと溶けるチーズとともにオーブンで熱したもので、なぜかキノコに非常に塩が効いている。別にキノコとして塩漬けのものを使っているわけではないだろうが。

スパゲッティはソレントで感じたと同じように、固ゆである。変哲のないトマトソース系のスパゲッティのように思えるが、煮込んだトマトソースでなく、トマトとニンニクをさっと炒めたソースに、アルデンテのスパゲッティをからめるだけというのが特徴なのだそう。その微妙な差が分かったとは言い難いが、昼食としては満足した。

で寄り道はしたが、とにかくUffizi美術館を目指した。適当に歩いていたので、途中同じところをぐるぐる回ったりしたが、やがて行き着いた。長い行列ができています。仕方がないからその後ろに並ぶ。

その前に、ガイドブックを何も持っていないので、Borgo Ognissantiの本屋で英語版のガイドブックを買っていた。長い行列の中で、その本と高階の本からメモ書きした教会などを照らし合わせて、暇をつぶした。30分ぐらい待ったら中に入れた。

入ると正面にGiottoの聖母子像がある。その横に同じ大きさで同じような構図の聖母子像があり、これもよい。脇の解説では、ヴァザーリの記述のせいでこの作者はずっとCimabueと言われていたが、今はそれは間違いで、Duccioという画家だということが分かっているという。買ったガイドブックではまだ、Cimabueと書いてある。

Paolo Uccelloの有名な聖ロマーノの戦いは、照明をかなり落とした部屋に置いてある。写真で見た時と同じように、馬が玩具のように描かれているのが面白い。全体に劇画というか童話の挿絵というか、そういう感じである。その近くにMassacioの絵が2枚ある。その1つはSt. Anne enthroned with the Madonna and Childである。

こんな調子で書いていたらきりが無い。ボッティチェッリの「春」や「ヴィーナスの誕生」など、写真でいやというほど見ているの

で、初めて見る気がしない。しかし、ボッティチェッリの部屋には、他にも多くの作品が展示されているのを知った。なお、Calumny of Apelles（誹謗）は、修理中なのか貸出中なのか、見つからなかった。

それほど有名でないところでは、Beato Angelico（これはフラアンジェリコのことらしい）、Ghilandaio, Pietro Perugino, Andrea del Sartoなどがよいと思った。とくにSarto (1486-1530) は、ずいぶん現代的である。

イタリアの画家だけでなく、Cranach, Durer, Memling などもある。デューラーのアダムとイブはとくに美男・美女で身体も美しく、顔はちょっと漫画的でブロマイドを思わせる。時間切れで、カラバッジョ、レンブラント、ルーベンス、カナレットなどは見なかった。やはり一番美しいと思ったのは、ダヴィンチの受胎告知である。

夜はホテルで聞いて、昼のTrattoria Armandoの向かいのOsteria il Mostrinoという店に行った。メニューは同じようだが、Armandoより一段安い。客はイタリア人ばかりだった。しかし後から、フランス人か、とにかくイタリア以外のヨーロッパ人のカップルとか、日本人女性と黒人だか中東系だかの男性のカップルなども入ってきた。後者は日本語で会話しているので驚いた。日本人の男一人が奥の席から出てきて帰った。この人の時もぼくが帰る時も、店員は挨拶せず、イタリア人が帰る時は非常に愛想よく挨拶していたので不愉快になった。

さて、食べたものは、antipastiとしてcarciofi（アーティチョークのこと）のサラダ、次にribollitaというパン入りスープ、lombatinaというステーキを食べた。件の本の影響である。食べ過ぎた。3品とも味はよかった。とくにribollitaは素朴だが野菜の旨みとパンによるドロツとした感触がよい。ステーキのジューシイな焼き方にも感心する。

しかし、量が多すぎたせい、周りの雰囲気、ワインがあまりにまずかったせい、全体の印象は弱い。

12/28 (日)

あいにく曇りがちで、時々雨も降る。しかし、それほど寒くない。

まず、Santa Maria Novella教会へ行った。しかしミサの最中で、観光客は入れない。午後1時から観光客に開放するとのことだった。

次にSan Lorenzo教会に行ってみた。手前にCappelle Mediceeがあるが、そこは閉まっている。この建物の外見は古いままで、古色蒼然という感じである。Lorenzo教会には入れたが、やはりミサの最中で、観光客は入り口付近より奥には行かれない。どうも今回の旅行がたまたま週末になったのは、まずかったかという気がしてきた。

次にDuomoに行った。手前に洗礼堂 (Battistero) がある。ここは入れるので、とにかく入れるところにまず入ろうと中に入った。法隆寺の夢殿を思わせる八角形の建物である。天井ドーム全面に、極彩色の絵が描かれている。どちらかと言えば稚拙である。床のタイルのモザイク模様が美しい。

ここの北扉のコンテストでGhibertiがBrunelleschiに勝ったことが、高階の本で象徴的な出来事として取り上げられている。しかし、どちらが北扉でどちらが南扉（より古いもの）か、うかつにも確認しなかった。より派手なのはカテドラル側に面した扉である。



Firenze Baptistery

これもGhibertiである（これが東らしいので，北も分かる）。

ここでもカテドラルには入れないようである。しかしGiottoによる鍾塔は入れる。階段を延々と登る。最上部を含め途中5(4?)箇所展望台がある。まだ上がある，まだ上がある，という感じである。この手のものでいつも感心するのは，起重機もない時代，人手で一つ一つの石を積み重ねて，よくこういうものを造ったということである。構造的に安定させる技術が，ニュートン力学以前に十分発達していたわけである。曇り空ながら眺めはよい。

次にMuseo del Duomoに入った。そこで改めて，Donatelloの偉大さを感じた。たとえばHabakkukuとかMagdaleneとか，技術だけでなく高い精神性を感じさせ，それはたとえば百済観音のような仏像彫刻と通じるものがある。あと，多分Nanni di Bancoというそれより前の時代の人の2つの女神像（マリアだったろうか）も，気品があって美しい。これも菩薩や観音を連想する。また，ミケランジェロの未完成のピエタがあるが，なぜこれを未完成のまま放置したのか，不思議である。キリストの身体の半分はほぼ完成しているのに。

次にPiazza del Signoriaに出て，Palazzo Vecchioの入場に並んだ。しかし，列がちっとも進まないの
で考え直し，こういうところは月曜でも開いているだろうから，まず教会を回ろうと思って，Ponte Vecchioを渡り，下流の方に歩いて，S. Maria del Carmine教会へ行った。そこにMasaccioの壁画がある。着いたのが1時頃だった



Donatello Habakkuku (Zuccone)

が、受付で次に入れるのは13:30
たという。しかし、それまで代わ
りにビデオを見て待つことができ
ると言うので、それでよいと言っ
たら、タイムスタンプを押した紙
をくれた。切符はまた中の受付で
買うのである。回廊の反対側に切
符売場があり、そこで切符を買っ
た。そしてそのまま教会に入れて
しまった。ビデオをどこで上映し
ているのかすら分からなかった。



Donatello Magdalene

祭壇のところだけ照明があり、その三方の壁に彩色のフレスコ画がある。有名なアダムとイブと貢の銭(Payment of the tribute)は確実にMasaccioの筆だという。しかし、他の絵の出来もなにかよい。完成させたのはFilippino Lippiという。Filippinoの自画像らしいのが分かった。正直いって、Masaccioはこれまでアダムとイブぐらいしか知らなかった。しかし、残っている作品はここと、昨日見たウフィツィにあるのと、S. Maria NovellaにあるTrinityぐらいらしい。その力量はよく分かる。後の人に与えた影響が大きいらしい。

夕べたくさん食べたし、今朝もあまりおいしくないパン2つとハム・チーズなどの朝食をしっかり摂ったので、昼は食べなくてもよいか、ごく軽くすまそう思っていた。しかし、S. Trinita橋の近くまで来たらDanteというレストランがあって、ちょっとよさそうなので入ってみた。案内された席の隣のテーブルに日本人5人の客がいた。別に日本人だから近くにしたらわけでは多分なく、二人用のテーブルが他になかったと思う。この5人がなかなかぎやかだった。ぼくぐらいの年配の夫婦がいて、あと3人は男である。夫婦はイタリアに何度か来ているらしいが、イタリア語が自由というわけではない。男

の一人は同年齢で、コーヒーを頼んだら量が少ないので驚いたとか、ティラミスって何だとか言っているから、イタリアは初めてらしい。あとの二人は若くて、一人は料理人か料理に関係した人らしい。こう書くとずいぶん観察したようだが、にぎやかな会話を聞くともなく聞いて得た情報である。ぼくは例のfunghi portini入りのtagliatelleとビールを頼んで、適量でよい食事ができた。

元気を回復し、朝行ったS. Maria Novellaにもう一度行き、今度は入れた。ここにMasaccioがあるが、それほどすごいわけではない。しかしキリストの後ろにいる神の顔にさすがに迫力がある。祭壇の後ろに非常に美しい壁画が三面ある。とくに女性達がすべてとても美しく描かれている。これはGhirlandaioのグループの作品という。Uccelloの洪水などがある方に行きたかったが、そっちは美術館になっていて、今は閉まっている。Domani（明日）と言っていた。

次にまた同じルートでLorenzo教会に行ったが、閉まっている。で、Duomoに行くと今度は開いていた。中は広い。思いの外、簡素である。これがBurnerreskiの傑作だという。

またまたSignoria広場に出て、もう一度Palazzo Vecchioに並ぶ。さっきより列が長くなっている。しかも、さっきはほとんど待たなかったのが分からなかったが、この列がちっとも進まない。昨日のUffiziも長い行列だったが、バッチ式で進んで案外待たなかった。それに比べ、この列は本当に動かない。

それでも牛の歩みで少し入口に近づいて、遅い理由が分かった。セキュリティ・チェックである。それも空港のチェックよりはるかに感度のよい機械でチェックしているので、ボタンとかチャックとかちょっとした金目のものでほとんど全員が引っかかる。さらに手荷物はX線で検査するわけではなく、一つ一つ開けさせて調べる。こ

これらの処理をたった一人の女性検査官がやるのである。入口の金属探査に引っかかると、スティック状の検査器で身体検査する。

これは入場者数を制限するために、わざと非効率にしているのかと疑われる。1時間以上待って、ようやく入れた。そのあとで切符を買い、手荷物を預け、ようやく展示対象の館内に入れる。

中にはたくさんの部屋があり、いずれも金ぴかか彩色画で飾られている。権勢と金力を得ると、どこでもこういうものを作るのである。あまり感心するようなものはない。

1階のSalone dei Cinquecentoには彫刻作品が並べられている。横方向には、ほとんど男同士の戦いか女を暴行する場面か、いずれにせよ裸での暴力シーンがほとんどである。ただ、一番有名なのは、ミケランジェロのVictoryと後で名前が付いた男一人だけの彫像である。筋骨逞しくはあるが、ポーズといい全体の印象といい、ミケランジェロにしては優美というかおとなしい彫像である。

縦方向の一面には、若い男のセクシーな立像が並べられている（4体だったか）。暴力ものも色気ものも、男性器はすべてきちんと作られている。男同士の争いの一つは、下になった男が相手の男性器を手でつかんでいる。これらを見るとホモセクシュアルを連想せざるをえない。

天井は金ぴかのますに区切られている。規模はだいぶ違うが、日光東照宮の奥の間を連想する。時代もそれほど違わない。

たくさんの部屋もやはりヌードの絵ばかりである。こちらは女性の裸体が多い。聖書を題材にしているものもあるのだろうが、宗教画的なものはほとんどない。とくにSala dei Elementiで印象に残ったのは、男女の裸体、とくに女性に恥毛らしきものを描いている点であ

る。この時代の他の絵で、あまりそういうのは見ない。やはり妙に猥褻な感じがする。どうもここの住人（メディチが衰退してからの16世紀のCosimo Iなどらしいが）は、今日で言えばアダルトビデオのようなものを好んでいたのではないか。この部屋の絵はVasariのグループらしい。絵としては他の部屋よりはできがよい。

疲れてホテルに帰り、風呂に入って休んだ。夕食は、やはり昨日ホテルが紹介してくれたものの一つ、Il Gobbiという店を目指した。ところが、これがなかなか見つからない。行きつ戻りつし、意地で探してようやく分かった。ホテルの彼女が地図上に打ったくれた点の位置は非常に正確だったが、地図上の通りの名前が違っている上、その狭い通りを大通りの方から覗くと、暗くてとても店があるようには見えない。ようやく分かった時には、その店の前には人が何人かいて、中は満員で、とても人気のある店らしいことが分かった。だから彼女は大変よい店を紹介してくれたのだ。

仕方なく諦め、結局昨日昼を食べたArmandoにまた行った。前菜に生ハムを取ったら、それに付いてきたのが焼いたパンの上にペーストが乗っている。例の本でCrostini di polloと紹介されているもので（多分）、これが抜群に美味しかった。主菜としてtrippa alla Fiorentinaという牛の胃を煮込んだ料理（これもその存在を同じ本で知った）を頼んでみたら、これもとてもよかった。さらにグラスで飲んだワインが、夕べとは格段の違いで、2杯も飲んでしまった。ついでにチョコレート・ケーキまで取って、ぜいたくをしたが満足した。やはり日本人が2組来ていた。

12/29（月）

孝子の50歳の誕生日。

朝から雨模様である。朝食で改めて、このホテルには日本人客が多いことを知った。食堂で5-6組を見た。近くにいる新婚らしい二人も、ほとんど話をしない。新婚でこうでは行先が危ぶまれる気もするが、当人たちは別に気まずくてそうしているわけではないようにも見える。昔、Bjornerが指摘していたが、中国人は対照的に食事の際によくしゃべる。

チェックアウトして荷物を預け、またまたS. Maria Novellaに行った。幸い美術館が開いていた。有名なUccelloのノアの洪水の壁画は、確かにびっくりするような表現力だが、惜しいことに相当ひどく傷んでいる。今のところ、そのまま放置されているようだ。Spanish Chapelというのがあって、そこに全面フレスコ画がある。こちらはよく保存されている。（Uccelloの壁画は外の回廊の壁なので、傷みが激しいらしい。）左の壁の絵は稚拙だが、右の壁の方は少しよい。なかなか華やかだ。Andrea der Firenzeという画家らしい。

3度同じルートでSan Lorenzo教会に行った。手前のCappella Mediciは今日も閉まっているが、Lorenzoの方は今日は観光客用の入口が開いている。ここの呼びものはDonatelloによる2つの鑄物の説教台（凝った彫金が四面にある）、Filippo Lippiの受胎告知の絵、DonatelloのMartelli Sarcophagus（石棺）、Rosso FiorentinoのBetrothal of the Virgin（聖母の結婚）の絵などである。あとBrunelleschiのOld Sacristy（古聖器室）もある。



Uccello ノアの洪水

次にS. Marco教会に行った。ここの呼びものはFra Angelicoである。有名な受胎告知は、よく見るとずいぶんアンバランスな絵である。天使は素晴らしくリアルに描かれているのに、マリアはまるで雑で、胸などほとんど輪郭線しかなく、全体に鳥のような印象がある（両手を前で合わせるしぐさが羽ばたきを連想させる）。建物は遠近法（透視と陰影）で立体的に描かれているのに、庭の植物は平面的、装飾的である。

別の部屋に、アンジェリコの多くの絵、ほとんどが聖母子像が集められている。いずれもマリアや幼児イエスの顔が美しい。あと、なかなかよいと思ったのは、Soglianiという画家の作品である。とくにEpisodes from the life of St. Dominicがよい。あと、Fra Baltolomeoのサヴォナローラの横顔のコピーや、それを基にしたのであろうサヴォナローラの絵がいくつかある。

次に、国立美術館(National Museum)に行った。1時10分に着いたら1時40分に閉館で、後30分しかないがいかと言われ、それでもとにかく中に入った。Donatelloのダビデ像（色気がある）、St. George像、Celliniのいくつかの作品などを急いで見た。またLuca della Robbiaのテラコッタ作品がたくさんあった。Giottoのダビデ像とか、Donatelloと対比されるVerrocchioのダビデ像などは見つからなかった。

ここまで、大変効率よく見物した。しかし、ガイドブックに引きずられて、有名なものは見なくちゃ、というミーハー的な行動ともいえる。

さて昼飯にしようと思って、昨日一杯だったGobbiに行くことにした。ずいぶん歩く。ようやく着いたら、やっていない。昼はやらないのか。月曜だからか。当てが外れて中心街の方に戻りながら物色したが、なかなかよい店がない。疲れているのに優柔不断なところ

もあってウロウロし、昨晚Gobbiを探しているときに見て、代わりによっぽど入ろうかと思った店に行ってみた。観光の中心からちょっと外れたところにあるのでいいのではないかと思った。

行ってみるとPizzeriaという看板だが店の感じはよく、中もほぼ満席に客が入っている。幸い、2人用のテーブルが1つ空いていて、そこに座れた。店の名はMasoという。夕べArmandoで最初出てきたイタリア語のメニューはやはり読めず、英語のメニューをもらって対照したのが少し記憶にある。で、filetto di maialeというのが豚のヒレだと分かったので、それを注文した。グラスの赤ワインを頼んだら、なみなみと注いでくれた。昨晚のものほどよくはないが、その前の晩のものよりはるかによい。出てきた豚肉はよく焼いたものに赤ワインとブドウだろうか酸味のあるソースがかけてあって、絶品である。取り合わせのインゲンもうまい。そして安い。迷った末に報われた感じがした。

そこで元気が出て、最後にPalazzo Pittiに行くことにした。ここも見ものが多そうである。Ponte S. Trinitaを渡ってたどり着くと、閉まっている。自分では動かなかったが、離れたところから人の流れを見ていると、皆入口を探しあぐね、やがて諦めていることが分かる。仕方がないので、Ponte Vecchioを渡って、一昨日見残したUffiziにもう一度入ることにした。この頃は雨が小止みなく降り続けている。昼通った時は行列を見なかったPalazzo Vecchioに広場にまで行列ができています。昨日のペースと同じだとするとこれを待つ人は大変だ。Uffiziは閉まっている。だからよけい開いているところに人が並ぶのだろう。

やむなくホテルに戻ることにした。荷物を預けてある。途中Palazzo Strozziの中を通ってみた。四角い中庭を回廊が囲んでいる。ここも美術館になっていて、Peruの民俗展のようなものをやっているらし

いが、FirenzeでPeru文化展を見る人がいるだろうか。しかし、考えてみればFirenzeにも住民がいるのである。しかし、もし自分が見る気になっても、この時間は多分開いていなかったろう。

皆閉まってしまうのは、月曜だからか、クリスマス休みだからか。その先に地図の上ではPalazzo Rucellaiがあるはずだが、どれか分からなかった。

ホテルに帰りついたら4時を回っており、17:14発の汽車に乗るのに、まあいい時間である。駅でコーヒーを飲むのもまだ慣れない。まずレジで金を払って領収書をカウンターで渡してサービスを受ける。で慣れない人間に対し店員は不親切である。コーヒーを手に入れたものの、基本的に立ち飲みであることをうっかりした。もともとコーヒーが飲みたかったというより座りたかったのだが、近くの席は隣のやはりセルフサービスのファーストフード用で、またその先のレストラン用であるらしかった。しかし、構内をぶらぶら歩いたら待合室があるのを見つけ、そこで座れた。

汽車は時間通り出たが、途中で多分15分ぐらい遅れて、8時にミラノに着いた。同じボックスに子供一人のイタリア人家族がいて、ポロニャで降りたが、その3-4歳ぐらいの女の子がとても可愛かった。

ミラノに着いても雨が降っている。しかし、駅から歩いて5分なので楽だ。帰り着いてほっとする。ここは居心地がよいせいか、早くも「わが家」という感じがする。リュックの中を整理して、須賀敦子の「トリエステの坂道」を失くしてきたことに気づいた。今回は、ホテルを引き払うときは念入りにチェックした。昼のレストランMasoで料理を待つ間、この本を読み、料理が来たのでテーブルに忘れてきたらしい。早く気がつけばホテルから駅への途中なので取りに行くことが容易にできたはずだ。これで失くした本は3冊目だ。須

賀のこの本は表題の中にトリエステが入っているが、基本的にはミラノの話なので残念だ。

12/31 (水)

帰ってきた日から、昨日今日と雨だ。クリスマスを過ぎると年末でも店は多く開いていて、昨日も今日もスーパーなどで買い物をした。今日はさらにコイン・ランドリーでしばらくぶりの洗濯をした。

昨日ようやくアパート代1か月分を支払ったが（入居前に10週間分全額支払ったNGHとえらい違いだ），最初彼女が€2100と書いたので、€2000と言ったと思うがというと、あ、そう言いました？と言って、あっさりと1の上に0を書いた。この辺もいい加減だ。彼女はフランス人かと思っていたが、アパート名がフランス語になっているのはオーナーの趣味で、彼女自身はイタリア人だそうだ。

夜、イタリア語放送のTVを少し見てみたが、大晦日と言ってもあまり特別番組らしいものをやっていない。12時が近づくと歌や踊りの番組でカウントダウンを始めているが、歌番組にしても素人っぽい。ステージも演出も単純な番組で、12時になったら大騒ぎになるが、それだけである。

むしろ、外で12時少し前から花火が上がり始め、12時になると非常に派手な音が連続したが、窓を開けても、ここからはよく見えない。しかし、雨は上がって、星が出ていた。

2004年

1/1 (木)

考えてみると、子供時代のタイを除いて、クリスマスや年末年始を外国で過ごすのは初めてである。外国どころか、国内でも家にいなかったのは、すいぶん前、まだ美季子が生まれない頃に、二人で箱根の富士屋ホテルに行ったのしか記憶にない。

今日は珍しく天気がよい。元日晴れなどという言葉がこちらにあるとは思えないが。天気がよいので散歩に出た。Via L. Settembriniをまっすぐ南西に歩いて、Gardini Pubblici（プブブリッチ公園）に至る。この間、クリスマスと同様に開いている店はまずなく、異様に静かな街である。しかし公園にはさすがに家族連れやジョギングの人が、ちらほら見える。

市立近代美術館と市立自然史博物館の立派な建物を外から眺めて、Corso Veneziaを逆に北東の方に戻る。この道が途中で、Corso Buenos Airesになる。

中央駅の周辺はアジア系や南米系の人たちが、多く住んでいるのだろうか。たとえば駅の逆側、Via G. Faraの辺りには、やたらと中華レストランがある。Settembrini通り周辺は、インド、バングラデシュ、トルコ系の店が目につく。この間、Buenos Aires通りにはLimaという駅があると書いたが、この通りに直交するやはり大きな通りにTunisiaというのもある。多様である。一方でScarlattiという通りもあり、これはあの作曲家のScarlattiに因んでいるようだ。生没年を書いたプレートが、通りに貼ってある。

Buenos Aires通りから例によってPergolesi通りを戻ってくると、確かクリスマスの時も開いていた中華料理屋の浙江酒店が開いていた。それで試しに入ってみた。中は思いの外広く感じは悪くない。クロスのテーブル掛けとナプキンを使っている。しかしメニューの料理の値段は安い。蒸し餃子と焼きソバとビールを頼んだ。餃子はいま一つだが、焼きソバは日本でもよくある味で、悪くない。しかし、

ビールは大を頼んだつもりが小が来た。さらに勘定書きの品数が1つ多いので聞いたら、間違いだった。指摘しないと余計に取られるところだった。単なる間違いだと思うが、言葉も分からず慣れない客から、ちょっとごまかそうというのだったら問題だ。

1/2 (金)

今日は雨。その中で、買い出しのために出かけた。今日は掃除もあるようで、そのために部屋を空ける必要もあった。溜まったゴミだけでも出しておいてもらわなければならない。

PAMに行ったが、シャッターが半分閉まっている。中は電気が点いていて店員が準備中のようなので、そのときは10:00ぐらいだったが、10:30には開くのかと、その辺を歩いてみた。Buenos Aires通りは繁華街ではあるが、観光客の来るようなところではないので、高級店はない。衣類や靴を見てみたが、値段は安い。

10:30過ぎに行ってみたが、まだ同じ状態である。やはり買い物に来た主婦たちも当てが外れたように、ウロウロしている。11:00にもう一度行ったが同じなので、諦めた。

昼になってもう一度出かけてみたが、まだ同じ状態だった。フィレンツェで雨の中を運動靴で歩き回って、その運動靴をバスタブの残ったお湯につけて干したら、かえって臭くなった。で今日は革靴を履いているが、これもグショグショしてきて、さえないことおびただしい。

買い物ができずに当てが外れたが、昼は残った豚肉と鶏肉を使って、ちょっと炒めた後、煮てみた。午後は珍しくかなり仕事をした。

1/3 (土)

56歳になった。家から電話があった。

今日は打って変わって天気がよい。で10時過ぎに出かけた。地下鉄でDuomoに出て、Palazzo Realeの"Il Gran Teatro del Mondo"という特別展を観た。これはCarloも観たと言っていた。

18世紀の世界を、絵画で概観しようという企画である。それで3幕構成と銘打っていて、1幕目が登場人物の紹介、つまり肖像画、それも2場構成で、初めが金持ち2つ目が貧乏人。2幕目は4場構成で、その4場の区分まで覚えていないが、風景画、風俗画などが並べられる。3幕目はフランス革命直前ということで、波乱を予想させる絵一枚のみを展示する。

客はほとんど地元の人のようにだ。考えてみれば当然で、観光客はBreraのような常設展に行くだろうし、地元の方は常設展は見飽きているだろう。だから絵の方はイタリア画家に限らず、イギリス、フランスのものもかなりある。1点だけ、ゴヤのよい絵 (Maria Telesa, Bourbon) がある。とくにイギリスは、Thomas Gainsborough, Joshua ReynoldsそしてHogarthの絵がかなり多く展示されていて、イタリアの画家の絵より光彩を放っている。実際、Gainsboroughの絵がこの特別展のポスターになっている。フランスではWatteauが何点かあり、Fragonardが1点あった。Chardinがあるように壁の解説に書いてあったが、見つからなかった。イタリア画家ではGiambattista Piazzetta, Gaetano Gandolfi (「青年の絵」) などがちょっとよいと思った。

この建物は元の王宮だが、美術館となっていない大広間などの内部は相当に傷んでいる。しかし、立派なタペストリーがある。

次に一度行ったCastello Sforzescoに再度行ってみた。この前見られなかったミケランジェロのピエタや絵画を見るためである。この間入れなかった左手の建物の一角は開いていたが一室だけで、ミラノの町の500周年記念のような展示があったが、文書ばかりである。また今日も開いていないのかと諦めかけたが、念のため前回見た右手の建物に入ってみた。その奥に、この間見逃したのか閉まっていたのか、ピエタがあった。フィレンツェのDuomo美術館のピエタより、さらに未完成で荒削りのままである。しかし、宗教的な力を感じる。

それで帰りかけたが、やはり絵画があるはずだと思って看板をよく見ると、中庭の角から地下に降りていくところが入口になっているのであった。だから、この間も開いていなかったのではなくて、見逃したのだろう。ここは無料だが、ある程度の数の作品がある。たとえばMantegnaが一つある。また知らない画家だがVincenzo Foppa (1427-1515/16) というのもよい画家だと思った。Fillippo Lippiのちょっと変な絵もある。館として力を入れて宣伝しているのがCesare da Sesto (1477-1523) のPolittico di San Roccoという祭壇画で、スタイルは古く中世風だが、描写力は高い。後、Canalettoの立派な絵が2枚あった。

大体、16-17世紀のイタリア画家で終わりだと思っていたら、後ろの方にピカソ、クレー、カンジンスキー、ブラックなどまであるので驚いた。さらには、エジプト美術館、考古学館のようなものまである。

地下鉄でLimaに出て、適当なレストランを探したが、BarとかCaffeはあってもrestaurant, trattoriaの類は見つからなかった。で、知っている中華料理屋、浙江酒店の隣のイタリア料理屋Sasaに入ってみた。研究のためtortellini in brodoを頼んでみた。brodoはコンソメスー

ブのことで、このスープは美味しかった。tortelliniは小っちゃな餃子のようなものだが、中に何が入っているのかよく分からない。もっぱらパスタの麺の味だけがした。グラスワインがなくて半ボトルなので、ちょっと酔った。ついでに頼んだデザートのカキがとても美味しかった。それから予定通りPAMに行って、重たい買い物をぶら下げて帰った。

1/4 (日)

今日は天気がよければCremonaへ行ってみようと思っていた。しかし起きたのが7時10分を回っていて、8:20発の汽車に乗るにはちょっときつかった。しかも曇天なのでやめにした。

昼になったら少し晴れてきた。昼食後、街に出た。初めて地下鉄のLinea 3にCentraleから乗り、Monte Napoleoneで降りた。目指すはMuseo Poldi Pezzoliである。これは個人の収集品をその屋敷で展示した美術館で、その意味ではロンドンのSir John Soane's と似ている。しかし、規模はこちらの方がかなり大きく、といっても展示点数はたとえばBreraと比べればはるかに少ないので、のんびり鑑賞できる。

昨日見たCesare da Sesto (1477-1523) やVincenzo Foppaがある。Sestoの聖母子像はラファエロ風だ。Andrea Solario (1495-1529) は端正な宗教画だ。地元ミラノのBernardino Luini (1480/85-1532) の作品がかなりある。精密な画風。Andrea Mantegna (1431-1506) が1枚あるが、それほど大したものではない。ボッティチェッリも2枚あるが、1枚は修復中で見られない。Pietro della Francesca (1415/20-1492) のSan Nicola da Tolentinoがある。顔より黒い服が素晴らしい。Giovanni di Pietro detto Lo Spagna (1450-1528) というのは、昨日も何枚か見た。名前通

りスペイン人で、ミラノで活躍したらしい。Bernardo Strozzi (1581-1644, ベネツィア派) になると、時代が下がってかなりモダンだ。

Canaletto (1697-1768) の廃墟の絵が2枚あるが、やはり昨日のベネツィアの絵の方がよい。Giorgio Schiravone (1436-1504) のBernardino da Sienaという絵にちょっと感心した。ここで、一番有名なのはPiero del PollaiuoloのRitratto di Donnaである。確かに美しい。もっともPollaiuoloかどうか確かではないらしい。

帰りはMonte Napoleone通りを歩いてみた。高級店が並んでいることで有名な通りである。そこでSan Babila広場に出たので、地下鉄に乗ろうかと思ったが、ついでにそのままCorso VeneziaからBuenos Airesと歩いた。そしてPAMに行ったのだが、なんと閉まっている。土曜は早く閉めるのか（このときは曜日を間違えて、土曜と思い込んでいた）。この辺がまだ慣れない。がっくりきたが、買ってあったFinocchioをサラダにし、マカロニを茹で、まあそれなりの食事ができた。

Cremona

1/5 (月)

今日こそはCremonaに行こうと、目覚ましをかけて起きた。そのだいぶ前から目が覚めていた。幸い天気がよい。これは昨日にしなくてかえって正解だと、その時は思った。

この間Firenze行きの切符を買って、ここの売り場は英語が通じることを確かめたが（しかし人によるかもしれない）、イタリア語の練習と思って、クレモナまでの往復切符をイタリア語で頼んで、首尾よく買えた。ただ、一等を頼んだつもりが切符の等級の欄に何も書いていない。8:20発の列車は一等と二等があることを確かめている

が、安全のために二等車に乗った。Mantova行きである。汽車は空いていて、1つのボックスに一人という具合なので、二等車で問題ない。

ミラノの町を外れたら、すぐに霧になった。野や畑は霜で真っ白になっている。霧氷だろうか。木も雪が降ったかのように真っ白になっている。陽は登っていて、霧が薄れるとオレンジ色に見える。しかし、クレモナまでの1時間強の間、この霧が濃くなったり薄くなったりしながら続いていた。

9:30にCremonaに着いた。まだ霧がある。気温はかなり低い。駅前の道をまっすぐたどると、ほどなく中心地に出る。その左手にDuomoがある、ミラノのDuomoと比べれば小さいが、立派な構えである。右にFirenzeと同じように八角形の洗礼堂、左手に鐘楼がある。



Cremona Belltower

Duomoのファサードは白とバラ色の石で造られていて、明るい。下に柱列があり、その上に石像が並ぶ。内部は華麗である。天井、柱には綿密な文様が、壁という壁にはフレスコ画が埋め尽くされている。文様は深緑と金を基調として、きわめて装飾的である。装飾過多といってもいいくらいである。



Cremona Duomo

入って間もなく10時になり、鐘の音とともに神父が2-3人入ってきてミサが始まった。話よりも歌が多い。Sancutusとか決まり文句が繰り返される。参会者はそれほど多くない。後で述べるが、このときはまだ今日が日曜だと思い込んでいるので、ミサがあるのは不思議なく、それにしても人数がちょっと少ないかと思っていた。

地下も整備されている。そこに修復前の地下の写真がある。それを見るとかなりひどい状態で、修復にはずいぶん手間がかかったと想像される。そうすると本堂部分をこれだけ見事に維持するには多大な労力と金が必要だと類推される。十字型の隅々にいくつかの祭壇があるが、多くは金ぴかである。金ぴかの仏壇とよく似ている。こういう類似性は自然に生じるのか、やはり文化の相互伝搬の結果なのだろうか。

ここの鐘楼は高い。フィレンツェのとどちらが高いか分からないが、基地部の大きさは、こちらの方が一回り大きいに違いない。やはり階段で登ることができる。階段の幅がフィレンツェより広い。解説書によれば、111m、487段とある。

この頃には霧も晴れた。しかし、最上部に登ると、遠くはやはり霞んでいる。昇りは息が切れたが、降りには脚ががくがくした。洗礼堂も€2で中に入れる。しかし中にはほとんど何もない。小さいレンガをきれいに積んで、八角錐の屋根が作られている。これも修復されたものだろう。

美術館の方に行こうと、いったんPiazza Romaまで出てから、Palazzo del Comuneを見ていないことに気づき、引き返した。入口がなかなか分からなかったが、階段を見つけた。上がったところにテーブルがあり2人の男が立ち話をしているが、切符を売っている風ではない。Buongiornoと言うからこちらもBuongiornoとだけ言って中に入った。いくつかの立派な部屋があり、どこも他の王宮と同じよう

に絵がかかっている。ただ、会議室などとして実用に使われているらしい。多分、市議会をやるのではないか。それにしても少し小さいが。ぐるっと回って出てきた。

さて、Museo Civicoに行った。受付で今日は閉館だという。火曜から日曜までが開館だという。この程度のイタリア語は理解できるようになった。しかし、今日は日曜日だから開いているはずではないか、というだけの力がない。日曜は10:00-18:00が開館時間のはずである。ここにきてようやく、今日はもしかしたら月曜なのではないかと思い始めた。

さっきこの日記を見直して、12/26から曜日が1日ずれていることに気づいた（この電子版では訂正済）。だからフィレンツェで、土曜にミサをやっていると思ったのは日曜なのであった。また、昨日スーパーが早く閉まっていたのも日曜だったのである。というわけで、確かに天気は申し分ないが、休館ではやはり昨日来た方がよかったことになる。

急に時間をもて余すことになった。ゆっくり昼飯でも食べようと、「地球の歩き方」に1軒だけ紹介されているレストランに行くことにした。少し外れたところにあるが、時間があるので構わない。回り道をしながらそれらしいところにたどり着いたが、見当たらない。改めて住所を確認し、その地点に行ってみると、あるにはあったが閉まっている。1月7日まで休みと出ている。そのあとに1994とあるのが分からない。1994年に出した掲示とは見えない。2004年を間違えたのか？

そういえば、今回の汽車の時刻表はインターネットで調べて便利だったが、あるページから検索に飛ぶと、検索の対象の年が2002年に固定されてしまう。古いページへのリンクが残っているらしい。

とにかく当て外れが続き、またDuomo付近に引き返し、Centraleというレストランに入った。中は立派だが、主人らしい人の他に動き回っているのは元気のよい小柄のオバサンで、あとテーブルの準備をしたりする程度の手伝いのオジサンが一人いる。オバサンがもっぱらメニューを持ってき、注文を受け、料理を出し、勘定の手配をする。それほど待たせるわけではないが、テーブルで勘定をするのではなく、レジでするのに、そこでえらく待たされた。

Bollito Misto (mix boil)を頼んでみた。サラミと牛タンと多分豚肉を茹でたのが出てきた。ソースも付け合わせもない。せめてマスタードがほしいと思ったが、テーブルには塩と胡椒とオリーブ油とビネガーしかない。味はまあまあである。とくに牛タンは柔らかくてよい。デザートにイタリアに来て初めてTiramissuを頼んだが、なかなかよかった。

まだ2時である。15:39の汽車までかなり時間がある。Corso Garibaldiを歩いてみた。昼休みで店は皆閉まっている。古い建物を修復して使っているらしいものが、いくつかある。そこでMonteverdiの生地だということを思い出し、生家かゆかりのものでもないかと、案内所で聞いてみることにした。案内所はPalazzo del Comuneのところにあるので、またまた歩いて戻る。さすがにそのオニイさんは英語ができて、とても親切だった。Monteverdiの生家とか記念碑とかはないと言う。ずいぶん冷たい町である。ストラディバリ博物館には関連するものがあるが、残念ながら今日は閉館だという。ここはCity Hallで、その2階でコンサートがあるが、と言ってその場所を案内できるかどうかいろいろ当たってくれたが、人が捕まらない。しかし、コンサート会場を見たところではない。諦めてまた街をぶらぶらし、写真を撮った。快晴だが空気は冷たい。幸い風はない。

Duomo以外にもあちこちに教会があり、きれいに修復されていないものも多い。町全体が美しく風情がある。しかし人があまりに少なくて淋しい。この時期でしかも週日だから（！），観光客もきわめて少ない。しかし，日本人らしいのをいく人か見かけた。

1/6 (火)

久しぶりに大学に行った。しかし，朝，アパートの外の扉が閉まっている。これは祭日の時の状態だ。

大学に行ってみると，主キャンパスの方は門が閉まっている。電子情報科の方はいつものカードで入れたが，ほとんど人がいない。1月は早く始まるものと思っていたが，今日は祭日か何か特別の日なのだろうか。

明日，セミナーをやることになっているが，人が集まるのだろうか，という気にもなった。とにかくセミナーの準備をした。と言っても，インペリアルカレッジでしゃべった材料にちょっと手を入れただけである。それでもそれなりにアイデアが出てくる。しかし，部屋の暖房がなかなか効いてこない。ということもあって，3時前に引き上げた。

戻ってみると外の扉は開いていたが，部屋の掃除が入っていない。やはり何か休みの日らしい。

1/7 (水)

やはり昨日は，キリスト教の何かの祝日だったということだ。今日は普通に皆いたが，Amyは来ていない。

午後4時半からぼくのセミナーがあり，ICの時と同じ話をした。もちろん，若干の進展はある。しかし本質的に変わっていないというこ

とは、この間3か月、例題と言語仕様を書くのにひどく時間がかかっていることになる。

なぜかICの時のようにすらすら話せなかったが、質問はたくさん出て、終わってからCarloも面白かったと言ってくれた。その前に昼、食事に出た帰りに声をかけられた教授が、残念ながら用事があるって自分はセミナーに出られないが、自分の学生を出すと言っていた。集まったのは20-30人だろうか。一人、去年の夏3か月、JAISTに行っていたという人にも会った。

帰りに大学からPiolaの駅に出る途中のスーパーGSに寄ってみたが、ここも見かけによらず色々ものがある。ワインはPAMよりむしろよく、Bordeauxなども置いてある。ムール貝を1袋買ったら相当の量なので、半分だけワイン蒸しにして食べた。それでも腹いっぱいだった。

1/8 (木)

Venezia往復の切符をインターネットで確かめたら、意外なことが分かった。やはりEuroStarだとInterCityより30分ぐらい早いけど、何と料金はEuroStarの方が安い。また、1等と2等の差は小さく、片道€28と€20ぐらいである。

午後早めに切り上げて、Centraleでこの切符を買った。ついでにDuomoに出てTurandotの1/20の切符を買った。この日以外はすでに売り切れだった。この日の切符も選択肢がないのか、愛想の悪いお兄さんが104.5ユーロだという。それでカードを出したら、カードリーダーが壊れていて、クレジットカードを使えないと言う。その言い方も、申し訳ないというような素振りは毛ほども見せない。財布を見たら現金が奇跡的にちょうど€105あった。ロンドンで眼鏡を買ったときのことを思い出した。

1/9 (金)

朝、Caiazzaの駅に行ったら閉まっている。またもやストらしい。そういえば、昨日はローマ空港の管制官のストで多くの便が欠航になったとCNNで言っていた。Carloは今日から米国出張だと言っていたが、大丈夫だろうか。

Collegioにいた時と違って、地下鉄が動かなくても歩いて行ける。時間を測ってみたら25分弱だった。ロンドンのアパートからICまで歩くのより5-6分遠いというところである。速足で歩くと身体も温まって、手袋が途中で不要になった。

プリンタがしばらくうまく動かなかったのを。Mirkoに言って解決してもらった。彼は実に真面目な青年である。

今日はいつになく真面目に仕事をした。Epsilonの言語仕様の記述がかなり進んだ。

帰りも歩いて帰った。途中のアジア系食品を置いている店で、日本米を買った。

1/10 (土)

朝は曇っていたが、昼から晴れ暖かくなった。午前中はある程度仕事をし、昼食を摂ってから（スパゲッティを茹で、一昨日からのムール貝などをトマトで煮たスープの残りを入れたが、うまかった）、出かけた。

Breraの残りを見ようと、Linea2のLanzaという駅で初めて降りた。この間のPoldi Pezzoli美術館の時もそうだったが、出してから方向が分からない。周辺をウロウロしてから、ようやく目指す方向が分かり、Brera美術館に着いた。ところがどういうわけか閉館である。別に定

期的な休館の日ではなさそうだから、これもストライキか？ 何ら揭示らしいものもない。

Lanzaの駅前に、Teatro Strehlerという劇場があったので、そこに戻ってみた。12月にはコシファントツテを上演していたらしいが、もう終わっている。1月にはとくに出し物がないらしい。コンサートでもないかとプログラムを見てみたが、めぼしいものはない。

例によってDuomoに出て、Santa Maria Presso S. Satiro教会を見られなにかと思ったが、いつ見ても中に入れそうにない。結局、また地下鉄でLimaに出た。Duomo周辺もそうだが、今はバーゲンセールで客が多い。半額で€30のセーターを買ってしまった。毎日同じセーターを着ているので傷んできたし、気分を変えるという意味もある。しかし、半額でなくても安いので、質はあまり期待できないかもしれない。あとスーパーでちょっとしたものを買ひ、通りのマーケットで靴下とパンツを買ってみた。靴下4足€5、パンツ3枚€3。

1/11 (日)

ミラノも他のイタリアの町も歩くのに向いている。町全体がさほど大きくないし、アメリカのように自動車用に道が作られている訳ではない。しかし、歩くのを妨げるものが、2つある。1つは歩道に乗り上げて駐車しているたくさんの車である、ここの路上駐車の無軌道ぶりは相当なものだ。ロンドンも路上駐車は多いが、皆規則に従っているようだ。もう1つは犬の糞である。まだ踏んづけたことはないが、その危険は大いにある。パリでもロンドンでもあるが、ここはとくに多いような気がする。そうしてみると、日本の町に犬の糞がないのは、驚嘆すべきである。飼われている犬の数は現代日本では非常に多いはずだが、どの町に行っても飼主のマナーが徹底していて、道に糞を残すことはまずない。それに関連して、昨日だっ

たかCNNで名前も知らないロックバンドへのインタビューの一部を聞くともなく聞いていたら、日本での公演の話をしていて、日本はクリーンで、7000人入ったコンサートの公演後の会場に、煙草の吸殻1つ残っていない、驚くべきことだ、と言っていた。

日本は多分、昔から清潔好きで、江戸時代にヨーロッパやアメリカから来た人たちが驚いている。近い国の韓国は知らないが、中国はおよそ違う。こういう文化習慣というものは、意外に現代の世代にも引き継がれていくもののようなのだ。とにかく、日本の町は美しくはないが（これもまた不思議だ）、クリーンではある。

Edward Rutherfurd, "London the Novel" 読了。

これを買ったときは、いつになったら読む気になるだろうかと思った。最初買ったペーパーバックで1000ページあった。その本をBrusselsのホテルに忘れてきたためにロンドンで買い直したが、その版は活字が大きくて、なんと1300ページある。

最初にこれを買ったきっかけは、例によって翻訳が出てその書評が新聞に載ったのを見たことである。書評で面白そうだと思っただけでなく、翻訳は上下2冊でそれぞれが5000円する。ペーパーバックで買うと1冊でよくて、しかも\$10ぐら이다。今の版は£8である。

10月に思い出して、孝子に送ってもらって（考えてみれば送料と、買い直し代と、後で余計に金をかけている）、読み始めた。途中で失くして買い直すまでの期間もあったが、とにかく読みきるのに3ヶ月近くかかった。その分堪能した。

よくできた物語集である。要するに「お話」だ。日本でいう大衆小説のジャンルか。いずれも巧みに作られ、登場人物、プロットにむだがなく、皆からんでくる。最後に仕掛けがあることが多いが、大

体メデタシメデタシである。かといって勧善懲悪の臭みが目立つということはない。複雑な心理描写や思想性がない代わりに、ロンドンの歴史という背景が大きな強みとなっている。著者はその歴史について該博な知識を持つだけでなく、その取舍選択、プロットへの絡ませ方、に特別のセンスを見せる。歴史上の人物も数多く登場するが、それらは主人公ではなく、活躍するのはあくまで著者が創造した金持ちから貧乏人まで幅広く含むロンドン市民である。だから歴史小説とはいえない。

ロンドンに2カ月半暮したので、多くの地名になじみがあり、それがこの小説への興味を深めた。そういう意味では絶好のタイミングの読書であった。しかし、ずいぶん時間を使った。

今日は昨日ほどきれいに晴れてはいないが、悪くない天気である。午前中、PCのディスクがうるさいのでdefragmentationをしたら、やけに時間がかかってしまって、少ししか仕事ができなかった。それでも昼食後出かけた。昨日はダメだったBreraに再挑戦した。それで分かったが、多分昨日も開いていたのだ。最初に行ったときに入口が分からなくてマゴマゴしたが、昨日は入口を知っているのでまっすぐにそこに行ったら閉まっていた。しかし、そこは別の入口があったのである。1回目の時に正面の入口が開いていたのはむしろ特別で、端の方の入口を通常使っているらしい。そして、前回やはり半分しか見ていなかったことを確認した。しかし、前回見た範囲でもいろいろ新しい発見があった。帰りにこの美術館のカタログを買ったので、メモした絵がきちんと参照できる。

夜、たまたまイタリア語放送のスポーツ番組のTVをつけたら、サッカー中継が始まるところで、盛んにナカタ、ナカタと言っている。中田がどのチームにいるかも知らなかったが、Bolognaに移ったらしい。移籍後の最初の試合なのだろうか。その辺は何を言っているの

か分からないので不明だ。あらかじめ撮ったインタビューも交えた紹介があったが、中田のイタリア語が実に流暢なのでびっくりした。

試合は2-1でBolognaが勝ち、その2点目は中田の見事なセンタリングをフォワードが頭で合わせたものだが、相手は何とかいう下位チームで、しかも試合は終始押されっぱなしだったので（とくに後半）、Bolognaは弱そうだ。

1/12 (月)

今日はまたも交通スト。Carloと今度のアパートは大学に近いので、ストになっても歩いて行けると話していたが、冗談のように思っていたのが本当になった。Carloも米国に出かけているし、静かな一日だった。昼食券を持ってくるのも忘れたので、昼食抜きで仕事をし、Epsilon/Jの言語仕様書を一応完成させ、例題集とともにWebに載せて、ゼミの連中とこの間メールをくれたSebastianに連絡した。

帰りも地下鉄は動いていないので歩いて帰り、昼抜いていることもあるし、明日から出かけるので食料品をなるべく整理するという意味もあって、かなりの量の料理をし（トリ、ビーフ、タマネギなど炒めてから煮込んだ）、食べ過ぎた。調子に乗ってワインもだいぶ飲んだ。

Venezia

1/13 (火)

8:55発のES Venezia S. Lucia行き。とにかく中央駅がすぐ近くなのは便利だ。車中で、陣内秀信「ヴェネツィア 水上の迷宮都市」（講談社現代新書）読了。

フィレンツェ行きの車中で高階の本を読了したの同じような戦略で、ヴェネツィア行きの車中で読み終えた。

今気がついたが、この人は1947年生まれで東大の建築出というから、われわれと同学年で、西やもう一人の玉井と一緒にかもしれない。イタリアの都市についてよく書いているようで、森まゆみの「「即興詩人」のイタリア」でも、ナポリでこの陣内の常宿のホテルに泊まる話が出てくる (p.225)。

この本は都市論の話なので、高階の本のように観光ガイドブック代わりに使える部分は少ない。しかし生きている町の様子は分る。講談社現代新書という軽い本ながら、10章の構成はきちんと取れていて、その表題が、浮島、迷宮、五感、交易、市場、広場、劇場、祝祭、流行、本土、と工夫されている。この見出しを見るだけでもヴェネツィアという都市の特徴が浮き出てくる。

汽車はBrescia, Verona, Vicenza, Padova, Mestreという町に順に停まる。名前だけでも魅力的だ。

駅を降りて、目の前の運河を見るだけで、ヴェニスに来たという感じがする。やはり汽車の中でパラパラと読んだゲーテの「イタリア紀行」で、ヴェネチアに着いた時の記述はこうである。

「私が1786年9月28日の夕刻、ドイツ時間の5時に、ブレンタ河から潟へのり入れつつ初めてヴェネチアの町を遠望し、それから間もなくこの不思議な島の町、この海狸共和国に歩を印し、見物をするということは、運命の書物の私のページにすでに書き記されてあったのだ。かくして幸にも、ヴェネチアは私にとって単なる言葉、うつろな名前—それは空言の不倶戴天の敵である私を幾たびか悩ましたところのものであるが—ではなくなったのである。」

いかにもゲーテらしく大仰な（いってゲーテをそんなに読んでいるわけではないので知ったかぶりに近いが）もの言のだが、興奮が伝わってくる。しかし、その後のヴェネチア滞在記は思いのほかあっさりしている。岩波文庫版で46ページ費やされてはいるが、記述量が多いのは芝居やオペラの見物についてで、あと理系人間的な潮の満ち干や自然現象への言及も割とある。意外に少ないのが美術関係で、建築はもっぱらパラディオについてだけ。絵画はヴェロネーゼの1枚を見に行ったという記述と、ヴェネチア派は「...すべてのものを明瞭にかつ朗らかに眺めているに違いない。...ティチアノとパオロとはこの明朗さを最高度に有していた。」という感想ぐらいである（パオロとは、ヴェロネーゼのこと）。

船には乗らず、橋を渡って大体の方向を目指して歩き始めた。途中で行き止まりになって引き返すことが2-3度あったが、思ったほかスムーズにホテルのあるS. Barnaba広場に出た。広場に面してはホテルらしいものが見えなかったが、なぜか勘で入った路地に目指すホテルがあった。ホテル名はLocana San Barnabaで、Carloの有能な秘書Allesandraが休み明けにここが取れていることを突き止めてくれたところである。小さいが、とても良いホテルである。マスターらしい人物も親切で感じがよい。

まずアカデミア美術館に行こうと思った。ちょっと道を間違え遠回りをしたが、場所は割と近く、行き着いた。入る前に食事をしようとまた歩き始めたが、なかなか適当なものがなく、そのうちに大きな教会に行き着いた。S. Maria della Saluteで、突端まで来てしまったわけである。Giudecca島の面した南側の海というより、運河（Canal della Giudecca）沿いに戻ったら（この通りをZattereというらしい）、途中にレストランがあったので、そこに入った。La Piscinaという名の洒落たレストランで、ウェイターも感じがよかった。アンチヨビのスパゲッティを食べたが、量が少なかった。それでデザー

トにチョコレートケーキを食べたが、スポンジが軽くて面白いケーキだった。

アカデミア美術館について書こうと思うと、きりがない。Giorgioneの特集をやっていて、「嵐」の他にLa Madonna col Bambino tra i Santi Nicasio e Francesco（カステルフランコ祭壇画（玉座の聖母子と聖リベラーレ、聖フランチェスコ））、I tre filosofi, La Vecchia, Laura などよく集めてある。

ここは順路の最後の方に、CarpaccioやBelliniの大作があり、そしてジョルジオーネの特別展示、さらにその後、本当の最後にTizianoの「聖母マリアの神殿奉献」があって、最初からじっくり見ていたらえらく疲れた。で一回りしてから、マンテーニャの「聖ジョルジュ」を見損なっただと思って入口近くの第4室に行こうとしたら、そこで何と紙名君に会った。前日に来て、今日はワークショップに出たという。それでぼくのホテルの場所を教えて、7時半に来てもらって一緒に食事に行くことにした。紙名君にPOPLの会場、登録受付の場所を教えてもらえたのは助かった。

それで彼とはいったん別れて、またS. Margherita広場に行った。「また」と書いたが、アカデミアに行く前にここを訪れたことを書き漏らしている。POPLの会場がこの広場の一角という情報だけを記してきたので、場所を確認に行ったのだが、ぐるっと回ってもそれらしいところが見つからず、諦めていたのである。

今度は正確な場所が分かったのでそこへ行ってみたら、何と米澤に会った。向こうもぼくが来るとは思っていなかったらしく、お互いに驚いた。で一緒にいた琉球大学の河野さんと食べに行こうと言うから、7時半に学生と待ち合わせをしているので、それまで一杯やって時間をつぶそうということになった。その辺をウロウロしてバールに入り、それからぼくのホテルに行った。

「地球の歩き方」で米澤がここはどうかというレストランをホテルのマスターに聞いてみたら、オーナーが変わってよくないという。それで彼にいろいろ聞いた。あまりいろいろ教えてくれるので、かえって迷ったが、米澤たちは前日魚料理を食べているので、近くの肉料理専門店のL'Incontroというところに行った。庶民的なサルディニア出身の夫婦が、サルディニア風の肉料理を出す。S. Margheritaのすぐ近くなので、米澤が顔見知りのPOPL参加者が、われわれの後たくさん来た。

1/14 (水)

朝9時からの招待講演は、Davide Segniori (U. Bologna) という人の Coinduction Techniques in Programming Languages というもの。とにかくPOPLは初めてだし、ICSEとは全く違うcommunityなので知り合いはほとんどいない。ただImperial CollegeのCris Hankin, Sophia Drossopoulou, 吉田さん、ちょっと美人の若い女性(Philippa Gardener) は知っている。しかし、Jeffとはグループが違うので、彼らとはこれまであまり話さなかった。Crisと話して、彼がPOPLをロンドンで開いたときのorganizerだったということを知った。美人の女性からはあなたはJeffと近いから分野が違うと思っていたと言われ、確かにPOPLは初めてだ。しかし、今回は論文がFOOLに通ったのでと言ったら、じゃあこの分野にcreep inして来ているのね、と言われた。

招待講演は、bisimulationとcoinductionの話でどちらもある程度の知識はあるが、身についたものとはいえない。しかし、あるいはそれだけに頭の整理にはなった。

結構日本人が来ている、高野さん、小川さん、亀山さん、住井君、もちろん五十嵐君（彼は今回、POPL, FOOL両方のPCをやっている）

る。それだけ認められているわけだ），他にも若い人がかなりいる。

米澤は朝からいない。ぼくも招待講演のあとはさぼって、ホテルに荷物を置き、Vaporettoの72時間券を買ってまずS. Marco広場に向かった。これも書き忘れていたが、昨晚、紙名君と別れた後、S. Margheritaに行く前に、とにかくS. Marco広場に行ってみようとアカデミア橋を渡って歩いてみた。リアルト橋の方向に行ってしまったが、途中で方向を修正したら、いきなり広場に出た。やはりある感激があった。すでに日は暮れて照明の中で見た広場である。

今日は天気がよい。陽射しが暖かい。Palazzo DoucaleもBasilica d. San Marcoも陽に輝いている。まず、ドゥカーレに入った。ダヴィンチの聖母子像がエルミタージュから貸し出されてきて、最初の方の部屋に置いてある。そのあとは、フィレンツェのPalazzo Vecchioと同じで、金にあかせた豪勢な部屋が次々と並んでいる。しかも、ヴェッキオよりはるかにスケールが大きい。ここも順路の最初の方は小さい部屋で装飾も地味なのが、段々に大きくなって、金ぴかの装飾と膨大な絵にやや食傷気味になってから、Sala del CollegioとかSala del Senatoとか高い天井の大広間があって、壁という壁、天井という天井が、ヴェロナーゼ、ティントレットで埋め尽くされている。全部回るのに1時間半ぐらいはかかったろうか。

次にサンマルコ寺院に入った。ここは外見も内部も、やはりビザンツ風というか東方の感じで、これまでイギリス、ブリュッセル、イタリアで見たどの教会とも、まったく感じが違う。内部は金箔を多量に使っているが、それが黒ずんでいて、かえって面白い効果になっている。

次にRialto橋を目指した。その途中のバールで、サンドイッチとビールを摂った。Rialto橋界限をブラブラしたがとくに見るものもなく、

S. SilvestroからvaporettoでS. Maria della Saluteに行った。ここの内部はS. Marcoより大きな空間で、簡素である。Tizianoがいくつがあるが、それほど大したものではない。ただ聖人の上半身を肖像画風に描いた8枚がある。暗くてよく見えないながら、さすがという感じはある。



Basilica di San Marco

POPL会場に戻って紙名君に会い、また7時半にぼくのホテルで待ち合わせることにして、結局近くのAntica Trattoriaという魚料理専門店に行った。量の多い店で、二人で前菜のマリネとsecondoの魚のフライを1つずつ取って、あとサラダも一人分で、十分すぎるくらいだった。フライは温かいうちは美味しいが、ソースはなくレモンすら付いてこず、せいぜい塩とオリーブ油ぐらいで、ちょっと味が足りない気がした。

1/15 (木)

今日の招待講演はJohn C. Reynoldsで、Turing賞も取った老大家だが、回顧的な話でも大所高所からの展望や概論でもなく、いきなり現在研究中の技術的な細部を話し出した。並行プログラムの話で、Grainless Programmingと呼んで、atomic computationの取り方に依存しない計算法の提案ということである。

次のセッションで4件の発表があったが、うち2件が日本人で、吉田展子さんと住井君である。どちらも発表はうまく、内容もちゃんとされていて（専門ではないのできちんと分かったわけではないが）、よかったと思う。

昼は、米澤、小川、高野、亀山、紙名とS. Roccoの先を右手に行ったところのレストランに行った。そこに2時半過ぎまでいて、そこからぼくは会場に戻り、といっても話を聞くためではなく、無線LAN環境を利用して、鶴林君に彼が投稿するという論文のコメントを作成して送るという作業をした。論文は来る時の汽車の中だと、ヴェニスに着いてから読んだ。

そのあと、Basilica di Santa Maria Gloriosa dei Frariへ行った。ここにはTizianoの素晴らしいAssunzioneがあるが、あまり近くまでは寄れない。DonatelloのBattistaもある。これはマグダラに似た傾向の作品だが、こちらにはコミカルな感じがある。Tizianoの記念碑という大きな墓石のようなものがあるが、これは19世紀のものだそうだ。あと、驚いたのはMonteverdiの墓があることだ。生誕地のCremonaには何もなかったが、墓はこころしい。

S. Tomaに出て、また船でいったんホテルに戻った。確かにホテルがvaporettaの船着き場に近いのは、便利である。夜はPOPLの晚餐会である。8時からで、場所はScuola Grande del Carminiに近い。あるいは同じ建物だったのだろうか。

食事前のカクテルでは、吉田、高野、米澤などと話していた。テーブルに移って、やはり日本人ばかりのテーブルとなり、米澤、本田・吉田夫妻、五十嵐夫妻（五十嵐君は奥さんを連れて来ている）、高野、小川、亀山と言ったところが一緒だった。会議の会場にしてもここにしても、天井画があり、柱に彫刻があり、皆、寺院や宮殿と類似に見える。

1/16 (金)

招待講演はModel Checkingの話で、一番身近に感じた。MCで無限を扱うことについて、この話に触発されてちょっとアイディアを得た

気がするが、意味があるかどうか分からない。その後のセッションも珍しく聞いたが、どんな話だったか覚えていない。しかし、自分にとってはそれほど遠い話ではなかった。



米澤さん

昼はまたまた米澤，高野，亀山と連れ立って，S. Toma広場に面した店に入った。小川さんはホテルを引っ越すとかで（これも彼の趣味である），参加しなかった。

食後別れて，ぼくはMuseo Covnerに行った。S. Marco広場の一角にある美術館で，€11も取る。その割にはあまり大したものはない。若桑みどりの本で見たCarpaccioの「ヴェネチアのふたりの貴婦人」が目当てである。Carpaccioとしては不思議な絵である。他に，Giovanni Belliniのものがいくつかあり，Jacobo Bellini（Giovanniの親だと今頃知った）のものもあるが，あまり大したものではない。

米澤と約束していたように夕方会場に戻り，最後の発表の後半を聞いた。分析に確率的アルゴリズムを使う話である。

小川さんが今日はEnoteca San Marcoに行くと言うので，われわれもそれに従うことにし，ぼくと米澤は一足先に出て，そこで一杯やっていた。7時ごろ小川さんが来，7時半ごろ高野さんが来た。小川さんはとにかくワインをよく調べている。彼が最初に頼んだPiemonteのRossy-Bassという白ワインはGajaという醸造元だが（ここのワインは皆よいという），こくがあり，今までイタリアで飲んだワインにはないタイプだった。食事は小川さんが前に食べてよかったというトリュフ入りのラビオリと何とかいう魚を焼いたのを食べた。魚

はそれほど印象に残っていない。4人で白1本と赤2本を空け、漱石、鷗外論など文学論議に花を咲かせた。

1/17 (土)

今日はFOOL(International Workshops on Foundations of Object-Oriented Languages)である。招待講演2つと一般講演7つというプログラムである。

朝の招待講演は、Scala by Examplesと題し、ScalaというOOPとFPを融合させた言語の紹介を例題で行うというものだった。この間うちさんさん読んだExpression Problemsを取り上げ、一番よい解法を与えたと自画自賛している。他にWeb ServiceとかXMLなどの例を出している。

10:30からのセッションの2番目が紙名君だった。スライドはあらかじめ見て、修正点を指示しているので、話の組み立ては一応ちゃんとしていることは分かっている。慌てた話しぶりではあったが、発表はまあ無難だった。しかし、非常に簡単な質問、つまり $A \cdot B$ のとき、 $X::A \cdot X::B$ となるかという質問を彼は聞き取れず、まあ質問の仕方というか言い回しがちょっとややこしかったが、それでぼくが代わりに答えようかと思ったが、違っていたらまずいと思って、どうしようか迷っているうちに、五十嵐君が近くに行って日本語で紙名君に説明し、紙名君が答えた。

昼は本田さんとだいぶ話をした。米澤が、彼が数年前に日本に帰りたいという相談を受けたことがあるが、一昨日のパーティーでは隣だったけれど、皆の前なので聞けなかった、と言っていた。ぼくにどう思うかというので、現在はロンドンの身分や生活がある程度安定しているのではないかという観測を述べた。本田さんにそれとなく聞いてみると、半々のような感じだった。帰りたい気持ちもある

が、現状にもかなり満足しているらしいように感じられた。客観的にみると奥さんの方が高く評価されより安定した身分であるようだが、この二人の夫婦仲が案外よさそうなので、おせっかいなことではあるが、ちょっと安心した。

午後の招待講演はXMLをきれいにOOで扱う話。昼食は簡単なものと飲み物がテーブルで勝手に摂るように出されたが、本田さんと話していて、あまり食べなかった。ただワインを2杯飲んだ。そのせいで、この講演の後半はちょっと居眠りをした。

あとの3つの発表も真面目に聞いた。POPLより相当レベルは落ちるが、皆それほど難しい話ではない。もっとガチガチの理論ものが多いのかと思っていた。

夜は、五十嵐君を誘って二人で食事をした。最初に行こうとしたAl Mercantiは分かりにくいところで苦労して探し当てたが、閉まっていた。で、Fiaschetta Toscanaというところに行った。最初は予約で一杯という話だったが、9時半ぐらいまでならということで、案内された。結局今回食べた中で、この日の料理が一番だった。クモガニのサラダとmonkfishのグリルを頼んだが、どちらも最高だった。FriuriのTocaiを頼んだが、€19という値段にしては、これも悪くなかった。

1/18 (日)

ヴェニス最後の日になって、朝から雨。

ゆっくりして、10時半ごろチェックアウトしようとしたが、カードの認証システムの不具合で支払えない。ぼくだけでなく前の客も同じで、またこのホテルだけでなく他も同様だという。午後また来るからということで支払いを延ばし、荷物を預け、歩き始めた。しか

し、雨で寒く、なんともさえない。

Scala Contarini del Bororoに行った。カタツムリ型の階段が有名な建築である。€3で上まで昇れる。建築として面白いかもしれないが、雨の景色を上から眺めても感興が湧かない。



五十嵐さん

San Salvador教会に行ってみた。

Tizianoがあるという。入口は開いていて中に入れたが、日曜だからミサの最中である。入口の掲示をよく読むと、ミサ中は立ち入るなと書いてある。

途中で手作りのノートを買った。今、この日記を付けているノートは€3.50だが、今日買ったのは€31.25もする。まあしかし記念だ。それをきれいな紙袋に入れてくれたのをぶら下げて歩いていたが、袋の紙が雨でぐしゃぐしゃしてきた。

寒いし、時間は早いけど昼食にするかコーヒーでも飲もうと思って、しかしそこで近くのバルなどに入る気がせず、朝、S. Marco方向に歩く途中、というよりアカデミア橋にまだずっと近いところで見かけたカフェがよさそうだったので、わざわざS. Marco経由で戻って、その店に入った。名前は単にLe Cafeという。そこは天気が悪くて、しかし開いている店は限られるせいで人がたくさんいたが、女店員が実にテキパキと、しかもにこやかに素早く対応し、隅にすぐ座れただけでなく、注文の料理（というほどのものではなく、パニーニのサンドイッチ）もすぐに来た。このパニーニのサンドイッチの種類に、場所柄、画家の名前を付けている。その選択が面白

い。ターナー，ティツィアーノ，ティエポロ，マネ，ゴヤ。ぼくはspeck(smoked or pickled pork belly)入りのゴヤを頼んだ。

それで元気になって，また歩いてみる気が出てきた。もう一度S. Salvadorへ行ってみたが，今度は完全に閉まっていた。次に，S. Marcoの東側のS. Zaccariaに行ってみた。しかし，ここも入れない。ここにはGiovanni Belliniの美しい聖母子像があるらしいのに。



Academia Bridge

次に北の方に歩き，S. Giovanni e Paoloを目指した。この辺に初めて来たが，建物の壁が赤，黄，緑などかなり鮮やかな色で塗られながら，それらが剥げたり変色したりして，面白い効果を生んでいる。他と同様，水と橋と曲がりくねった道で構成的にも面白い上に，この色の組み合わせは気持ちのよい視覚効果となっている。天気がよければもっと楽しめたらう。

しかし，大体正しい方向へ歩きながら，目指す教会にたどり着かず，結局これまで何度も前を通っているS. Giovanni Cristomoに出たので，これのことなのかといい加減に考えて，後は諦めようとした。しかし，近くにSanta Maria dei Miracoliという教会もあるはずだが，それも見つからなかったのはおかしいと考え，地図を見直してe PaoloとCristomoは明らかに違うものだと分かった。それで引き返して，Miracoliを発見した。

これが非常に美しい教会だった。中にも入れたが，外見も内部も大理石の色と輝きを巧みに使った美しいデザインである。中はシンプルで，ごてごてとした絵があまりないのもかえってよい。

で、ここからe Paoloまで真直ぐのはずが、見つからない。周囲の道と地図との照合がもうまくできない。2時半になったので諦めた。

この間、ところどころでヴェネチア・グラスの安い化粧水入れ、地元製作のVivaldiのCD、仮面を買った。ホテルに戻ったが、まだカードはダメだった。案内してもらって近くのATMで現金をおろして支払った。

それからSanta Lucia駅まで歩いて出た。途中で少し西にずれて、紙名君が泊まっていたはずのSoffitel Hotelのところを通った。Barnabaより高級そうだが、会場まで遠いし、Barnabaは13室ということだが、こじんまりしたよいホテルだった。従業員もみな対応がよかった。

ヴェニスで観た絵についての感想を書き加えておく。これまでもルーブルやロンドンのナショナル・ギャラリーやミラノやフィレンツェで、ヴェロネーゼやティントレットを多く見ている。どちらも多分工房で大きな作品を大量に生産しているので、あまり興味を惹かれなかった。ヴェニスにはもちろん、これまでと比にならないくらい両者の作品がある。ティツィアーノがあれだけ偉大だと、その後はこういう方向にでも行くしかないのか、という感想がある。

一方で、ロンドンあたりからすでにそう感じていたが、今回さらにヴェロネーゼにはなかなかいいところがあると思うようになった。とくに色彩が美しい。女性が官能的である。それに比べて、ティントレットの色はなぜあのようにどす黒いのか。使っている絵具による経年変化の違いがあるのか。やはりそうではなくて、色彩感覚の違いだろう。ティントレットの人物の大げさな身体のよじり方も鼻につき、その点ヴェロネーゼはまだ自然である。ということで、ティントレットはますます嫌いになってきた。

帰りのユーロスターの前の席二人が、ロシア人の女性だった。年齢は30代ぐらい。20代後半かもしれない。ヴェニスに旅行に来たという。ミラノで1泊して翌日のモスクワ行きの飛行機に乗るというが、家はさらに遠くのシベリアだという。それ以上あまり詮索はしなかった。ただ、ぼくは大学でロシア語を勉強したが、全然身に付かなかったという話はした。なんかしゃべってみてと言われて、とっさに出なかったが、せめて挨拶言葉ぐらい言えばよかったと後で思った。

1/21 (水)

帰ってきてから、月、火、水とよく晴れている。米国から戻ってきたCarloがN.Y.は異常な寒さ、 -30° か -40° とか。しかも華氏で、と言っていた。それに比べればこちらは穏やかだ。今日も予想は零下と言っていたが、それは多分明け方の最低気温で、歩くとポカポカ暖かい。

夕べはTurandotを観に行った。一度この新オペラ座に行っているのので、Duomoからバスに乗るのも、帰りのバスで地下鉄の駅に出るのもスムーズである。

このTurandotは浅利慶太が演出していて、衣装や照明も日本人が担当している。もっとも中国人が見たら、この間のMadama Butterflyの時感じたような違和感を持つだろう。衣装にしても、第2幕で出てくる3つの大きな土像がアフリカの（とくに鼻の形）なことも、城の壁の装飾や謎の解で使われる文字が、篆書以降のものではなく、象形文字の世界であることも。しかし、この間のモーゼと違っていわばおとぎ話の世界で、単純に楽しめた。この間は女声の主役の方がよく感じられたが、これは男声の主役Calaf (Nicola Martinucci)とその父親 Timur 役の声は素晴らしかった。Liu 役と Turandot 役の声は、

ちょっとくせがあってスカッと抜けない感じがしたが、どちらも風貌、容姿が役柄にぴったりで、そういう意味ではよかった。指揮者は R. Muty ではなく、Carlo Rizzi であるが、オーケストラは相変わらずよい。

しかし、おとぎ話とはいうものの、7000年の眠りの中国というような歌詞があって、このリブレットが書かれた時代、あるいは上演された時代、多分清末を思うと、やはりある種の政治性も感じる。さらにTurandotの存在はフェミニストにつながるものかもしれないという感想も持った。

1/23 (金)

大学近くのGSでアサリを買ったが、これが失敗だった。アパートに帰って袋を開けたら、嫌な臭いがする。相当傷んでいるのである。この前、PAMで買ったときは新鮮だったが、これはかなり質が悪い。しかも1つ1つが小さく、そして全体の量が多い。€9近くしているので、安くはない。量は1kg近くあるのだ。それでも何とかワイン蒸しにして食べたが、半分は死んでいた。それでもまだ2/3ぐらい残っている。

1/24 (土)

昨日のアサリは捨てればよかったかもしれないが、シャクなので昼はスパゲッティ・ボンゴレを作り、夜はPAMでエビとイカを買って、それと一緒にトマトと煮て食べた。

午後、しばらくして陽が差してきたので3時半ごろ出かけた。例によって地下鉄でDuomoに行った。昨日だったか、大学の近くでIl Nudoというような美術展のポスターを見て、場所はどこか確かめなかったが、Palazzo Realeあたりかと思ってあまり期待せずにでかけ

たものである。王宮の出し物は前見た時と変わっていなかった。ヌードの方は、何とボローニャの美術館の催しである。それで、Castello Sforzescoの方に歩き、城の手前を左の方向に行った。S. Maria delle Grazie教会にまだ行っていないので、それが見つかるかと大体の見当で歩いたものである。しかし、案内書も地図も持って来なかったもので、よく分からない。最初はCadornaの駅すら分からずウロウロし、その中でBoggiというミラノの男性洋品専門店が目にとまった。今、クリスマス明けでどの店も3割、5割のバーゲンをしているが、それもあってシャツ1枚とセーター1枚を買った。

それからCadornaの駅を見つけ、近くで前から一度買ってみたくて思っていた菓子パンを、ケーキ屋で買った。教会はこの近くのはずだが、方向が分からないので諦め、地下鉄でLoretoに出、例によってPAMで買い物をして帰った。

1/25 (日)

先週は毎日勤勉に大学に通った。Carloは忙しいらしく、ほとんど顔を合わせず、自分はおっぱらEvolutionの本の原稿の改訂に時間を使い、大体終わった。

一度、Alfonso Fugettaが顔を出した。ぼくのいる部屋は昔、Alfonsoがいた部屋らしく、まだ彼の名札が付いている。Mauro Pezzeのところには2/12に行き行ってセミナーをすることが決まっているが、Carloが連絡を取ってくれた。L'AquilaのPaola Inveradiからメールが来て、ぜひ来てくれとのこと、2/16の週に行くことにした。ついでにローマに2-3日行ってこようかと思う。一方、ぼく自身がメールを出したAntonia Bertolinoからも返事が来て、やはり2/16の週はどうかというので、どうしたものか、調整しなければならない。こちらはピサである。

岩波の川原さんがもたもたして、いまだにゲラ（「ソフトウェア工学の基礎」）も来ないので、吉田さんにメールを出したらすぐに返事があり、3月出版の予定で進んでいるという。そしてすぐに川原さんからも連絡があり、宅配便で前半を1/26着、後半もそのあとすぐに送るので、大至急校正して戻してほしいという。

というわけでちょっと忙しくなってきた。妻木さんのREへの投稿論文や佐藤君の修論も見なければならないが、前者はとくに英語がひどいので、半分直して戻しているところで時間切れとなった。

今日は朝からよい天気である。珍しく寝坊した。6時半頃目が覚めたが、まだ早いと無理して寝たら、次に目が覚めたのが8:40頃だった。

久しぶりに家に電話した。天気がよいので、昼前に出かけた。今日は直接Cadornaへ行き、S. Maria della Grazieに行ってみた。着いたときは12時を回っていたが、まだミサの最中だった。それであまり見て回るわけにもいかず、入口付近を見ただけで外に出た。「最後の晚餐」はもちろん売り切れである。

Magenta通りを戻ると Museo Diocesano, Christri di Sant' Eustorgioというのが目に入った。立派な中庭を持つ建物で、Credito Valtellineseという銀行か、とにかく金融機関が持っている建物らしいが、そこに博物館があり、古い聖書を展示している。Opera e Lettori di Agostina Mostra と題しているが、説明が皆イタリア語ばかりなのでよく分かったとは言えない。10世紀のものからあるので手書きに違いないが、まるで活字のように見える。ロンドンでもフランドルの聖書の挿絵展をRoyal Academy of Artsで見ているが(11/30)、同じように美しい挿絵がある。ただ、絵というより図案のようなものが多い。いずれにせよ S. Agostinoに因んだ本が集められているらしい。ミラノにとって、S. AmbrogioとS. Agositinoは特別の聖人なのである。

それからGalleriaに行って、RicordiというCDショップに入った。この前はよく通って、通りにマリア・カラスのポスターやCDを置いたブースを作っているのを見、そこからカラスの録音を流しているのを聞いたが、店に入るのは初めてである。とにかく、オペラやクラシックの作品が充実している。この間、ヴェニスでヴィヴァルディを1枚買ったので、すこしまとめて買ってみようかと思った。でまず、Trevor PinnockのVivaldi Concertosという5枚組が€40と安かったので、イタリアに来てT. Pinnockを買うなんてと思いながら買った。それで帰ろうとしたら、入口付近にその手のboxが並んでいて、Vivaldi Editionというイタリアのかなり古い録音を集めたCD19枚組が何と€90だったので、それも買ってしまった。帰って調べたら、両方で3枚は曲が共通していた。しかし演奏も録音も違うからムダではない。しかもヴェニスで買ったチェロ協奏曲は、どちらにも収録されていない。

それからSan Biblicaまで歩き、ブエノスアイレス大通りでも見たZaraという洋品店や、昨日見たBoggiの本店やUpimというスーパーを覗いた。すでに2時になり、昼飯時である。それに尿意も催してきた。どうせなら「歩き方」に載っていて、Carloもよいと言っていたMalavogliaを目指した。しかし、いい加減な地図の見方で歩いたものだから、自然史博物館の手前で左に曲がってしまい、Piazza Cavourというところまで行ってしまった。そこで地図をよく眺め、目的地はGiardini Pubbliciの向こう側であることを確かめ、引き返さざるをえないと分かった。そこで公園の中を歩いて戻ったが、公園にトイレらしいものを



Milano Galleria

見かけなかった。ようやくレストランに着いたら、この間のロスが大きく、もう昼の時間はおしまいだという。がっかりした。隣にもよさそうなレストランがあったので入ったが、同じだった。2時半までらしい。

結局こういうところには入りたくないと思っていたCiaoに入って、€4.60のピザセットを食べた。量が多い。しかし、あまり旨いとはいえない。それを、ほとんどみな食べた。それから同じガイドブックで見たEnoteca Cottiを探しに歩いて行った。Porta Nuovoの近くである。だいぶ苦労して見つけたが、日曜なので閉まっていた。近くのMoscova駅から地下鉄でアパートに戻った。

1/26 (月)

初めて雪が降った。朝、傘を持って出るのを忘れたが、どんよりした空だった。Piolaに着いたら、ちらほら落ちてきた。昼頃はかなり降っているように見えたが、積もることもなく、午後3時頃には止んだ。

岩波から昼前に来るはずのFedexが3時になっても着かなかったが、秘書のAlessandraに言づけて、昼飯を抜いたし雪も止んだので、早めに帰った。

1/27 (火)

岩波からゲラが届いた。7章までで約100ページである。2/2までに戻せという。

Paola Inveradiのところには、2/2の週に行くことになった。その翌週はPezzeのところ、その翌週にはAntonia Bertolinoのところに行くとして、かなり予定が詰まってきた。

今日はEvolutionの本の原稿の改訂版を完成し、Juan Ramilに送った。また佐藤君の修論へのコメントをかなり詳しく書いて送った。

1/29 (木)

7章までの校正を終えて、Alessandraに頼んでFedexで送ってもらった。また、前書きを書いてメールで川原さんに送った。

Carloと一緒にオペラに行かないかと誘ってくれた。直接会場に行つて券を買える可能性は十分高いという。奥さんが車で迎えに来るので、それで一緒に行こうということになった。

しかし、Carloは実に忙しく、具体的な手はずが定まらないうちに夕方になり、Carloがようやく来て、夕食は奥さんが作るサンドイッチか何かを車の中で食べることにするが、ちゃんと食事をしたければ向こうで会うことにしようか、と言うので、ぼくはいったんアパートに帰った。あまり時間がないのでラーメンを作って食べ、7:25ぐらいにはアパートを出た。そしてCaiazzoの交差点でタクシーを探したが全然来ないので、Buenos Aires通りを目指した。結果的にはこれが失敗だった。このとき、駅に行けばよかった。しかし、こちらでタクシーをめったに使わないので、事情がよく分からない。大通りに行けば空車が来ると思ったが、ちっとも来ない。しかもごくたまに空車が来て手を振っても、停まってくれない。何かプロトコルがあるのか、タクシースタンドらしいものも探してみるが目につかない。

Loretoは大きな広場だから、そこに行けばと思って行ってみたが、ここでも同じだった。ここに至って、もう8時の開演時間までに劇場に着くことはほぼ絶望となったが、とにかくタクシーを捕まえようと走って（ここまでも結構走っているが）、中央駅まで行った。タクシー乗り場には1組しか待っていない。日本人女性3人の旅行客

で、しかもすでにタクシーに乗り込むところである。これならすぐに乗れそうだったと思うが、先の3人の日本人女性の荷物が多いのには驚いた。タクシーの運転手も嫌な顔をせず、それらの数が多いだけでなく一つ一つが重そうな荷物を、丁寧に車に載せていた。しかし、時間がかかる。

次のタクシーが来て、新しいオペラ座というと要領を得ず、スカラ座なら駅の向こうのタクシーに乗れと言う。どういうことかと思っていたら、また次のタクシーが来て、女性ドライバーですぐに理解してくれた。走り始めた時はすでに、7:54。

道はそれほど混んでいない。途中で彼女が多分、A che ora comincia lo spettacolo? というようなことを聞いた。このspettacoloにだけ反応して、Gianni Schicchiとかとんちんかんなことを答えてから、a che oraと言ったことが思い出されて、あわててOttoなどと答えた。ぼくのイタリア語も進んでいない。

今日の出しものは、A. Zemlinskyの"Eine Florentinische Tragödie"とPucciniのGianni Schicchiという2つの1幕劇を並べた珍しいプログラムである。Zemlinskyは名前すら知らず、ジャンニスキッキは「私のお父さん」の歌だけが有名だが、オペラ全体はTVでも見たことがない。しかし、どちらもフィレンツェの話、という意図のプログラムのようだ。

車は順調で、8:05に会場に着いた。しかし、外で待ち合わせる約束のCarloの姿は見えない。それどころか、ほとんど誰もいない。考えてみれば当たり前で、上演が始まればみんな中に入る。途中からは入れないから、時間になったら入らざるをえない。

入口の女性達に、友達と待ち合わせをしているが、言づけはないかと聞いた（英語で。まだイタリア語はとてもそこまでいっていな

い)。彼女たちは互いにゴチャゴチャ相談していて、そのうちにぼくに切符を1枚くれた。よく分からないので聞いていたら、英語のよく分かる中年の女性が来て、あなたの友達はあなたのための切符を買わなかったが、これは余っているもので、ただであげる、ただ公演が始まっているから、会場には入れない。間のホールのTV画面で見ることができるという。

それで、とにかくホールに入って画面を見ることにした。この時点ではGianni Schicchiでない方の出しものを知らなかったが、ドイツ語の歌詞で、男2人、女1人の3人だけの登場人物によるオペラが始まっている。舞台は四角な段ボールのような白い箱を積み重ねた、シンプルであるがかなり大きさを感じさせるものである。音楽はワーグナー風だと思った。

やはり遅れた人が、全部で10人ぐらい、見るかボヤっとして待っていた。舞台の方のストーリーはさっぱり分からない。深刻な話らしい。最後に年上の方の男が若い男を絞め殺して終わる。1時間以上経っていた。

休憩になって、Carloと奥さんに会えた。謝ったが、ひとのよいCarloは気にしていないようだった。ぼくが手に入れた切符も、Carloが話をつけておいてくれものらしかった。よく見ると、この席は前から2番目の中央で、€186もするところである。なんだか遅れたおかげで、ずいぶん得をした。

Gianni SchicchiはPucciniらしからぬ軽い喜劇で、しかし音楽はとてもよい。主役はLeo Nucciで、さすがに力強い声で演技もうまい。舞台も正統的で美しく、大いに楽しめた。

終演後のカーテンコールの際に、日本人らしい若い男が、フラッシュをたいて何度も写真を撮っていたのにはあきれた。しかも、舞

台に近づいて、フラッシュを光らせる。しかし、カメラマンではないのは明らかだった。すべて終わってみな席を立ててぞろぞろ歩き始めた時、老婦人がしゃべっている言葉で、fotografie Giapponeseというのが聞き取れた。恥ずかしくなった。Carloに最後に写真を撮っていた男は日本人のようだったと言ったら、彼はlikelyというようなことを言った。日本人がよくそういうことをする、という意味だろうか。しかし、その後、ここの音楽学校の声楽部門にも、日本人の学生がたくさんいるというような話を続けてしたので、彼の性格からしても、マナーの悪いのは日本人、という意味ではなさそうだが。

帰りはCarloにアパートまで送ってもらった。

1/30 (金)

今日は素晴らしい天気である。

午前中、10時半過ぎに、昨日Carloから聞いていたように、日本語を勉強していて日本に留学したいという学生が、お父さんと一緒に来た。お父さんもPolitecnicoの教授でOptoelectronicsが専門だという。10年日本語を勉強しているというだけあって会話は問題ない。お父さんは日本語ができないからというので席を外し、2人で30分ぐらい話した。Zaraga Rudovicoという名前の好青年である。この間のMarioといい、感じがよい。本人は大学の3年生、イタリアは3年制だから最終学年で、数学科、数値解析に興味があるという。日本に短期留学したいという。なんで日本語を勉強してきたのかと聞いたら、お母さんが若い頃、源氏物語を読んで感激し、それで日本語を勉強し、子供のZaragaにも教えた。それで興味を持ったZaragaは10歳の時から本格的に習い始め、10年になるという。数値解析の専門家を東大、あるいはそれ以外で探して、連絡することにした。

後は、ローマのホテルを予約した。Carloが奨めてくれたところはどこも高級なだけでなく、すでに満室だったので、インターネットで、それよりは安い€100/日のところを取った。

本の次のゲラはまだ岩波から来ないどころか、予定についての連絡すらない。やはり3月の出版は無理なのではないだろうか。

2時前には大学を出た。まずアパートに戻り、なんとまだ部屋の掃除ができていないこともあって、そそくさとまたラーメンを食べ、外に出た。まず駅へ行ってローマ行きの切符を買った。これが思いのほか大変だった。これまでフィレンツェ行き、クレモナ行き、ヴェネチア行きと3回切符を買っている。そのうち2回はESである。それなのに同じ窓口で並んで、しかも結構長い列を待ってやっと自分の番になったら、ここではないという。ESTつまり東の窓口に行けと言ってそっちの方向を指した。間の通路を挟んで東側にやはり窓口が4つくらいあるので、そこだろうと思って、そこもかなりの列ができていたのを並んで、自分の番になったらやはりここではないという。51番から55番というのであるが、それはこれまで買ったことのない場所である。どうやらこの間に、窓口の配置を変えたいらしい。さらに、52番だったか53番だったかに並んでいると、整理券を取れという。それがどこにあるか分からずウロウロした挙句、もう一度どこかとかかなり頭にきながら聞くと、入り口のドアのところだと言う。確かにあった。もらうと14番である。そして電光掲示で今受け付けている番号が分かったが、それは1番とか2番であった。どうりでベンチに座って待っている人間がたくさんいたわけだ。

そこで本を読みふけていると、いつの間にか51番の窓口で、14番と15番を受け付けている。ぼくがすぐに行かなかったもので、15番が先に受け付けられてしまったらしい。それを待っていると、しばらくして係の男が席を立てて行ってしまった。そして15番の客がぼく

に話しかけてきて、ぼくが14番だと知ると、端末が故障したと教えてくれた。まるで喜劇である。そこで52番か53番に割り込もうとウロウロしたが、前の人の処理がなかなか終わらない。そのうちに、51番の機械が直ったらしいので待っていたら、気がついた係が52番でぼくの処理をすぐやるように措置してくれた。受け付けてもらってからは実にスムーズに切符を買えた。

それからS. Maria della Grazieに行った。ダヴィンチの「最後の晚餐」の当日券は、実に簡単に買えた。16:15入場の券である。そのとき16:00だったので、先に教会を見た。外も美しいが中も美しい。基本的に、白壁に明るい茶と薄めの黒を中心とした色で、装飾的な図案が描かれている。身廊部分の柱から天井にかけては、かなり細密な模様である。祭壇付近になると大柄の図案になって、フィレンツェのS. Mariaの外側をちょっと思わせる。あれほど派手ではないが、しかし明るい色彩である。やはりビザンツ風なのであろうか。

「最後の晚餐」は米澤が言うように相当修復の手が入っているが、思ったほど色鮮やかに塗ってしまうというものではなかった。しかし、とくに人物はそれぞれ明確になっている。とくに、イエス、ヨハネ、ペテロ、ビリポあたりは背景との境界を明確にしているため、ちょっと浮いて見える。ヨハネやペテロは浮いた姿が平面的に見えるため、切り抜いた絵を貼り付けたように見える。しかし、この絵の構図、個々の人物の描き分けは、さすがに感服させられる。

今日は、この間の日曜日に果たさなかったことをやるつもりで、次はMoscovaへ出て、Enoteca Cottiへ行った。確かにワインが充実している。小川さんがいいというGajaのワインは皆、3桁の値段だったので諦め、トスカーナの白とPiemonteの赤の手ごろな値段のものを買った。Moscova駅の近くのスーパーで、卵、ハム、ビールを買って帰った

1/31 (土)

1月も終わる。アパートの2か月目の支払いをした。一度だけ出したクリーニングが€13と安いので、感激した。

昼前、Duomoまで赴き、Libreria Mondadoriという本屋でローマの英語のガイドブックを買った。少しは予習しないとイケない。それからBoggi本店に行き、紺のコールテンの上着と茶のズボンを買った。30%ぐらいの値引きになっているが、いずれももともと安い。Boggiはスフォルツァ城近くの店でシャツとセーターを買って気に入った。高級ではないが、純粹の若者向けでもなく、ちょっと洒落ている。

結局、先週の週末予習したことを、昨日今日実行しているようなものだが、その後はまた歩いて、Porta Veneziaまで行き、先週食べ損ねたMalavogliaに行った。メニューを子細に見たが、けっきょくもっとも安易なランチコース menu turistico (ツーリスト用) にした。この表示はよく見るので、ツーリスト用という意味より、お買い得用の定番昼食セットという感じなのかもしれない。第一皿、第二皿、付け合わせが選べるが、スパゲッティ、Escalope, サラダを選んだ。ここで自分の料理の基本知識不足を知らされた。Escalopeというのは貝柱ではないかと思っていた。確かにもとはホタテ貝あるいはその貝柱という意味だろうが、料理のescalopeといえは「子牛などの肉や白身魚の薄い切り身、またそれを使った料理」(広辞苑)というフランス語であることを改めて知った。英語の辞書を引くと、

escalop scallop [紋] 帆立貝 [料理] scallopini

escalope [料理] エスカロップ

とある。そして

scallop イタヤガイ (とくに) ホタテガイ
(ホタテガイの) 貝柱, ホタテガイの貝殻

となっている。つまり、薄切りの肉をホタテガイの貝殻に見立てたのが、語源なのだろう。

ワイン1/4とコーヒーが付いて、€15は安い。しかも、味も量もなかなかである。雨が降り出したので、食後はまっすぐに帰った。

2/1(日)

ほとんどアパートにいたが、昼、食料を買いにスーパーに出かけた。ところがPAMが閉まっている。これがまたなぜだか分からない。しかし他にもいつもの日曜より閉まっている店が多いような気がするし、露天のマーケットもやっていない。2月1日ということで、何か特別なものかもしれない。

ところがアパートに引っ越して最初に買い物をしたPuntoが、開いていた。あれ以来ここには入っていない。夕食用に肉と三つ葉のようなもの (と思ったら実はパセリだったが) などを買ったが、やはりPAMが閉まっているせいか、レジに長い行列ができていた。

後は、土曜に買ったローマのガイドブックを和辻の「イタリア古寺巡礼」やゲーテの「イタリア紀行」を引き比べて、出てくる寺や地名の場所を確認した。こういう単純作業というのは、案外時を忘れさせるものである。そして段々ローマの地理が頭に入ってくる。あまり生産的なことではないと思いつつも、楽しんだ。

2/2 (月)

今日は妙に暖かい。ヨーロッパ全体がそうらしく、ロンドンでは14℃などとTVの天気番組で言っている。しかしロンドンは多分雨だろう

が、こちらは午前中曇っていたものの、午後には晴れた。Epsilonの論文を書いてしまおうと思うが、その前に博士入試の英語問題の解答作成など雑事を片付けていてぐずぐずし、ようやく5時ごろ着手し、6時には帰った。

L'Aquila

2/4 (水)

10:00発ナポリ行きのESの車中。天気は悪くない。フィレンツェに行くときに乗ったのと同じ路線で、途中、ボローニャとフィレンツェに停まる。フィレンツェ行きの時は、最終駅がローマだったが、この汽車はナポリまで行く。ミラノを出たらすぐ、クレモナ行きの時と同様に、深い霧に包まれた。

車中では例によって、老いも若きも携帯で盛んにしゃべっている。また、それぞれによくかかってくるのだ。

3時過ぎにフィレンツェに着いた。しばらく停まって動き出したら、来た方向に戻り始めたので驚いた、誰も驚いていないから、これが正常なルートなのだろう。どこでもと来た線路と別れたのか、外を見ていても分からなかったが、前には通らなかった長いトンネルを通ったので、違う線路に今いることは確かだ。

ミラノから出て霧の中を通り、霧が晴れたら天気がよくなった。しかし、フィレンツェに近づくころにはどんより曇ってきた。それがまたトンネルを何度もくぐりローマに近づいたら、上天気となった。明るくいかにも南イタリアに来たという感じがする。しかし、遠くに見える山には雪がある。1週間ぐらい前、TVの天気番組ではローマで-3°Cというのを見た。この2-3日、ミラノでも暖かいが、ヨーロッパ全体が好天気、暖かいのかもしれない。

Roma Terminiに15分以上遅れて14:45過ぎに着いた。そこから地下鉄のLinea Bに乗ってTiburtina FSに行き、そこでL'Aquila行きのバスに乗った。バスの切符売場がすぐには分からずちょっとウロウロしたが、とにかく当初予定していた15:15発のバスにぎりぎり首尾よく乗れた。バスはしばらく郊外の家庭菜園風のゴチャゴチャした畑やモダンで貧相な建物が散在するところを走る。すでに高速道路ではあるが、車が多くスピードは上がらない。

やがて郊外を抜け、野山の中を走る。山は和辻哲郎もたびたび触れているように、禿山か、灌木かせいぜい高さ数メートルの木がちょこちょこ生えているというもので、日本の山とは違う。やはり和辻が言うように、オリーブや糸杉の常緑樹もあれば、2月の今は葉をつけていない落葉樹もある。

そのうちに、山々が雪をかぶっているばかりか、道の脇にもかなり雪が残っているのを見るようになった。しかし、天気はよいので、雪がよけいに風景を明るくしている。かなり高度も上がってきたようだ。L'Aquilaに近づいたと思う5時頃は、傾いた陽を正面に浴びる雪の山々が神々しくさえ見えた。

5時過ぎに高速を降り、L'Aquilaの町に入ったようだ。すぐに停まって2-3人降りた。次に箱崎ほど大きくはないが、それを連想させるバスターミナルに着いた。一瞬ここで降りるのかもしれないと思ったが、Paolaの指示は、最後の停留所で降りろということである。そこがPiazza Duomoに近く、ホテルはHotel Duomoという。このターミナルがそのような中心地に近いとはとても見えない。それに、ほとんどここでは人が降りず、逆にたくさん乗ってきた。

やがてバスが走りだし、高速に乗ったのでこれはおかしいと気づいた。隣の女性に聞いたが、彼女は英語をしゃべれず、こちらのイタリア語は役に立つ水準にない。とにかくさっきの停留所がL'Aquila

で、それを過ぎてしまったらしい。そのうち、右斜め前の席の男性が英語で話してきてくれて、はっきりした。このバスはTerma行きである。彼が次の停留所で降りるので、一緒に降りて逆向きのバスに乗って戻ればよいということである。しかし、もうバスがないかもしれないと言ったら、隣の女性やその連れのお母さんか年配の女性がバスの時刻表を出して、まだあることを確かめてくれた。件の男性はさらに親切にも、運転手のところまで行って確認してくれ、大丈夫だという。

バスはどんどん山道を下る。L'Aquilaは峠のようなところにある町らしい。次の停留所までの道のりがなんだかすごく長く感じられる。しかし、遠くに見える山が今や夕焼けから夕映えになって赤く照らされ、実に美しい。

30分走って次の何とかいうところに着いた。件の男性以外に降りる人がかなりいた。で彼がまた確認してくれて、L'Aquila行きはここに5分後に来る。この場所で待っていればいいと言ってくれた。5分で来るとはまだつきがある。彼は5-6歳ぐらいの男の子を連れていて、その子がアメリカから来たのかと聞く。それは分かったのでGyaponeseだと言った。その前にお父さんと握手したので、人懐こいその子も手を伸ばしてきて、ぼくの手をしきりに握った。

確かに5分後にバスが来て、一安心。L'Aquilaの町に着いてバスが停まり、何人も降りる。さっきのターミナルと場所が違うので、念のため"L'Aquila?"と近くの男に聞いたら、"Si"と言うので、ぼくも続けて降りた。また行き過ぎてはいけない。

しかし、どうも様子が違う。降りた5-6人が歩いていく方向について行った。彼らは駐車場に入り、それぞれの車に乗り込む。その最後尾についていたので、一番最後の二人にPiazza Duomoはどこかとたどたどしく聞いたら、英語をしゃべるかと向こうから聞いてくれ

た．それでここは町の外れだと言い，車に乗せてくれてしばらく下り坂を走り，ようやくさっきのターミナルまで来て，そこで降ろしてくれた．親切な人に続けて会って，実に助かった．

ターミナルから広場まではPaolaのメールでも地下道でつながっていると書いてあったが，この地下道と言うのが長い．600mぐらいある．ようやく広場に出，また広場に面しているはずのホテルを見つけるのにちょっと手間取ったりして，ようやく7時にチェックインできた．やれやれである．Paolaとはホテルで8時に会うことになっているので，間に合ってよかった．

8時過ぎにPaolaが数学科の何とかいう豪快な先生とホテルに来て，3人でIl Drappoという地元料理のレストランに食事に行った．Paola InveradiとはICSEのPCなどで一緒になったことはあったが，これまでとくに親しく口をきいたことはなかった．今回非常によく世話をやいてくれただけでなく，神経質そうだと思っていた見かけに反して，気さくで明るいことが分かった．

ここの料理は，正直なところあまり感心しなかった．前菜はいろいろな種類のサラミ，ハム，チーズの盛り合わせを取ってくれたが，慣れないせいかわかりが分からなかった．次にぼくと数学の先生は，portini入りの何とかいう地元の Pasta（スパゲッティのような長くて細い Pasta だが，スパゲッティと違って断面が四角い）を食べたが，Pasta はよいものの，せっかくのポルチニに塩気がなく，何だか水っぽくて弾力も足りず，あまりいいと思えなかった．次にラムをローストしたのを頼んだが，カリカリになっていて一部はかなり黒焦げであり，こういう料理法なのだろうが，特別よいとも思えなかった．また，何とかいう地元名産の葉菜類の煮たのを付け合わせに頼んだが，かなり苦みが強くて，またすでにずいぶん腹

いっぱいになっていたもので、だいぶ残した。総じて、ご馳走してもらってこう言うては何だが、田舎料理という感じである。

しかし、L'Aquilaの町とか、L'Aquilaの大学とか、Paolaのこれまでの経歴とか、いろいろ分かった。とにかくイタリア人らしく、二人ともよくしゃべる。



Paola Inveradi

2/5 (木)

朝から素晴らしい天気である。この町は四方を高い山で囲まれているが、雪をかぶったそれらの山が朝の光に照り輝いている。あまりの美しさに町をあちこち歩いて山並みを眺め、Paolaとの9時30分の約束に5分近く遅刻した。彼女はちょっと早めに来てぼくを泉と教会の2か所に案内しようと思っていたらしい。泉はやめにして、教会に連れて行ってくれた。Basilica di Santa Maria di Collemaggioで、長方形のロマネスク様式を保存した教会である。中も修復され、ガランとしてはいるが床の石の模様とか、身廊の石の柱とかは見事である。

L'Aquilaの大学の計算機科学、数学、医学があるキャンパスは、市街からちょっと離れたところにある。最初にPaolaが現在の学科の状況を話してくれた。そして彼女が11時から会議に出ている間、Henry Mucciniがテストイング、Alfonso PierantonioがWeb Engineering、Vittorio CortellessaがNFRのとくにperformanceの研究状況の話をしてくれた。昼はPaolaが、医学部の何とかいう教授で日本との行き来が多く、2週間後には東北大に行くという解剖学の先生と、学部主任らしい先生を誘って、4人で食事した。このレストランも場所はよく感

じもよかったが、詰めもの入りのパスタやスープにはとくに感心しなかった。

戻ってすぐ3時過ぎから、ぼくのセミナー。Milanoでしゃべった時より、こちらもうまくしゃべり、聴衆も多くまた熱心だった。終わってBenedetto Intrigilaといういかにも学者らしい年配教授と彼のグループと、少し話をした。彼らはmodel checkingやシナリオベースREのXMLによる形式記述言語などの研究をしている。もともとBenedettoは λ calculusをやっていたとかで、数学は強いらしい。ぼくの話はずいぶん褒めてくれた。

しかし、彼らとの話し合いを早々に切り上げ、Vittorioがローマで会議があるのでぼくをついでに送ってくれるというのに便乗し、5時過ぎに出てローマの地下鉄の駅まで送ってもらった。もう一人、Ph.Dの学生も一緒だった。VittorioはWest Virginia大学に2年いたとかで、車の中でずいぶんよくしゃべった。

地下鉄の駅付近で大渋滞になり、彼らの会議に着く時間を遅らせて、悪いことをした。ぼくはそこから地下鉄でRepubblicaまで行き、そこから迷わずVia Nazionaleを歩いて、Via IV NovembreにあるホテルPace Helveziaに無事チェックインした。そのあと、近くのAbruzziという安めのレストランに行ったが、そこで食べたスープ入りのパスタとAbruzzi流のescalope（例の）はなかなかよかった。塩気を利かせていて上品とはいえないが、いい味を出している。安いワインも結構旨い。

なお、Paolaは夕食、昼食をおごってくれたばかりか、ホテル代も払ってくれ、さらに講演料として、少なくともすまないと言いながら€100をくれた。なんだか悪いみたいだ。

Roma

2/6 (金)

晴れてはいないが薄曇りで暖かい。

このホテルはP. Veneziaに近く非常に便利なところにある。建物は構えもなかなか立派だし、部屋はシングルだが悪くはない。とくに浴室が豪華で、ベッドのある部屋と同じ広さがあり、大理石風のタイルが床と壁一面に敷き詰められて、ピカピカしている。しかし、その浴槽に栓がない。それを朝文句を言ったら、夜には栓がしてあったが、今度は栓を開けられず、水を流すことができない。その開閉機構が壊れているので、栓がしてなかったのだ。年寄りの頑固そうなオヤジが主にフロントにいて、愛想が悪い。それと比べるとヴェネチアのホテルはどの従業員も実に感じがよかった。

さてまず、平日しか開いていないというファルネーゼ宮を目指した。ゲートの本に何度も出てくるし、トスカの第2幕の舞台がここだということで、行こうと思っているリストに入っている。地図をあらかじめ確かめて、歩いて行った。南西方向にPonte Sistoを目指して歩き、その橋を渡ってからは、川と並行したV. della Lungaraを北上する。ファルネーゼ宮に着いたが、受付係の男が電話で長話をしてなかなか切符を売ってくれない。しかし、やがて中に入れた。他に若い人たちがたくさん来ていたが、彼らはこの建物で何かの集まりがあって来ていたようだった。



Piazza Venezia

1階のLoggia di Psicheという部屋に、プシケの話を描いたフレスコ画が壁一杯と天井にある。もとはラファエロのデザインによるというが、それらしいところはほんの少ししかない。全体にあまり出来がよくないが、美しく描かれた女がところどころにある。色は明るい。これを描かせた金持ちのAgostino Chigiというのが、自分や結婚した若い妻をモデルに仕立てたらしく、いい気なものである。3階にまた壁画のある大きな部屋があり、そこにRaphaelのGalateaがあったらしいが、なぜか記憶に残っていない。

ファルネーゼ宮から北に歩いて、S. Pietroを目指した。途中で左手のGianicoloの丘に登ってその上の道を行かれないかと一度試みたが、行き止まりになって断念した。

ヴァチカン広場の左横に出た。行列に並び聖ピエトロに入った。ここは多分1980年に広瀬健さんと来ている。しかし、今回これまでにたくさんの教会を見てきているので、これがそれらを規模にしても豪華さにしても、はるかに上回るという意図で造られていることが、よく分かる。ここは柱廊というものではなく、つまり柱でなくアーチが壁になっている。その壁という壁、そしてもちろん天井に、贅沢を尽くした装飾がなされている。しきりにpompousという言葉が連想された。

フィレンツェの時と違って、今度のホテルは日本人を見かけない。しかしもちろん、ここヴァチカンに来ると、日本人、中国人、韓国人、米国人、ドイツ人、フランス人など外国人観光客がたくさんいる。切符を買うために並んだとき、前に中国人の5人組がいたが、ガイド1人を除いて男女ともスポーツ・ジャージーの上下という恰好なのに驚いた。それと別の中国人グループの若い女性が、開いている懺悔室に入り込んで外から写真を撮ってもらっていて、しかもフラッシュを光らせていたのにも驚いたが。

中にmuseumというのがあって、€5も払って入ったのは失敗だった。予感があったが、法皇などが使った金銀細工の聖器などが並んでいるものである。

次にCupola (dome) に登った。€5でエレベーターで登れる。真下に人々が動いているのが見える。ゲートも登ったと書いているが、もちろん歩いて登ったわけである。そこからさらに歩いて、ドームのてっぺんまで行ける。それだけでも相当に足が疲れる。スカッと晴れてはいないが、眺めはよい。

それからヴァチカン美術館に向かった。結構遠い。しかし入り口の安全検査はフィレンツェのPalazzo Vecchioと比べればはるかに効率がよく、すぐ入れた。まず、システィナ礼拝堂を目指したが、そこに行くまでに、ローマ時代の彫刻の並んだホール、天井が派手で、両脇では絵葉書を売ったり中の観ものを説明したりしているホール、たくさんのタペストリーが並んだホール、を通り、それから壁画が描かれた部屋をいくつか通る。その中にラファエロのアテネの聖堂がある。下絵をミラノで見ているが、同じ大きさのようだ。これも修復のせいの色がやけに明るい。ちょっと軽い感じすらする。

システィナの礼拝堂は、ソレントのICSEのときだから1995年だろうか、修復後のミケランジェロの絵を一度見たのだが、その時はこのようにヴァチカン美術館に組み込まれていなくて、それだけを見たはずである。さすがにここは人が多い。

それを見たら1時頃になったので、ひとまずは軽食を摂って休もうと、カフェテリアに入りビザとビールを取った。ビールのせいで食後椅子で少しウトウトした。それで元気を回復し、さあ絵や彫刻を見ようとカフェテリアを出ると、もう展示は終わりで出て行けという。なんとこの冬の期間は、開館時間が8:45-12:45なのである。これは当てが外れた。

仕方がないので、歩いてS. Angelo城へ行った。ここは最初にヴァチカンに来た時に寄りたいたと思ったが、時間がなかったところである。トスカの第3幕の舞台はここだという。城塞であり牢獄であった建物らしく、かなりいかつい。円錐台形で、中に入ると螺旋状の通路を登っていく。カラヴァッジョ展というのやっている。すべての作品は多分デジタル複写で、それをパネルに焼き付けて、中から照明を当てている。本物を集めたらとてもこうはいかないような多くの作品、カラヴァッジョの作品数は多くないはずだから、そのほとんどすべてかもしれない作品を、多分大きさは現物大で、一部の作品は別に部分を引き伸ばして展示しており、作品ごとに本物がどこにあるかを示す表示が添えられている。最初は本物でないのなんだと思っていたが、段々面白くなった。画集で見るよりよほどよいに違いない。しかし、つくづくカラヴァッジョというのは天才だと思う。

ここも屋上に登れる。その上にS. Angeloの大きな像がある。見晴らしはよい。

さすがに疲れたので、帰りはバスに乗ろうと思った。近くに旅行案内所があったので、バスの切符はバスで買えるか聞いたら、やはりタバコ屋で買うのだと言う。1回75セント、一日券などもある。その近くにバス停留所があって、ひっきりなしにバスが来る。タバコ屋はなくて、自動販売機がある。確かに1回を指定することで75セントと出たと思う。それで80



セント入れたが切符が出てこない。いろいろボタンを押している

Sant'Angelo

うちに、戻ってきた。きっちりと

金額を入れなければいけないのかと、5セントを入れてみると、受け付けられない。何度やってもダメで、その間に何台ものバスが通過した。諦めて来たバスの運転手に切符を買えないかと聞くと、マシンで買えという。壊れているようだと言うと、肩をすくめるだけである。

もう一度、今度は€1コインを入れてみたら、何と切符が出てきた。釣りは出てこない。

P. Veneziaに戻った。昨夜ホテルから食事に外に出た時に気づき、今朝も前を通ったValdese教会でコンサート形式のオペラがあるのを思い出し、今日は公演日でLa Bohèmeをやるので、その切符はあるか聞いてみた。€20で買えた。開始は8:30である。トスカの日もあるが、残念ながら日が合わない。

まだ時間があるので、S. Andrea della Valle教会に行ってみることにした。今日はトスカの日となったが、ここはトスカの第1幕の舞台である。ゲーテの本でもこの教会のことが出てくる。もちろん、トスカのできる100年前の話である。着いたのが4:20ぐらいだったが、夕方開くのは4:30からだった。そこでCorso del Rinascimentoをブラブラ北に向かって歩いた。Palazzo della Sapienzaというのがあって、なかなか立派である。ここは1935年までローマ大学があったところという。今のキャンパスは駅の向こうである。奥にS. Ivoという教会がある。外から見ただけだが、ガイドブックによれば、ローマン・バロックでもっとも知られた建築だという。なるほどという気もする。

その先を右に曲がって、小学校の前で親が子供を迎えに来てごった返しているところを抜けたら、突然Pantheonの前に来た。まず後ろに出たので、レンガを積み上げた巨大な建築物として見えた。前に回ると写真で見慣れた石の円柱と三角の破風とドームが見える。中に入ると古代ローマを思わせるものではなく、キリスト教の世界である。修復されてきれいになっている。ラファエロの棺がある。法皇の命で墓から掘り出して収めたという。

Corso V. Emanueleに戻り、また少し西に歩いて再びS. Andrea della Valleに来た。もう5時を回っていて、教会は開いていた。相当大きな教会である。中の構造はS. Pietroとやや似ている。やはり柱らしいものがない。壮麗な装飾が円天井、壁などにある。Corso V. Emanueleに戻ると、Gesù教会があるので、これも入ってみた。これも大きな寺院である。しかし今となっては（これを書いているのは2/8でローマからの帰りの車中）内部については前の教会との区別も定かでない。



Pantheon

再びP. Veneziaに戻った。もういい加減疲れたが、教会のはしごの最後として、Ara Coeliを見ておこうかと思った。エマニュエルII世記念碑の右側に沿って歩くと左手に階段がある。見たような光景だと思ったら、ガイドブックの写真にあるPalazzo Senatorioだった。階段を上ると、両側にCapitolini美術館がある。明日はここに来ようと思っていたところである。S. Maria in Ara Coeliはその裏手であった。しかし、5:30で閉められていた。このとき、5:45ぐらいだった。

とにかくホテルに帰った。風呂の栓がしてあったので、入浴して少し疲れをほぐした。しかし、今度は栓が開かず、お湯を排水できなかった。だから栓がなかったのだ。部屋のビールを飲んだ。€2と安い。メールを見た。中谷さんがミラノ来るといふ。

オペラがあるので、早めに食事をする必要がある。7時少し前にホテルを出た。やはりガイドブックに載っていたAl Moroという店に行ってみたが、まだ時間が早く開いていなかった。その手前のQuirinoという店が開いていたので、そこに入った。この時間の客は多くないが、やはり旅行客だ。隣のテーブルの老夫婦は、夫婦ではドイツ語（もしかしたらオランダ語かもしれない。なんだかドイツ語にしては柔らかく感じた）でしゃべっているが、ご主人は店の主人かウェイター長高の老人や他のウェイターと流暢にイタリア語でしゃべっている。洒落な感じの人で、著作権の委員会で一緒になる佐野さんに感じが似ている。他にフランス語でしゃべっている若夫婦、英語でしゃべっている東洋人の若い2人の女性などがいた。

スパゲッティ・ボンゴレと仔牛のソテーを食べた。考えてみれば昨日と似たようなものを頼んでいる。悪くはないが、とくに感心もしなかった。しかし料理が早く出てきたのはありがたかった。

そのままコンサート会場の教会に行った。8:20頃着いたので、ちょうどよかった。こぢんまりとしているが、内部はきれいになっている。聴衆は150人あるいは200人ぐらいか。

演奏は弦楽四重奏にハープとピアノである。バイオリンはあまり上手くなく、時々ひどい音を出す。La Bohèmeは序曲がないから、男二人が出てきて、いきなり歌いだして始まる。思ったより歌手の声がよい。身近で聞くから、よけい迫力を感じる。主役のテノールの声はあまり好きではないが、段々調子を出してきて、そう悪くはな

いと思った。相手のバリトンはよい。そしてミミのソプラノはとてもよかった。

省略してやるのかと思ったら、そんなことはなく全4幕やり終わったのは11時に近い。しかし、レストランで飲んだハーフボトルのワインにもかかわらず、居眠りすることもなく、大変楽しめた。あまり期待していなかっただけに、一層よく思えた。どうせ旅行客向けのローマでのオペラ体験を売りにした商売かと思ったが、地元の聴衆が多いようだった。一流の下にこういうかなりの技量を持った歌手たちがたくさんいるのである。しかし、1人€20では大した収入にはなるまい。

2/7 (土)

まずヴァチカン美術館に再挑戦することにした。昨日は歩き回ったが、今日は機動力をつけるべく、まずバスの1日券(€4)を買い、またバスの路線の載っている地図を買った。もっとも、路線が載っていると云っても、とても分かりやすいとは言えない、

40番のバスに乗り、S. Pietroの前で降りた。そこから美術館までは少し距離があるが、昨日学習しているので迷うことはない。時間は9時ちょっと前である。ところがまだ美術館に着くずいぶん手前で、行列に出くわした。皆、考えることは同じで、時間に合わせて早く来ているのである。それに土曜ということもある。まあ、行列の進みは悪くなく、20分ぐらいで入れた。

まず、エジプト・ローマの彫刻をざっと見た。それから絵画館に行き、じっくり見た。この感想は書くとしたら別に書こう。もう一度Museo Pio Clementinoの方に戻って、ようやくLaocoonやBelvedereのApolloを見つけ、その他の彫刻も見た。そこで引き上げればよかったのだが、Museo Gregoriano Profaneというのを見ていないので

はないかと思い、それはシスティナ礼拝堂の近くだと思って、それを探し始めたら、大変な人込みで渋滞し、途中から出口を一生懸命探すことにしたが、それがどういうわけかなかなか見つからず、現代美術館などに入ってしまい、来た方向に順路を引き返すしかないと言われ、引き返すと、当然順路方向に歩く人とぶつかり、しかも途中で係員に逆向きはダメと言われ、それを戻ったふりをしてまた引き返し、ようやく入口に出た。そのため30分以上ロスした。

さて戻るのにバスを利用しようと思い、P. del Risorgimentoで84番だったか、P. Venezia方面に行くバスをさんざん待ったが、別の27番だったかはひっきりなしに来るのに、目当ては来ない。そこで諦めて、到着いた停留所まで戻って朝来た40番に乗ることにした。40番は巡回しているのである。ところが先に来た271番だったろうか、停留所の経路を見るとP. Veneziaとあったので、それに乗った。ところがそのバスはまずさっきのRisorgimentoまで行き（悔しいことにそこで84番が出ていくところを目にした）、さらに北上する。そのうちに右に曲がってテベレ川を渡ってくれるのではないかという期待も空しく、どんどん北に行き、客はどんどん入れ替わる。こうなったら最後まで行って戻るほかないと覚悟を決めた。結局、多分Via Antonino di Giulianoというところが終点だった。運転手が出てきて何とか言うので、まったく違うバスに乗ってしまったらしいということ、また戻るから乗っていけばいい、というようなことを言ったらしかった。それでP. Veneziaに行きたいが、このバスはどこに行くのかとたどたどしく聞くと、やはりこのバスはVeneziaに行くのである。だが方向を間違えたわけだ。それから中国人か日本人かとか、漢字の話とかいろいろ聞かれ、とても会話とは言えないが、何とかコミュニケーションが行われた。

やがてバスは逆向きに走り出し、ずっと南の橋、多分Ponte Palatinoだろうか。それを渡ってようやくP. Veneziaに着いた。これでまた30

分以上損した．とにかくCapitolino美術館に入り，まずトイレと食事をすませた．その後，じっくり見た．この感想もとりあえず棚上げにしておく．とにかく絵より彫刻の方が記憶に残っている．

次にアラコエリ教会である．ここはバシリカというのか長方形の建物で，外見は非常に古風である．内部はしかし他の教会と同様に壮麗に飾られている．とくに目立つのはシャンデリアをたくさん使って装飾している点である．アラコエリは即興詩人に出てくることを森の本ではもちろん，和辻も書いている．ゲーテでも出てくる（下，p.28）．

ここまででいい加減に疲れた．しかし，頑張っってローマ国立美術館（Museo Nazionale Romano）を見ようとバスに乗った．今度もあまりよく考えずに乗ったが，美術館はTermini駅前だったので問題なかった．

受付の男がここでも長電話していて，金を出してもなかなか処理しない．やがて電話を置いて，1階2階は自由に見られるが，3階は18:15からの券になるがそれでもよいか，と言うので，まだ4時半にもなっていないかったが，よいと言った．

とにかく和辻の本に出てくるNiobidは見た．他にもいくつか美しいアポロ像などがあった．中はすいているので，試しに3階に行ってみた．ガランとしているのに，歩き始めたら注意され，この券は18:15からと言われた．「ヴィーナスの誕生」がなかったもので，それが3階にあるのかと思ったが，3階にはモザイクなどの絵が置いてあるようだった．売店の本をいろいろ探して，「ヴィーナスの誕生」などはもう一つのローマ国立美術館のPalazzo Altempsにあることが分かった．それで18:15まで待たずに，またバスでP. Veneziaに戻った．そこからちょっとVia del Corsoを歩いてみた．Palazzo Doria Pamphliの入口を見つけ，明日はここに来ようと思った．S. Maria in Via Lata, S.

Marcello al Corsoという2つの教会を覗いた。よくこれだけたくさん教会があり，またそれぞれが手入れされているものだ。しかもこの時間は，夕方の祈りに来ている人もかなりいる。

露店の出ている横町を曲がったら，夕食で昨晚来た辺りに出た。そのままさらに歩いたら，突然トレヴィの泉に出た。昨日のパンテオンのときと同様，予想していなかった。その脇のSanti Vincenzo e Anastasio a Treviも覗いてみた。これだけ教会を見ると，どれも同じように見えてしまう。

それから勘で道を歩いたら，ちょうどホテルの前に出た。部屋に戻ると湯船の栓がまたないので，文句を言った。8時に夕食に出た。昨日入れなかったAl Moroに行ったら，今日は予約で一杯でダメだった。そこでまたガイドブックを取り出して，少し遠いがスペイン広場近くのNinoという店に行こうと歩き始めた。ところがどう間違えたのかいまだにわからない



Trevi

が，なんとPantheonに出てしまった。方向が90度狂っている。そこからまた方向を決めて歩き出した。どんどん分からないところに来る。Via del Corsoに出るはずが，それらしい道がない。とうとう川に突き当たった。橋があって向こうに巨大な建物がある。橋はUniberto Iというらしい。建物は後で分かったが，P. di Giustiziaだった。よく分からず，川から離れる方向に歩いたら，大きな広場に出た。それが，P. Novonaだった。結局，Pantheonからまた90度左回りの方向に歩いてしまったということだ。

この広場の噴水は、Fontana dei Fiumiとって有名らしい。確かに大きい。もうレストランを探す気にならず、広場にイスを並べているレストランのうちの1つに入った。戸外と言っても暖房が入っており、泉を目の前にし、そぞろ歩きの人たちを眺めながら食事するのは乙なものである。それにギター2本（1つはエレキ）と歌手のバンドがいて、アリベデルチ・ローマとか、ボラーレとか、それらしい曲を聴かせる。3軒並んでいるレストランの真ん中に何となく入ったが（多分、一番繁盛しているように見えたから）、このバンドはそこだけに向けてサービスをしているのだろう。客席にまではチップを集めに来ない。

Sea Bassのソテーとサラダを頼んだが、魚料理は高いわりに大したことなかった。かえって単純なサラダに満足した。

2/8（日）

今日は朝から素晴らしく晴れた。昨日は一日曇りで、午後ちょっと陽が射したのだが、今日は青空である。

予定通り、まずPalazzo di Quirinaleへ行った。ここは日曜の9時から12時まで開館するとガイドブックにあったので、今日の朝一番はここに決めていたのである。この広場のことはゲーテの本に何度も出てくる。サン・ピエトロを見晴らす眺めが美しい。

王宮の外見は建築として凡庸である。しかし、中はすごい。他の多くの王宮と同じように華美を尽くしている。また保存状態がよい。まあイタリア王といっても、歴史は新しいからだろうが。しかしもとは法皇の別荘だったといい、16世紀に遡るらしい。しかも、他のこういうところと違ってすいている。そしてそれぞれの部屋に係員と衛兵がいて、人手をかけている。こういう膨大な金をかけた宮殿

を見て回ることは、常に馬鹿げた浪費をしたものだという感想を生み出すものだが、今朝は何か気持ちよく見て回った。

次にDoria Pamphiljに行ってみたが、10時開館なのでまだ早かった。天気がよいので、Foro Romanoを歩いてみることにした。昔ここを上から見た記憶はあるが、あの頃は中を歩けたのだろうか。とにかく、今は自由に歩くことができる。陽射しが強くコートを着ていると暑い。コロセウムまで歩いた。コロセウムに入るのには切符を買う行列ができていたので、入らずにまたForoを引き返した。途中でPalatinoの丘に登り、美術館を見るのに入場券を取るところがあってよほど入ろうかと思ったが、券はコロセウムと共通だというし、先があるのでやめにした。

来た逆に戻って、改めてDoria Pamphiljに入った。ここにはものすごい量の絵があり、それらを所狭しと並べている。一つ一つには表題などの札が付いておらず、記号だけが付いている。音声ガイドを借りると時間ばかりかかり、しかも自分の自由に鑑賞できなくなってしまったのでそれはやめて、代わりに受付の人が貸してくれた記号と対照した一覧表を活用し

た。ここでの売り物は何と言ってもカラヴァッジョの「エジプトへの脱出」という怪しく美しい絵と、「マグダラのマリア」が居眠りをしているようなこれも不思議な絵である。またTizianoのSalomeとか、ラファエロの「二人の肖像画」とか、ティントレットの「青年の肖像」もある。あとBarbieri Guercino (1591-1666) がたくさんあって、なかなかよいものがある。Guercinoはカピトリーノにも何



Colosseum

点かあった。この人はローマの人らしく、帰りに駅でGuercino展が2/10から6月の何日かまで開かれるというポスターを見た。

他にいいなと思ったのは、Mattia Preti (1613-1699) の何点か、たとえば"Concerto", "Il Tribute della Moneta", "Maddalena". 後、Guido Reni (1573-1642) もいくつかあったが、とくに好きではない。VelazquezのPope Innocent Xの肖像画もあって特別な展示のされ方をしているが、画題のせいもあってとくに感心しない。Giorgio VasariのDeposizione della Croceというのがある。とくによいと思えないが、Firenzeを思い出す。後、Rembrandtと書いてある男の肖像画が1枚あり、確かにレンブラントらしいが、きわめて見にくいところにその他大勢と一緒に置かれている。後、LorregioとかDomenico Fetti(1589-1623)とかQuinten Massys (1465-1530) の"Due vecchi in preghiera"とかをちょっと面白いと思った。また入口に近いところにAndrea del Saltoの聖母子像がある。格別優れた絵とは思えないが、特別な扱いをされている。これがゲートに出てくる「フリース伯はだいぶ買いこまれたが、中でもアンドレア・デル・サルトーのマドンナは六百ツェッキノで買われた。．．．絵は信じがたいほど美しいもので、それを見ないことにはとうてい想像もできない。」(下, p.30) そのものであろうか？

この後、別の美術館に行こうかどうか考えた。とりあえずPalazzo Colonnaに行ったみたが、そことGalleria Colonnaとは別だと言われた。案内書にはここにあるように書いてあり、大きなコレクションがあるようなのだが、もう美術館はいいやという気になって、とにかく即興詩人のバルベリニ広場に行くことにした。V. del Corsoを北上すると、左に浮彫を施した大きな柱がある広場がある。この柱は、Santissimo Nome di MariaのそばにあるColonna Traianaに似ている。Colonna di Marco Aurelioというらしい。このどちらか、あるいは、両方のコピーが、そういえばロンドンのA & V博物館にあっ

た。で、このアウレリウスの方の広場をPiazza Colonnaというらしいが、その道を隔てた向かいの建物をGalleria Colonnaというらしいことを発見した。しかし、どう見てもデパートで、美術館とは思えない。この辺、案内書の記述も統一がとれていない。そのGalleria Colonnaの先を右折すると、それがV. del TritoneでP. Barberiniに通じている。和辻が泊ったというカチンの寺の前のホテルというのは、分からない。一つ小さい教会があり、名前はカプチョでなかったが、向かいにホテル風の建物があつた。しかしその建物は、少なくとも今は新聞社のようなつた。

P. Barberiniというのは、取り立てて面白味のない広場だつた。その向こうにParazzo Barberiniがあり、ここがまた美術館になつていて相当な数の収集品があるらしいが、そこに入るのはやめにした。

V. V. Venetoを歩いてみた。フェリーニの「甘い生活 La Dolce Vita」で有名になつたところだ。登り坂道で大きくうねるところまで来て、その先に行くのをやめにした。カフェやレストランや高級店などが並ぶのはこの先らしいが、もういいという気になつた。それよりちょっと戻つて、階段を上り西の方に歩くと、Trinita dei Montiに出られることが分かつたので、そつちに向かつた。実は昨晚食べそこなつた、というより行きそこなつたNinoが近くなので、昼食をそこにしようかと思つた。

教会前の素晴らしい眺望のところに出た。これがかのスペイン階段であることに、しばらく気がつかなかつた。スペイン階段を降り、Ninoのある路地に入つたが、店は閉まつていた。そこで次に気がかりだつたことが、頭に登つてきた。「ヴィーナスの誕生」があるはずのPalazzo Altempsである。地図を見るとこのまま西に向かえば、それほど距離ではなさそうだ。それにそこに行く間に、よいレストランが見つかるかもしれない。

ちょっと話が前後している。P. SpagnaからVia Frattinaを西に歩いたら、Pal. Ruspoliに出た。そこで地図を見て上のように考えたのだ。この広場までは人出が多かったが、そこから西に進むと急に人の姿が見えなくなった。レストランはあっても閉まっている。



Spanish Steps

V. Portoghesiあるいはその先のV. dell'Orsoという通りでHoteliaというような看板があり、何人か人が入るのでレストランらしいと入ってみた。中は意外と広い。ちょうど1時頃で、昼食サービスを始めたところだ。

ここで頼んだ鶏のローマ風ペペローニ入りというのが、最高だった。これを頼んだのは鶏が安いからでもある。€9.5だったと思う。とにかくローマの食事で、これが一番よかった。そして、ようやくAltempsにたどりついた。もう時間があまりない。とにかく「ヴィーナスの誕生」とGalatian killing himself with his wifeと、後いくつも見

というわけで、何だかやけに頑張って歩き回った3日間だった。15:30発のミラノ行きで、ミラノに20時ごろ着いた。

2/9 (月)

久しぶりに大学に行ってCarloに会った。中谷さんにセミナーを



やってもらふことを相談し、2/20
ということに仮に決めた。Carlo
が今日コンサートがあるから行か
ないかと誘ってくれた。Serafe Musicaliというところで、場所はVia
Conservatorioである。出しものはPhilharmonisches Capriccio Berlinと
Alessandro Carbonareというクラリネット奏者によるモーツァルトと
ウェーバーのクラリネット五重奏曲である。

大学を早めに出て、ジュネーブ行きとピサ行きの切符を買った。

コンサートはよかった。Carloを探したが見つからなかった。クラリ
ネットはなかなかうまい。気のせいか第一バイオリンがあまりよく
ない気がした。第二バイオリンは若くてきれいなイタリア女性だっ
た。ウェーバーの曲も有名だと思うが、あまり記憶になく、初めて
聴いたような印象だった。

2/10 (火)

あと2週間である。

岩波からゲラの後半部分が来て、一日その校正にとりかかった。
夜、ひどい下痢をした。昨夜食べたCarpaccioがいけなかったか。そ
れとも旅行の疲れが出たのか。

2/11 (水)

午前中で校正を終え、Alessandraに発送の手配を頼んだ。ローマにい
た日曜は素晴らしい天気だったが、帰ってからも連日快晴で気持ち
がよい。

小松英雄「徒然草抜書」（講談社学術文庫） 読了。

この本は多分、東大出版会のUPの4月号で毎年載せている新入生向けの読書特集で、誰かが薦めていたんだと思う。しかし、講談社学術文庫ではずっと絶版のままだった。1年ぐらい前に神田の古書店で講談社学術文庫の絶版ものを揃えているところがあって、これを見つけた。今度の旅行にこの本を持ってきたのは、ヨーロッパ文化の中で1冊ぐらい日本の古典文学について読むのもいいのではないかと思ったからである。しかし、読んでみるとその思惑はかなり外れた。

この本は徒然草の内容を鑑賞する本ではない。徒然草の中から5つのごく短い断章を選び、その解釈につき文献学的な立場から微に入り細を穿った論考を進め、従来の「通説」が間違っていることを主張する。通説を批判する論調はかなり攻撃的で、そのためか、あるいはここで主張されていることにその後異論が多く出たのか、その辺が絶版の理由なのではないかと憶測させる。実際、この本の奥付は1990年に第1刷発行、1994年7月15日第5刷発行となっていて、第5刷まで順調に出たのに突然絶版になったという印象を与える。買った本は古本ではなく、ゾッキ本というものと思うが、多分これが一番最新の刷ではないだろうか。

「蜷という貝」の議論はちょっとおかしいと、少なくとも途中までは思った。「みなむすびといふは糸を結びかさねたるが蜷といふ貝に似たればいふとあるやん事なき人おほせられきになといふはあやまりなり」これを素直に読むと、最後の「にな」が誤りというのは貝の呼び方ではなく結びの呼び方だと取れる。というのは「みなむすびといふは」という主題提示があって、それが続いているので、第2文の主題も「結び」だと思ふのが、日本語の文章法だと思ふからである。それを小松は「・・・この文章の書き出しは、「みなむすびといふは・・・」となっているのですから、それは最初から動かしが

たい語形として前提されている，と考えるべきでしょう」という強引な議論で，誤っているのは貝の名だとする．

結論的にはそうかもしれない．というのは貝の方は「ミナ」が「ニナ」になったことが跡づけられているのに，結びの方はそのような変形がなかったらしいからである．しかしどうも釈然としない．

2/12 (木)

昨日，Mauro Pezzeから電話があつて，明日の（つまり今日のことが）セミナーの開始時間についてGiovanniのミスで，ぼくとは14:00にしているが，学内のアナウンスはずっと10:30のままになっている．それで10:30に間に合うように来てもらうことはできるか，ということだったので，もちろんOKした．それでGiovanniが9:30にPolitecnicoに迎えに来てくれた．

今日もまた快晴である．こういうことは珍しいらしい．Giovanniはぼくと，LimerickのICSEやウィーンのIWPSEで会っているという．そういえば顔に見覚えがあるような気もする．昨年，ロンドンのUCLのWolfgang Emmerichのところに6か月行っていたそうだ．

Giovanniはこちらの普通の研究者と同様ラフな格好だが，大学に着いてMauroの研究室を訪ねると，彼はきちんとスーツを着ている．10時ごろ着いて，30分近くはMauroから彼のグループが何をやっているかの話を聞いた．なかなか活発なようだ．分野はtestingである．

セミナーは先週L'Aquilaで同じ話をしていることもあり，うまくいった．Mauroの研究と結びつけられないかと，終わってから彼は真剣に質問してきた．若い研究者や学生たちも，熱心に聞いていた．

昼食を学食で摂り（いつもPolitecnicoの近くの大学食堂で食べて居るのと似ている）、帰りはMauroがPolitecnicoまで送ってくれた。

明日からGeneve近くのLehtiさん宅を訪ね、来週はPisaに2泊3日で行き、中谷さんが来、そしてもう帰国である。

夜、CarloとAnny夫妻の家に行った。Piazza Guardo 15というところで、大学に近い。自転車で通っているというのも肯ける。地図を見るとPorta VeneziaでLinea 1から乗り換えて、青い線で近くのDa Teoという駅に行くのがある。乗り換えが2度あるが、それを試してみた。P. Veneziaに行ってみると、この青い線は地下鉄ではなく、何とかいう名前の汽車である。ホームに行ってみると、来るはずの汽車が9分遅れという表示になっている。地下鉄の切符で乗り継ぎができるのかどうかも不安だったので、諦めて歩いて行こうかと階段を上り始めたところに、汽車が来たので乗った。1駅で目的地に着き、そこからの道はよく調べてあったので迷わなかった。行ってみると自分のアパートと同じような形式の建物である。もちろん部屋は大きいし買取らしい。3階分を使っているが、娘2人が独立して、下の男の子だけが同居しているので、1階分が不要になったと言っていた。かぼちゃのリゾットとタコを煮た料理で、イタリアの家庭料理らしくとても美味しかった。

2/13 (金)

11:10発、Geneve行きの汽車
(IC324, Geneve着15:42)に乗ったところ。

Arona駅から先、右手にずっと湖が見える。ここが湖水地方なのだ。出るときは曇っていた空も晴



れて、美しい。教会や家々が散在している。次の駅はStresaだ。

Carlo and Anny

湖が見えなくなり、アルプスが見えてきた、と思ったらまた湖だ。Domodossolaという駅で、パスポートの検査があった。

Brigという駅に着いた。ドイツ語圏らしい。山に囲まれ雪があるが、陽射しが明るい。3時にLausanneに着いた。

予定通り、15:40にGeneveに着いた。Teuvoがホームまで迎えに来てくれた。Teuvo Lehtiさんは、オヤジが仕事で1955年から57年までバンコックにあった国連の機関ECAFEに勤めていたときの、同僚である。以前ここを訪れたのはのは3年前の2月。土居さんとパリのユネスコの会議に来た時だった。家の場所はフランス領だが、ジュネーヴに近い。3年前の時は、住んでいる家を売りに出し、反対側の家を改造してそちらに引っ越すための準備中の時だった。今回はだから、その新しい家である。しかし改造中の様子を見せてもらっているので、それがどうなっているのかが分かる。

TeuvoとJuneの二人とも元気そう
だ。Teuvoは相変わらずよくワインを飲む。夕食はサラダとウサギの煮込み料理だった。ウサギは柔らかくソースがよく効いておいしかった。

2/14 (土)

あいにくの曇り空である。彼らは朝は遅いと言い、9時ごろ起きてくる約束だった。ぼくは夕べ11時



June and me in front of their house

に寝てしまったので、6時40分に起きた。しばらく Teuvo が置いておいてくれた村上春樹の「ダンス・ダンス・ダンス」の英訳本を読んだ。初めて読む村上春樹の小説が英語というのも面白いが、よい英訳である、8時に外に散歩に出てみたが、寒いので早々に切り上げた。



Teuvo and June

朝食後、最近近くに越してきたという次女のTaruの家に3人で行った。ご主人はブラジル人でずっとブラジルに住んでいたが、貿易の仕事で最近こちらに来たという。Teuvo達の家と違って町にあるが、広くてとてもよい家である。もうすぐ16歳になるという男の子とその下にやはり男の子がいるらしい。ただどちらも家にはいなかった。Teuvoから聞いていた話は多分長男のことだと思うが、ブラジル語である程度の教育を受け、家では英語なので英語も分かるが、その後ドイツに行ってドイツ語をやらなければならないと思ったら、今度はフランス語の学校で、いずれも中途半端で読み書きがきちんとできるレベルでなく、本人は学校に慣れるのに悩み、親は教育という点で心配しているらしい。国際的な悩みである。

ご主人のThomasというのも、なかなかの好人物だった。それから近くの路上マーケットに行った。バレンタイン・デイということで花をたくさん売っている。しかし中心は食料品である。Teuvoがカキは好きかと聞くから好きだと言ったら、夕食用にSaintなんとかという種類を1ダース買った。Juneもいくつか買い物をした。

次にゴルフコースのレストランといふところに連れて行ってくれた。濃い柄の壁紙が一面を埋めている格調の高い店だが、厨房にトラブルが生じている（とTeuvoが聞き出した）らしく、Juneとぼくが頼んだスープがまず1つしか来ず、1つは通っていなかったらしいが（これはウェイトレスのミスだろうか）、2つ目がなかなか来ないとか、Teuvoが頼んだ前菜はさらに遅いとか、問題があった。主菜もぼくはJuneと同じラムのNavalonne風というのを頼み、ぼくはなかなかおいしいと思ったが、Juneは煮方が足りず十分柔らかくないと文句を言っていた。TeuvoのSousin (?) というソーセージは美味しいと言っていた。



The Lehtis

それからワイン用のブドウ畑が続く斜面に連れて行ってくれた。ジュネーブ湖を見下ろす素晴らしい眺望だが、あいにく天気が悪い。

その後は湖畔まで下り、Cafeに入ってコーヒーを飲んだ。さきほどブドウ畑を見たが、この辺のスイスの白ワインは、質が高くて値段も高いという。Juneが頼んだ白ワインを試飲させてもらったが、強いフレーバーがある。

夕食はカキと白ワイン、チーズと赤ワインという簡単なものだったが、こういうのも悪くない。Teuvoがカキの殻を外すのをずっと見ていた。

2/15 (日)

今日も曇り。結局Dance, dance, danceは60ページぐらい読んだ。日本に帰ったら買うことにしよう。Teuvoはカズオ・イシグロも読んでおり、なかなかの読書家だし関心の幅も広い。ブッシュにきわめて批判的で、最近のアメリカはおかしいという。相変わらず写真に精力を注いでいる。

今日は3人でGeneveに行き、美術館に入った。収集品はそれほど多くはない。Corotのよいのがたくさんある、Geneveの画家ではLiotardにいいものがある。

それからレストランに入った。もともとTrattoriaだったのにずいぶん高級になり、雰囲気が違うと二人は言う。ここの湖で捕れるperchをオイルで焼いたのを3人とも食べたが、よかった。

駅まで送ってもらい、14:18発ミラノ行きに乗った。帰りの汽車の中で晴れてきた。皮肉なものである。

Teuvoの話で面白かったものの一つに、若い頃ローマでよく行っていた店に、ヒロヒトというあだ名の日本人がいたというのがある。よく冗談を言い合っていたが、あるとき急に店からいなくなったと思ったら、東京に帰ったという。その後しばらくして、新聞でその男が始めた東京のイタリアンのレストラン・チェーン「アルデンテ (Al Dente)」の紹介を見て、びっくりしたというのである。

しかし、TeuvoもJuneもフランス語もペラペラみたいだし（大体住んでいるのがフランスだ）、シェークスピアはイタリア語で聞いた方が現代イタリア語なのでよく分かったという。うらやましくなる（なお、Teuvoはもともとはフィンランド人、Juneはイギリス人である）。

2/16 (月)

Carloがまたコンサートに誘ってくれた。アンドレシフのベートーベン・ピアノソナタ全曲演奏（といっても3年かけるらしい）の第1回で、1番から4番までである。素晴らしい演奏だった。シフはタッチがソフトで透明な音を出す。1986年に入院していた時、FMでバレンボイムのベートーベン・ソナタ全曲演奏を放送したのを孝子に録音してもらって繰り返し聴いていたのを思い出す。

Carloの話では、しばらく前にポリーニがスカラ座で全曲演奏したことがあった。その時は2週間ぐらいで全曲やったという。

Genova, Pisa, Lucca

2/17 (火)

今日からPisaである。9:10発のGenova行き（その先のどこかまで行く）に乗ったところ。出るときにちょっと慌てて、朝食の後片付けをする時間がなかった。昨日は春のような暖かさだったが、今日は曇りで今にも雨が降り出しそうである。

Genova10:42着。実際はちょっと遅れて10:50頃だった。着いたときはきれいに晴れた。駅の案内所で地図をもらい、行きたい場所をチェックした。それから歩き始めた。最初逆の方向に行き、海を見て気がついた。

まずPalazzo Realeの前を通った。この通りには重厚な建物が並んでいる。しばらくして自然にVia Cairoliに入り、それからVia GaribaldiになってPalazzo Biancoの前に来た。

中に入って見たが、美術館は開いていないようだった。さらに歩いて広場に出、道なりに右方向に行くと町の中心のPiazza de Ferrariに

出た．大きな噴水がある．手前に劇場があって，シモン・ボッカネグラのポスターが出ている．

右に折れると別の広場がある．Piazzo G. Matteottiという．そこにPalazzo Ducaleがある．中に入って案内所で聞いてみたが，今は中を公開していないという．3月からルーベンス展がここで始まるので準備中なのだそうだ．ここに限らず町のあちこちにGe Nova 04という町興らしいポスターが目立ち（これはミラノでも見た），また方々で道路や建物の工事が行われている．かなり金がつぎ込まれている感じだ．

その先のS. Lorenzo Cattedraleに行った．この町のDuomoにあたるのだろうか，Cattedraleという名だ．和辻の本にも出てくる．内部の天井は新しく作られたものであるらしく，真白で周囲とそぐわない．立派なフレスコ画とステンドグラスがある．外に出ると正面のファサードはかなりユニークである．紫系の石を使い，幾何学模様があってビザンチン風である．



Palazzo Bianco



Piazza de Ferrari



Palazzo Ducale

Chiesa del Gesu e dei Santi

Ambrogio e Andreaにも入ってみたが、ミサ中だった。ここも外は古めかしいが、中はきらびやかである。近くの分かりにくいところに、S. Matteoがある。しかし閉まっていた。外から和辻のいう回廊を眺めた。

泉の広場に戻って、Accademia Liguastica di Belle Artiに入ろうと思ったが、工事中だった。それで、Porta Sopranaを見に行った。12世紀に造られたという。そこからカテドラル方向に歩いて、目についたレストランに入った。"Ristorante Panson del 1790"という。ここでTrofie pesto genovese（このpesto genoveseとは書いてなかったので最初分からなかったが、ウェイトレスが教えてくれた）と何とかいう地元のシラスのような魚を茹でてボールのように盛ったものを食べ、どちらもきわめて美味で満足した。

食事後、San GiorgioというPalazzoに行ってみた。地図に13-16世紀とある。和辻の本にも出てくる。海がすぐ目の前である。

近くにあるはずのGalleria Nazionaleに行ってみようとしたが、うまく見つからなかった。辺りを歩いているうちに、Palazzo Rossoが見つかったが、もういい時間になったので美術館は諦めた。汽車は14:52である。すでに14:30だったが、余裕があると思っていた。しかも来る時と違って、Piazza della Nunziataから、真直ぐ駅の方に行かず、海の方に下りてしまった。海沿いの道を歩いたが結構距離がある。駅の先に出てくる道を上にあがって駅に近づくころには、走っていた。せっかく楽しんだ食事とワインが、今となっては動きを鈍くしている。気温は高く汗ばむほどである。

駅でプラットフォームが20番であることを確かめ、ようやくプラットフォームに着いた。まだ14:50である。しかし、汽車の扉が閉まっ

ている．そして動き出した．何と定刻前に出てしまうのだ．呆然となった．

気を取り直し，切符売り場で聞くと，次は16:52だという．ちょうど2時間後だ．地図をもらった案内所に行って開いている美術館はどこかと聞くと，リストをくれるだけで不親切である．疲れたのでタクシーに乗り，Palazzo Rossoに行った．

Guercinoがあって，クレオパトラなど俗だがきれいだ．Bornardo Strozzi (1581-1644) は多分Veneziaで見たが，Genova出身でVeneziaで活躍したらしい．これもまあよい．後，Mattia Pretti (1613-1699)．これもローマで見た．和辻が挙げているものでは，Anton van Dyck (1599-1641) は何点もあったが，ルーベンス，スルバラン，カルボナーネはここにはなかった．

今度は早めに駅に行き，16:52のローマ行きに乗った．Antoniaの秘書Saraが取ってくれたRoyal Victoria Hotelは，アルノ川に面したクラシックなホテルである．L'AquilaのPaolaの同僚教授が，Pisaのホテルはイタリアの中で最もレベルが低いと言っていたのを思い出す．その理由は旅行者が1泊しかしないため，斜塔を見たらそれでPisaは終わりだからというのである．

しかし，駅からホテルに歩く間に，何組かの日本人のグループを見かけた．というか日本語の会話を耳にした．ホテルの部屋はだだっ広く，床は板敷き，家具は皆アンティーク風の木製，浴室もやけに広く，シャンプーがなくて石鹸だけが置いてあるというホテルも久しぶりだ．しかし清潔で，お湯もちゃんと出る．受付の男性も大変愛想がよく，感じのよいはにかみを見せる．Antoniaがメールで薦めていたOsteria dei Cavalieriの場所を，その受付係に教えてもらって行った．メニューをいろいろ見たが，単純に魚のコースにした．最初のムール貝とアサリの蒸し煮は，ムール貝が開いていないのやア

サリの貝が割れているのなどあって、手抜きを感じがした。拳句はムール貝を無理に開こうとしてスープをはね散らかし、シャツを汚してしまった。しかしその後の魚介のスパゲッティ（トマトソースではないがピンク色のソースがかかっている。何だろう）、イカの煮込みとだんだん良くなり、デザートタルトはとてもよかった。

2/18 (水)

朝、9:15にAntoniaが車でホテルに迎えに来てくれた。CNR (Italian National Research Council) のISTI (The Institute of Information Science & Technologies) は、町の中心からそれほど遠いわけではない。ここができたのは4年前で、他にCNRの病院や医学研究施設などいくつかの研究所が集まっているという。建物はイタリアらしからぬ白いモダンな平凡なもので、内部も真直ぐな長い廊下が正方形を形作る単純なものである。

まず、AntoniaがこのInstituteの概要、主なグループ、そして彼女のグループのプロジェクトなどを説明してくれた。それからコーヒーを飲み、謝金の手続きをし、Directorに紹介してもらった。Piero Maestriniという。次にSystem and Software Evaluation Center の中心人物（名前が分からない）に会った。SPICEに相当関与しているらしい。このグループのもとにはPOSのソフトウェアの認証にあったという（法に照らして正しいかを調べる）。それからプロセスの評価にも展開してきたということである。次にFormal Methods and Tools Labのやはり女性リーダーに会った。3種類のModel Checkerを作るなど、ここはかなり力がありそうだ。

そこで昼食。午後はHuman Interface in Information Systems Labのリーダーに会った。

午後3時からぼくのセミナー．その前にCarlo Montaneroが来て，セミナーも聴いてくれた．セミナーの後，Carloの車でPisa大学の彼の学科，新しい建物に連れて行ってもらい．しばらく話をした．Ugo Montanariは現在Directorだが，奥さんのガンが発見され，そのためMilanoに移ろうとしているという話で，今日もいなかった．

夜は8時にAntoniaがホテルに迎えに来て，La Grottaというレストランに行った．彼女はCarloを誘ったのだが，彼もまたMontanariと同様に奥さんの具合が悪いため参加できないというので，代わりに間もなくPh.Dが取れるというAndreaが加わった．



Antonia & Andrea

前菜をたくさん取り，ぼくは何とかいう幅の広いパスタに獣

(game) のソースをかけた，かなり濃厚なものを食べた．みんなも第1皿を食べたところで第2はいいということになり，デザートに進んだ．Andreaとぼくはリキュールに固いビスケットを浸して食べるものを頼んだが，彼はすべて平らげ，残ったリキュールも飲み干したので，ぼくもリキュールを飲み干した．それから二人でグラッパを飲んだ．彼はそれから運転して帰るというのだが，大丈夫だろうか．

2/19 (木)

あいにく雨である．昨日レストランにいるとき，何度か雷鳴がし，強い雨が降った．夜のうちにやむかと思ったが，朝も降っている．しかし予定通りLuccaに行くことにし，首尾よく9時ちょっと前のバ

スに乗った。40分ぐらいかかる。途中、トスカーナの美しい農村風景が見える。

Luccaは古い城壁都市だが、Pucciniの生地としても知られる。Luccaに着いて、適当に町の中心と思しき方向に歩き始めた。途中でS. Paolini教会に入ってみた。他に誰もいない。上の方から何だか恐ろしい音が聞こえる。風の音かと思ったが、後から考えると鳩の声がああ聞こえるのかもしれない。

中央広場に出た。S. Micheleという立派な教会があって、これがduomoに違いないと思った（後で間違いであることが分かる）。そこから適当に歩き、入口近くに戻ってPalazzo Mansiという建物が美術館になっているので、そこに入った。いわれはよく分からないが、昔の金持ちの家に違いない。絵もたくさん展示されているが、大したものはない。Vasariが1枚あった。Veronezeも1枚あったが、保存状態がきわめて悪く、全体が赤黒いばかりで何が描いてあるのかよく分からない。とにかくここで思いのほか時間をとった。

バス乗り場に行ってみると11時5分のバスが出たばかりで、次は12時5分である。そこでLuccaの名物という古い城壁の上を少し歩いてみた。それからまた町の中に戻り、もっと早く買えばよかったのだが、ここで英語のガイドブックを買った。そしてDuomoが別にあることを発見したが、場所がバス乗り場と逆の位置なので、行くのを諦めた。とにかく一昨日で懲りたので、遅れないようにしなければならない。

帰りのバスの途中で、ピサの斜塔の近くで降りた。往きにその近くを通ることを見てきたので、予定の行動だったが、ちょっと降りるのが早すぎてだいたい歩いた。着いたのが午後1時近かったが、12:45-15:00は休み時間で教会も礼拝堂も斜塔にも入れない。とにかく今日はついていない。

歩いてホテルまで戻り，その近くとAntoniaから聞いていたVecchio Dudaというレストランで昼食を摂ろうと探したが見つからない。行きつ戻りつして結局ホテルでリュックを取りついでに聞いたら，すぐ右だという。行ってみると閉まっている。それで気がつかなかったのだ。それで駅方向に歩き，適当に見つけたIl Ruragheというレストランに入った。いかにもイタリアの気障男という感じの中年のウェイターがいて面白い。例のTuristicoというのを頼んだ。値段は€13と安い。スープが旨かった。鶏はまあまあ。フルーツは何にするかと言うから，リンゴにしたらポンとまだラベルまで付いているリンゴをそのまま置いたので驚いた。

15:03に遅れてはいけないと，余裕をもって，といっても14:45ぐらいになっていたが，ホームに行ってみると，しばらくして40分遅れだという。Genovaの乗り換え時間が10分しかないから，それに乗れないことが明らかになった。

逆向きのナポリ行きも30分遅れている。そしていい加減なことに，アナウンスがあるたびに，遅れ時間が40→45→50と増えていく。中



Pisa Baptistery



Pisa Leaning Tower

谷さんのホテルに食事を誘いに行くことにしていて、18:50着の汽車だと言ってある。2時間ぐらい遅れることになるだろうか。

車中で車掌に言うと、代わりに17:58のミラノ行き（ICではない）で、19:45に着くという。ところが電車はすでに50分遅れで、これにも乗れそうにない。頭に来る。Genovaに近づいて、車掌が通ったのでそのことを言うと、このミラノ行きに乗る人が多いので、電話して待ってもらうように頼んでい、着いてみないと分からないが、と言う。この若い女性車掌はちゃんとした英語をしゃべってくれるだけでなく、機転もきくようだ。さらに次のGenova何とか駅ではなく、2つ目（Genova Piassa Principe）だと念を押してくれる。隣のボックス席にいるシスターも同じ乗り換えなのか、1つ前の駅を離れる前から出口に向かった。ぼくも早めに出口に行くと、そこに車掌とシスターと人の好きそうなおじさんがいて、盛んにしゃべっている。ホームに着くとシスターとおじさんが走り出したので、ぼくも後を追った。彼らはホームをつなぐ地下道に貼ってある時刻表を見て、17番だと言った。日本の駅なら。とくにこういう状況なら、駅の方で親切なアナウンスがあるはずだが、そういうことは一切ない。でぼくも17番に走ると、確かにMilano行きが停まっていた。ところがシスターは、あれこれはMilano行きだと言って、予定が違うようだった。とにかくぼくはそれを無視し、開いているドアが2等車だったが（持っている切符は1等）、とにかく乗ることが大事と飛び乗った。席は空いていて2等でも十分だ。（しかし、座席指定で余計に払っている分もムダになるというのは、システムとしておかしい。）

ボックスに一人で座れるほど空いている。隣のボックスの紳士にミラノ行きであることを確かめ、一安心である。Genova乗り換えは、行きも帰りもとんだことになった。結局Genovaに着いたのは60分遅れであった。昨晚、Andreaの話で、Zurichに行くのにFirenze乗り換

えの切符を取ってあったが、Pisa→Firenzeは1時間ぐらいの距離なのに、その列車が1時間半遅れてZurich行きに乗れなかった話をしていたのが、何だか偶然と思えない。

8時過ぎにミラノに着き、中谷さんの泊っているVia Napo TorrianiにあるSan Carloというホテルに直接行った。近くのRistorante Cavalliniに行ったが、なかなかよかった。ぼくはCrudeか何かのCarpaccioとOrate(?)という石鯛みたいな魚を焼いたもの、彼女はRisot Milaneseとmonk fishを食べた。

2/20 (金)

朝、9:15に中谷さんにぼくのアパートの前に来てもらって、Politecnicoに一緒に行った。あいにく今日も雨。昨晚、雪が降って大学の周りは積もっている。ちょうどCarloがその前の学生のゼミに出るところで、ぼくの部屋にメモを貼り付けたところとのことだった。

学生の話（移動エージェント・モデルのLimeを形式化するもの）の後、まずぼくが中谷さんの紹介と話の入口をつけ、あとは彼女にしゃべってもらった。Carloは12:30から会議があるので、昼食を残念だが付きあえないと言うので、二人でカフェテリアに行った。メールの整理をしてから、CarloがPinacoteca AmbrosianaでMessinaの特別展をやっていると教えてくれたので、そこに行った。前に行ったのが2か月前なので、だいぶ忘れていて、Messinaの特別展といっても2点だけで、修復したものを見せている。

中谷さんをLa Rinascenteに案内して、そこでいったん別れ、8時にホテルに迎えに行った。昼に一度行ったことのあるMalavogliaに行ったが、予約なしで行ったので待っている人がたくさんいた。しかし、とにかく待っていると、案外入れ替えがあって、9時には席に着いた。ウェイター長のような男が順番を頭に入れていて、メモをと

ることもなく手際よく案内するのに感心した。待つ間大きなかま（まるで陶器を焼く窯のようなもの）でピザを焼いているのを見たが、ピザの皮を手だけで丸く伸ばすところからして、技である。他に魚や野菜などの食材も見えるように並べられていて、飽きない。Fungi porciniのピザとAntipasta di casaを取り、主菜はぼくがエビや魚の焼いたもののmisto、彼女がフライのmistoを頼んだが、旨く量も多く満足した。

2/21 (土)

中谷さんには気の毒だが、今日も天気は悪い。雪が降っている。ひどい降りではないが、駐車している車の屋根は夜の間には皆白くなっている。

いつからか、帰る日を24日火曜日だと思い込んでしまっただけで、成田からの宅配便の申し込みをインターネットでしようと航空券を見て、23日（月）であることを確認してびっくりした。月曜に大学に行くつもりでいたが、出発が20:45なので午前中挨拶だけにでも行けるかもしれない。

午後から雨の中を買い物に行った。事前にどこにどういう順で行くかを決めておいたので、比較的効率よくいき、美季子や福田さん用に手袋（3つ）、財布（2つ）を買い、孝子に言われたPradaはその製品がなかったが、調べておくということでまた明日来ることにし、Enoteca Cottiで赤ワイン3本を土産用に買い、High Tecでマフラーを1枚買った。

食料を1日分余計に買いこんだが、多くの調味料や整髪剤などが割とうまいタイミングでなくなりそうだ。このノートもそうである。荷造りを少しずつ始めたが、本類をすでにかなり送ったので、それほどぎゅう詰めにしなくても済みそうだ。

2/22 (日)

今日もしよぼしよぼ雨が降り、冴えないことおびただしい。買い物に出かけてはみたが、日曜なので閉まっているところが多く、Spigaという高級ブランド街にある、というかそこでたまたま見つけたArmandolaという食料品店で、GorgonzolaのpiccanteとPecorinoとParmigianoを少しずつ買ったぐらいで、朝、孝子に電話して確かめたPradaでは結局買わず、また前から買おうかどうか迷っていたBoggiの靴を意を決して買いに行ったら、ちょうどサイズがなかった。

2時前にアパートに戻り、残ったスパゲッティとキノコなどで昼食を作った。うまいものだ。その時、ワインを少し飲んだので、その後ウトウトし、3時半ごろまた出かけた。Limaの辺りに行ってもやはりほとんど閉まっているので、またDuomoに行き、Palazzo Realeでやっている浮世絵展を観に行った。ところがすごい行列である。行った時間も悪かったのだろうが、この展示は2/7からでまだ比較的新しいし、日曜日は店が開いていないから、美術館に人が集まるのだろう。近くのvan Dyck展も行列ができていた。

しかし、この浮世絵展の行列はなかなか進まない。FirenzeのPalazzo Vecchioを思い出させる。45分ぐらい待ってようやく切符売場に来たが、別に安全検査をやっているわけではない。

入ってみるとやはりかなり観ている人がいて、また皆熱心である。しかし驚くのは、Honolulu, Boston, N.Y., Berlin, London, Genova, 東京, Chicagoなど、実に世界各地から作品を集めていることである。Curatorの力量を思わせる。ビラでは1999年に北斎展をやり、それが好評だったのに続く企画と書いてある。Ukiyoe, Il mondo fluttuanteというタイトルの意味をいろいろ想像したが、flowに近いことだろうぐらいしか頭に浮かばなかった。英訳を見たらfloatingとあり、何の

ことはない浮世を直訳しているのだが、どういうニュアンスでイタリア人には伝わるのだろうか。

でも、ここに集められた絵、あるいはそこに見られる人物、その服装、町並、建物、山や河の自然はみな美しい。そして花見から遊郭から芝居まで、多様に生活を楽しんでいることが伝わってくる。北斎、歌麿、写楽、豊国、春信、英之、広重、清信などいろいろある。ミラノの最後の夜に、浮世絵を観たというのも思い出になりそうだ。

そういえば、昨晩はTVでミラノとインター・ミランの試合を見た。これまでTVのサッカーをとくに注目して見ていたわけではないが、それでもミラノのトマソン、カカ、カフ、シェフチェンコなどの中心選手は何となく覚えた。それでミラノを応援していたら、前半は0-2で負けている。その前の週にLazioだったかに何と0-4で負けたので、また同じ伝かと思ったら、後半は何と3点取って逆転した。ちょっと興奮したし、これもミラノ最後の思い出という感じがした。

2/23 (月)

今日も雨。昨晩は残ったワインと中谷さんがくれた酒の残りを空けたのでだいぶ酔ったが、それで荷造りをしギューギュー詰めて閉じようとして金具に手をぶつけ怪我をした。やっぱり入れてみるとかなりきつい。本などをすべて送ったので楽かと思ったが、お土産のワイン3本などがきいて、量も重さも相当なものだ。

9時に受付の彼女が出勤直後のところを捕まえて、支払いをした。すでに2か月分を払っていることを忘れていて、また2000ユーロ払うものと思っていたが、彼女の方できちんと支払いの証拠を見せてくれた。電話が2/13までしか付いていないので昨日電話したと言うと、

ちょっと調べて別に結構ですという。鷹揚なものである。NGHでは depositから引き落とすと言っていた。

9時過ぎに大学に行き，Carloに挨拶をした。10時からセミナーがあるという。Amyの知り合いでアメリカから来た何とかいう中国系の人がsensor networkの話をするらしいが，出るのはやめた。Amyにも挨拶し，Alessandraに鍵とカードを返し，不要な書類を処分し，11時前に大学を出た。



Leaving Residence de la Gare

週末に残した買い物をしようと

思った。Cadornaに行って，Boggiで最初に入った店で靴を買おうと思った。昨日サイズがないとなって，かえってほしくなるから面白い心理だ。しかし，店は閉まっていた。Duomoのla Rinascenteに行き，孝子のバッグを何も買わないのも気がひけるので，Nannimiという銘柄の€160という安い，黒でシンプルなデザインのものを買った。男物の売り物をちょっと覗いたら，Zegnaで洒落たシャツを半額（€65）で売っていたので買った。それからBoggiに行き，他の店はないかと聞いた。そこでCorso Vercelli店を教えてくれた。支店はどこも月曜は2時から開くと言う。そこでいったんアパートに帰り，残った鶏をバルサミコで煮るというちゃんとした料理をし，残ったキノコやタマネギも消化し，おいしく食べてから2時に出かけた。まずもう一度Cadorna店に行ってみたが，閉まっている。Corso VercelliはLinea 1のCociliazione近くと聞いたが，この方面，つまりLinea 2よりも西側はほとんど未踏の地であった。しかし，Corso Vercelliはなかなかぎやかな通りで，デパートや店が並んでいる。Boggiを何とか見つけたが閉まっている。よく見ると，月曜は3時からとある。本

店の情報もいい加減だ。15分時間をつぶし、3時ちょうどに行き、とうとうroaferというのか薄茶のスエードの靴を買って帰った。荷物は完全に詰まって余地がないので、長年履いたBallyを捨てて、買った靴を履いて帰るしかなさそうだ。

アパートからMalpensa空港までのタクシーの途中でなかり霧が出たので、ロンドンからミラノに移る時のことを思い出し嫌な感じがしたが、飛行機は遅れることもなく出発した。チェックインのカウンターに異常に長い行列ができていたが、こちらは正規料金を払っているし、クリスタル・カードなるものも持っているので、ビジネスクラスのカウンターで手続きができた。しかし、荷物が全部で50kgで、20kgオーバーとやらで、それをまけても5kg分、何と225ユーロも取られた。

人名リスト

B

Luciano Baresi
Antonia Bertolino
Nilufer Betik

C

Keith Clark
Lori Clark
Vittorio Cortellessa

D

Annj Danwar
土居範久
Sophia Drossopoulou

E

Susan Eisenbach
Wolfgang Emmerich
Jacky Estublier

F

Anthony Finkelstein
Alfonso Fugetta
二木厚吉

G

Harald Gal
Philippa Gardener
Carlo Ghezzi
Anny Ghezzi

H

Cris Hankin
広瀬健
本田耕平

I

五十嵐淳
井上克郎
Benedetto Intrigila
Paola Inveradi

J

Michael Jackson
Pankaj Jalote

K

亀山幸義
紙名哲生
河野真治
Jeff Kramer
Nitza Kramer

L

Manny Lehman
Teuvo Lehti

June Lehti
Emmanuel Letier
John Lloyd
Emile Lupu

M

Nazim Madhavji
Jeff Magee
Neil Maiden
Kim Mens
Robin Milner
Ugo Montanari
Carlo Montangelo
Amy Murphy

N

中島震
中小路久美代
中谷多哉子
Bashar Nuseibeh

O

小川瑞史
Anne O'Neill

P

Mauro Pezze
Alfonso Pierantonio

R

Juan Ramil
John C. Reynolds
David Rosenblum
Zaraga Rudovico

S

Morris Sloman
住井英二郎

T

田口研治
高野明彦
Dick Taylor
妻木俊彦

U

Sebastian Uchitel

V

Axel van Lamsweerde
Dominique van Lamsweerde

W

Alex Wolf

Y

Guang-Zhong Yang
吉田展子
米澤明憲

吉村鉄太郎